MOBILE SUIT VARIATION

MSV-R

MOBILE SUIT VARIATION-R

F.S.S

Federation Survey Service

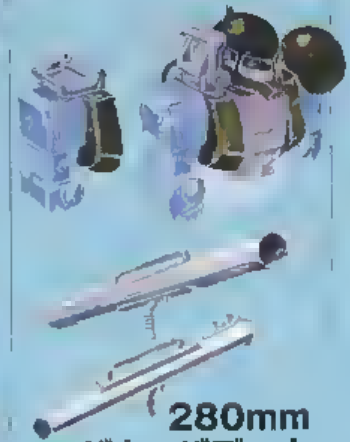
HANDBOOK

モビルスーツバリエーション　ザク編

MS-05B
ザクI

ジオン公国軍によるモビルスーツの開発及び実戦配備は戦争の様相を大きく変貌させた。国力において勝る連邦軍に対して、ジオン公国軍が開戦に踏みきり互角に戦う事を可能にしたのは、MS-05ザクをはじめとするザクシリーズの開発によるところが大きかった。またミノフスキー粒子の発見によりすでに確立された戦略・戦術が根本的に見直される状況もジオン公国軍にとっては追い風となっていたと考えられる。

バズーカ用ラック



280mm
ザク・バズーカ

MS-06J ザクII

MS-06F ザクII

MS-06J
ザクII（迷彩タイプ）

MS-05からMS-06 ザクIIへと発展したジオン公国軍の傑作MS。MS-06 ザクIIはその基本性能の高さと汎用性から、運用地、主目的などに準じて特化した性能をもつMS開発、そして生産ラインの基本となっている。これはコスト面での利点の他に、運用においても様々な利点をもたらしている。一つは整備作業の共通部分が多い事。もう一つは操縦システムにも共通部分が多く、パイロットの機種転換が容易に行えた事である。

MS-05Q

ザクI
（ノリス・パッカード少佐機）

SPEC
Height 17.5m
Weight 54.8t
Armament
ザク・マシンガン、ザク・バズーカ、ヒート・ホーク、ミサイルポッド

ジオン公国軍初の実戦用MSとなったMS-05ザクIは、後継機MS-06にトータルバランスでは引けをとるものの、パイロット達の評判は上々で、MS-05が旧式になってもこの機体を望む者は少なくなかった。

ザクIIの部隊配備が進む0078年には、熱核反応炉を換装するなどした改良型のMS-05がMS-05Bをベースに製造され、MS-05Gのナンバーが与えられた。間もなく配備されているMS-05Bの改修作業がスタートしている。第一期の改修計画は240機を予定していたが、新型MSの生産ラインを優先とするために162機で一旦計画は中止。改修計画が再開されたのは、大戦末期の事で完成に至ったのは30にも及ばなかった。

MS-06A
ザクII

SPEC
Height 17.5m
Weight 58.2t
Armament
ザク・マシンガン、ザク・バズーカ、
ヒート・ホーク、その他

●モビルスーツバリエーション
MSV-R

ジオン公国軍初の戦闘用モビルスーツとして採用されたMS-05のめざましい戦果に、ジオン軍の上層部は主力兵器としての将来性を確信。MS-05に続く主力モビルスーツの開発を指示した。これを受けたジオニック社が再設計し、新たなモビルスーツを開発する。完成したモビルスーツには当初MS-05の改良型としてMS-05ナンバーが予定されていたが、外観に加え性能の向上が顕著であったため新たな型式番号MS-06が与えられた。MS-06ザクIIの誕生である。

MS-06A ザクIIはジオニック社のズム・シティ工廠で生産をスタート。間もなくパーツをサイド3内に輸送してノックダウン生産を開始している。

MS-06A

ザクII
（教導機動大隊所属機）

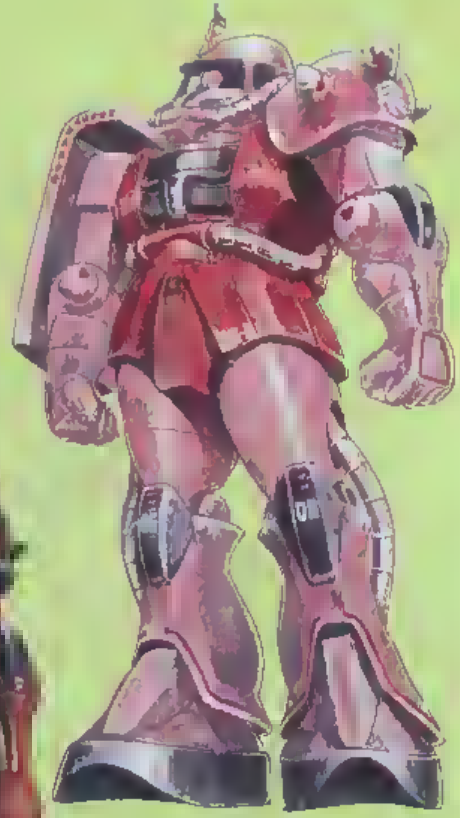
SPEC
Height：17.5m
Weight：56.2t
Armament
ザク・マシンガン、ザク・バズーカ、ヒート・ホーク、その他

サイド3宙域では生産されたMS-06Aザクを使用してあらゆる運用試験が行われている。この運用試験においてザクIIの基本性能の高さは実証され、ザクIIの汎用性を活かした発展型の開発が進められることになった。

A型の生産数は極めて少なく、試作機を含め総生産91機で終了。生産ラインは間もなくMS-06Cのラインに変更されている。第一次生産、第二次生産の計72機はMS-06Aとして納入され全てが実戦配備されている。2機の試作機はジオニック社内で発展型のテストベッドとして運用され、それぞれMS-06J、MS-06Sの試作型に改造されている。

ジオン公国軍の主力モビルスーツMS-06ザクIIは、ジオン本国をはじめ、月面のグラナダ基地、制圧したコロニー内の工業ブロックなどでも製造されていた。

上位機種であるMS-06S、06FSは新鋭機の機密保持の観点から全てジオン本国で生産され、開戦初期までMS-06Fとして運用されるなどの情報操作も行われていた。



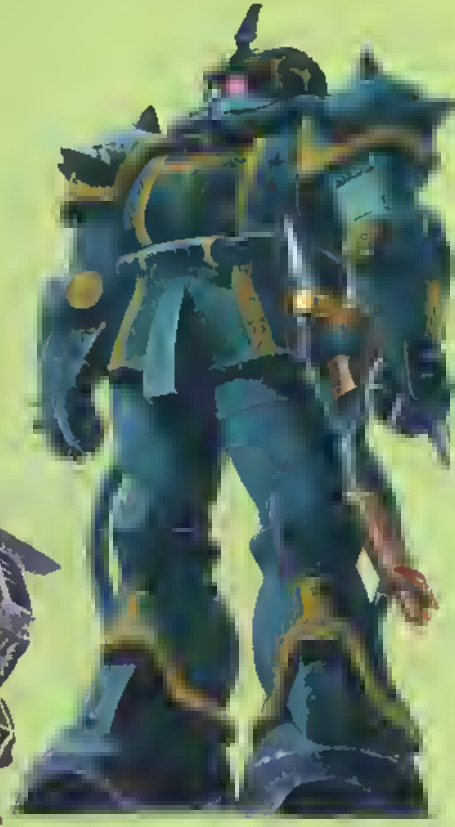
MS-06S
ザクII
(シャア・アズナブル少佐機)

MS-06FS
ザクII
(ガルマ・ザビ大佐機)

●モビルスーツバリエーション

MSV-R

ジオン公国軍の全モビルスーツ中、最も多く生産されたザクシリーズは、発展型の他にカスタム機も製造されている。一部の高級将校のみに許された機体で、中でも有名なのが、特製の大型ヒートホークを装備したドズル中将のF型カスタムである。中将自身がこのザクで実戦参加した事が記録されている。



MS-06F
ザクIIカスタム
(ドズル・ザビ中将機)

MS-06F
ザクII
マインレイヤー

MS-06S

ザクⅡ（黒い三連星・ガイア中尉機）

SPEC
Height 17.5m
Weight 86.2t
Armament
シールド（固定）、ザクマシンガン、ザク・バズーカ、ヒート・ホーク、その他

練度の高いパイロットの要望に応じて機動性能の高いS型が開発された。F型をベースに、エンジンの出力アップと燃料積載量の増加が図られたが、機体構造上の問題から燃料機載量の増加は要求値を充たす事無く完成に至り、機動性は向上したものの稼働時間はF型よりも短くなったと言われていた。これは数値上の誤解で、戦闘時にスラスターの使用頻度が上がるためで、戦闘時間は各自に拡大されており、S型を乗機としたパイロット達から高評価を得ていた。

約100機が生産されたS型は主に指揮官向けに配備されている。この為、指揮官用ザクと呼称される事もあったようだが、これはあくまでも通称で正式な名称ではない。

MS-06S

ザクII
（ジョニー・ライデン大尉機）

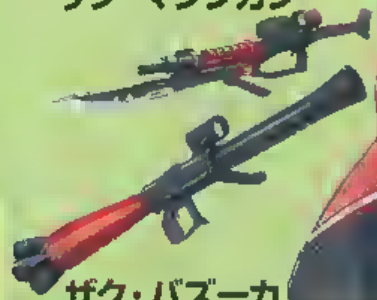
SPEC
Height／17.5m
Weight／58.3t
Armament
シールド（固定）、ザク・マシンガン、ザク・バズーカ、ヒート・ホーク、その他

■モビルスーツバリエーション
MSV-R

「真紅の稲妻」として勇名を馳せたジョニー・ライデンの乗機としてよく知られているのがMS-06R-2だが、それ以前はMS-06Sを乗機としていた。

ライデン大尉（当時）の乗機となったMS-06Sのカラーリングだが、当初は通常のグリーンの二色迷彩を基調にボディ、スパイク・アーマー、シールドが赤で塗装されていただけだった。全身を真紅に染めた見慣れた姿になったのはS型に機種転換してからしばらくして 数々の功績が認められパーソナルカラー塗装が許可されてからである。

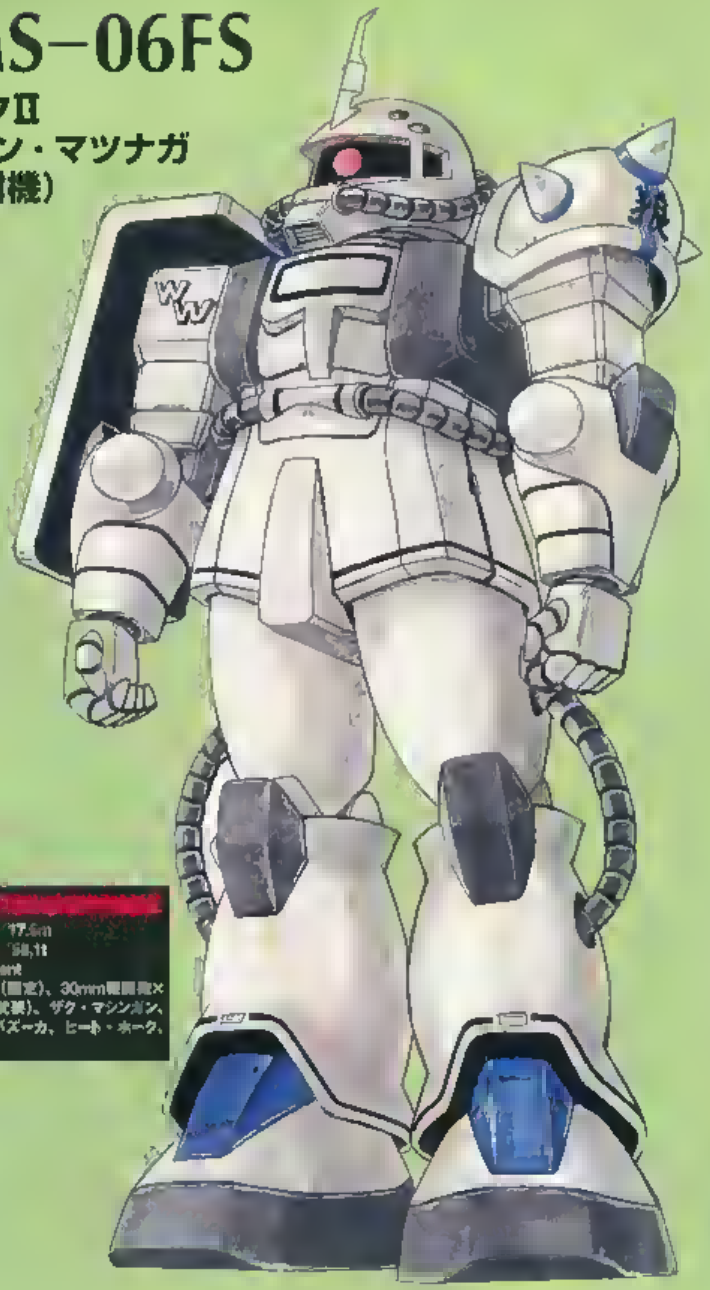
M-120AC
ザク・マシンガン



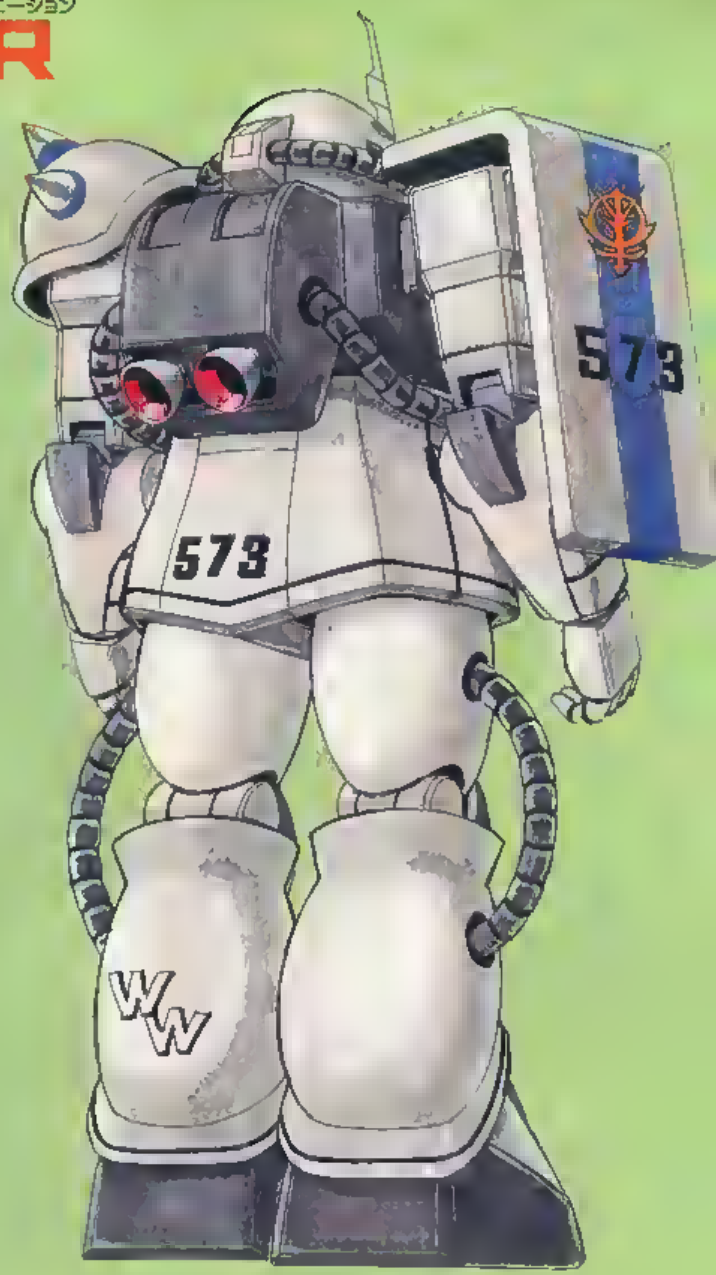
ザク・バズーカ

MS-06FS

ザクⅡ（シン・マツナガ中尉機）



SPEC
Height 17.5m
Weight 58.1t
Armament
シールド（固定）、30mm機関砲×4（固定武装）、ザク・マシンガン、ザク・バズーカ、ヒート・ホーク、その他



「ソロモンの白狼」の名で恐れられたエースパイロット、シン・マツナガが公国軍中尉時代に搭乗していたのがこのMS-06FSザクⅡである。白兵戦における火力向上型で、F型に30ミリ機関砲を頭部に追加装備。小隊指揮官クラスの乗機などに使用されていた上位機種の一つである。

機体受領時はノーマルのFS型であったがマツナガ中尉オーダーのチューンナップが数回行われ、機動性能はFS型としては限界まで引き上げられていた。

機体の塗装は、機種転換前の乗機MS-06Fを踏襲してパーソナルカラーの白を使い、左肩アーマーには白狼にちなみ狼の文字が描かれた。

MS-06F

ザクII
（マツナガ小隊機）

SPEC
Height 17.5m
Weight 85.2t
Armament
シールド（固定）、ザク・マシンガン、ザク・バズーカ、ヒート・ホーク、その他

ノン・マツナガ大尉率いるMS小隊に配備されたのは、MS-06シリーズの最多量産機のF型である。マツナガ大尉のF型のチューンナップに伴いこちらもチューンナップが行われているが、パイロットの技量に合わせているため従来のF型と比較すると大きく異なるものではなかった。

全身はMS-06ザクIIの標準塗装であるグリーンの二色迷彩で塗装され、マツナガ小隊機を表す「W」の文字と機体ナンバーが左肩とシールドにはイエロー、脚部にはブルーで描き込まれている。同隊の「W-03」号機の塗装もこの「W-02」号機とほぼ同一だが、脚部のナンバーは機体識別のためか赤で描かれていた。

MS-06S

ザクII
(ロバート・ギリアム中佐機)

SPEC
Height 17.6m
Weight 75.2t
Armament
シールド(腕定)、ザク・マシンガン、ザク・バズーカ、ヒート・ホーク、その他

数少ないMS-06R-2のパイロットとして知られるロバート・ギリアムの使用したMS-06Sである。スカイブルーとクリーム色のパーソナルカラーはこの時点ですでに完成していた。このハイビジリティーの機体カラーについては諸説あるが、ギリアム大佐の好物ジェリービーンズの色がベースという説が有力とされている。

突撃機動軍に所属した時期に使用した機体で、使用後期にはツートンカラーの胸肩両サイドのカラーリングはスカイブルーに変更されていた。

MS-06S

ザクII
（ギャビー・ハザード少佐機）

SPEC
Height／17.5m
Weight／58.2t
Armament／
シールド（固定）、ザク・マシンガン、ザク・バズーカ、ヒート・ホーク、その他

●モビルスーツバリエーション

MSV-R

突撃機動軍に所属したギャビー・ハザードの機体。パーソナルカラーのブラウンとブラックで塗装されている。機体受領当時は頭部シールド、スパイクアーマーはブラウンで塗装されていたが、機体受領一か月後には変更されている。

機体はメインエンジンを中心にチューンナップが施されており、極端なヒノトアンドアウェイでの対艦攻撃を得意としていたようだ。

戦闘装備として使用頻度が高かったのはザクバズーカで、機体と同様のパーソナルカラーで塗装されたものを使用していた。

MS-06FS

ザクⅡ（エリック・マンスフィールド少佐機）

SPEC

Height／17.5m
Weight／58.2t
Armament
シールド（装定）、ザク・マシンガン、ザク・バズーカ、ヒート・ホーク、その他

●モビルスーツバリエーション

MSV-R

キレン総帥の直属部隊、ジオン公国防空本部に所属したエリック・マンスフィールドの使用したMS-06FSである。後の乗機となるMS-06R-1Aと同様にダークグレーとライトグレーで塗装されている。比較的に使用期間が短かったためであろうか、本国防空隊の使用したグリフォンのエンブレムは、本機では使用されていない。

頭部の機関砲は2門を開装、弾丸搭載量を増加する改造が施されていた。

戦闘装備としてはヒート剣を装備したMi-120ACザクマシンガンを好んで使用していた。

MS-06D
（ピンクパンサー隊所属機）

MS-06D
（カラカル隊所属機）

MS-06D
ザク・デザートタイプ

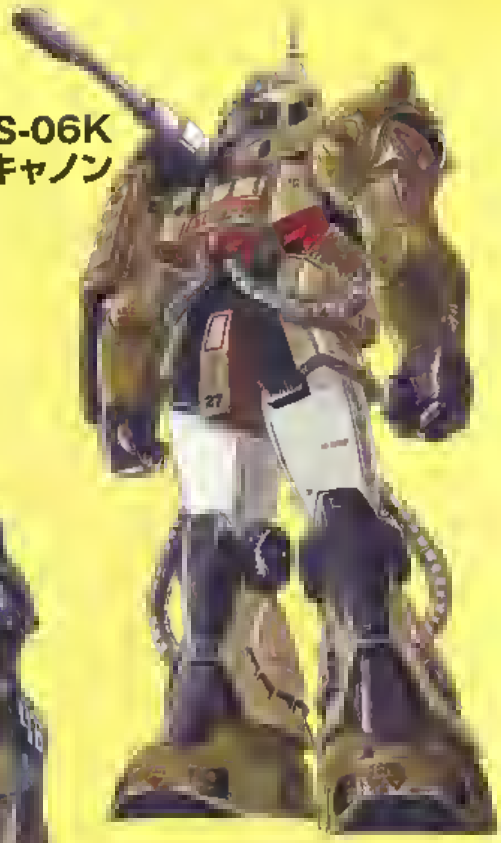
熱帯・砂漠戦用のデザートタイプのランドセルには大型空冷装置を装備。武装と装甲も強化されている。

ピンクパンサー部隊はアフリカ・中東戦線で活躍。カラカル部隊はゲリラ戦法を得意とし、リビア砂漠からスエズ運河西岸を作戦区域として、ダブルアンテナタイプと呼ばれたD型を使用していた。

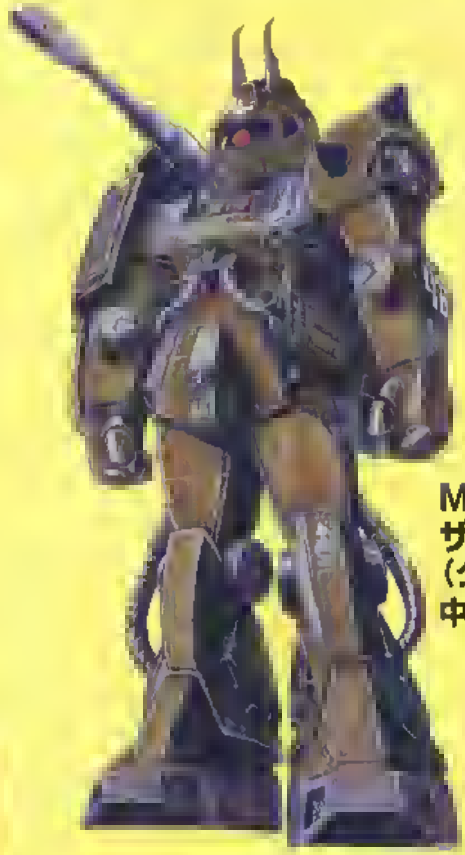
●モビルスーツバリエーション

MSV-R

より機動性の高い対空防御手段として開発されたMS-06Kは180ミリキャノンと一体化したランドセルを装備。オプションとして大量のモビルスーツ戦を想定して開発されたビックガンは、ランドセルにストラップで装着して使用される。



MS-06K
ザクキャノン



MS-06K
ザクキャノン
（グレーデン中尉機）

イアン・グレーデン中尉が使用したKタイプは、ラビットタイプと呼ばれるもので頭部に二本の近距離通信アンテナを装備していた。青いクモをパーソナルエンブレムとして使用。終戦までのスコアーは航空機34機、車両71両、モビルスーツ2機であった。

MS-06D

ザク・デザートタイプ（ガリボルディ隊所属機）

SPEC

Height 17.5m
Weight 61.8t
Armament
シールド（腕定）、ザク・マシンガン、ザク・バズーカ、ヒート・ホーク、ラッツリバー式3連ミサイルポッド、ラッツリバー式P2 2連ミサイルポッド、SA-712クラッカーポット

●モビルスーツバリエーション

MSV-R

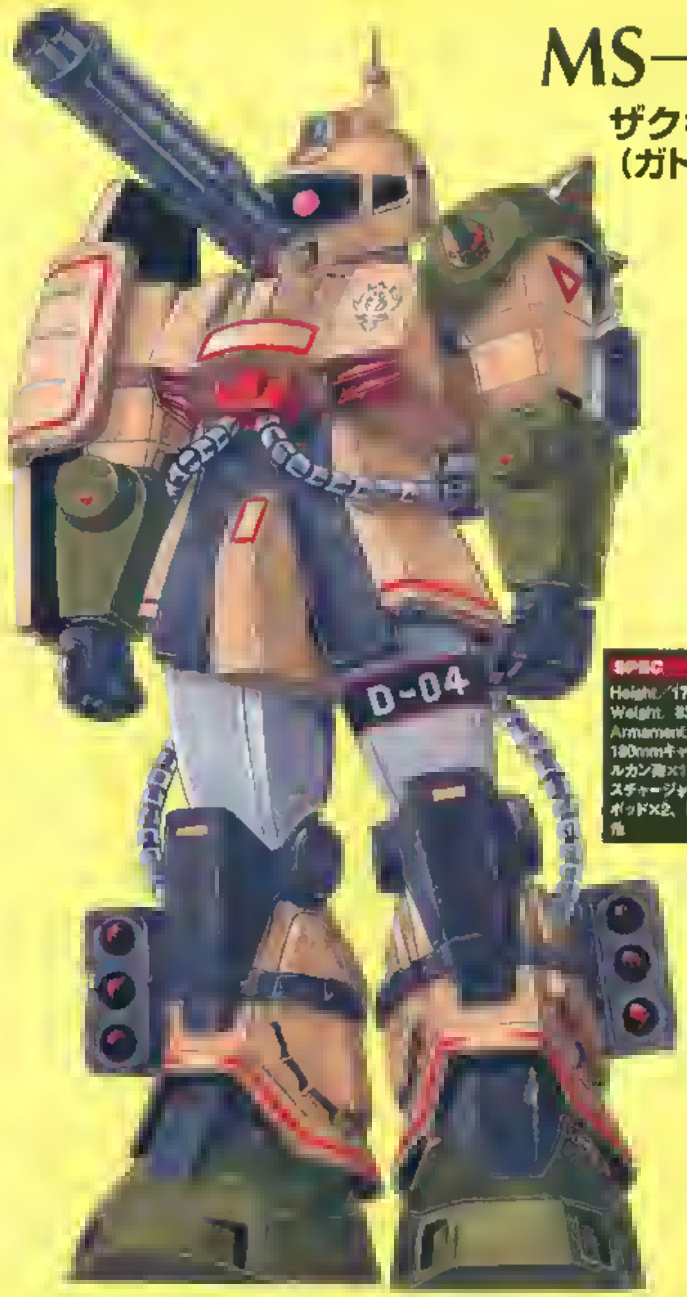
地球侵攻部隊の要請で開発されたのが熱帯・砂漠戦用タイプのMS-06Dである。局地戦用としてはすでにMS-07が進行中であったがMS-06Jの需要の高いアフリカ戦線向けとして、軽量化と出力のアップ、実戦データをもとに部分的に追加装甲が取り付けられるなど特殊装備の開発も試みられている。

MS-06Dは114機が生産されているが、後期生産型では一部設計変更が行われている。ランドセルユニット上部のラジエーターユニットの改良と推進機の追加。装甲材の変更。関接部カバー再設計が主な変更点である。ランドセルへの推進装の増設は機動力の向上、装甲材の変更は更なる軽量化を狙ったものである。

M120-AS ザク・マシンガン（長銃身タイプ）

MS-06K

ザクキャノン（ガトリング砲装備型）

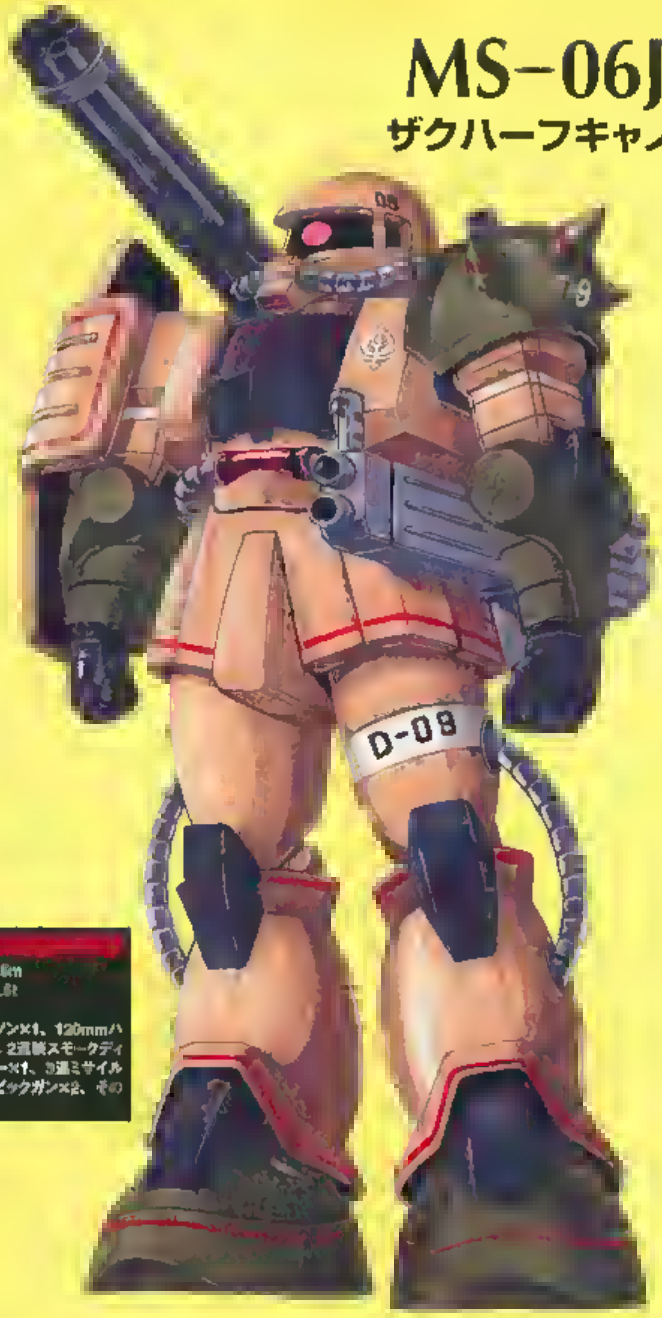


SPEC

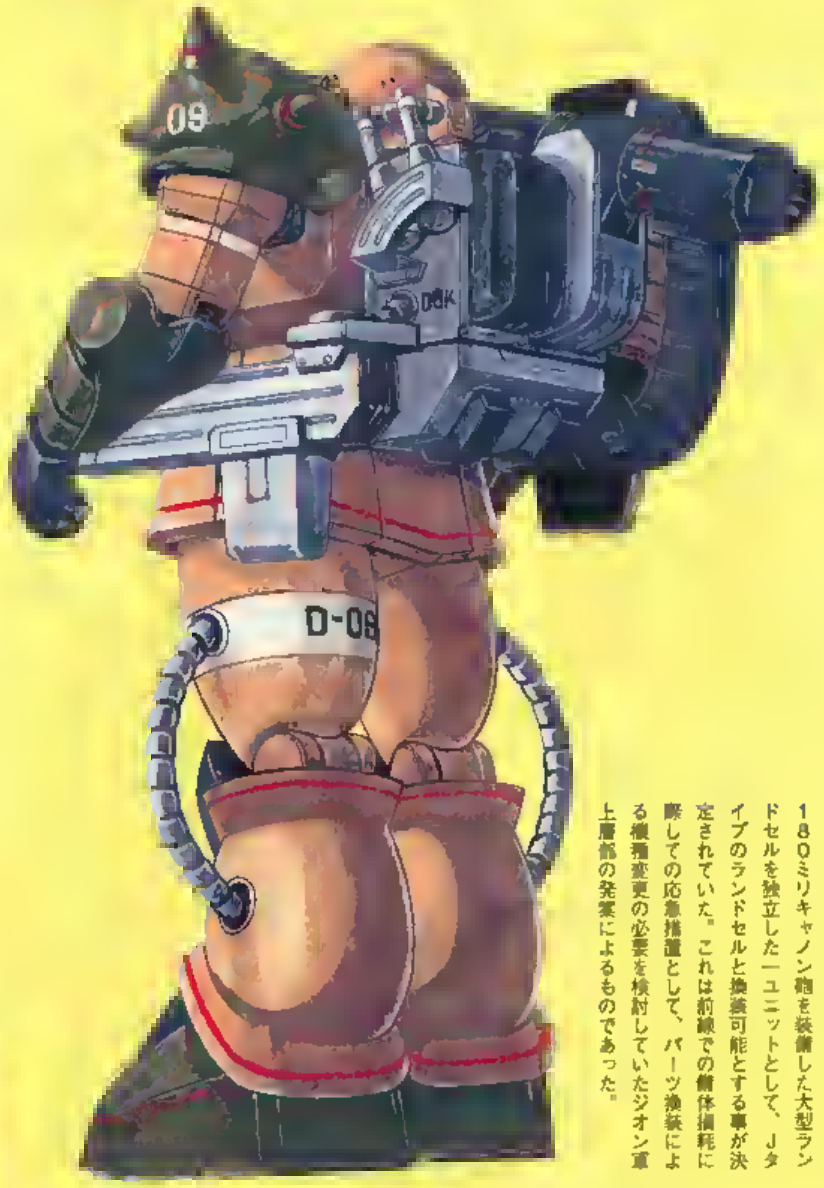
Height 17.7m
Weight 83.2t
Armament
180mmキャノン×1、120mmバルカン砲×1、2連装スモークディスチャージャー×1、3連ミサイルポッド×2、ビックガン×2、その他

MS-06Kザクキャノンは、ジオン軍地上部隊の作戦時に、より機動性の高い対空防御として考案されたタイプである。キャノン発射時の重量バランスなどの問題を解決できぬままに、開発は一時凍結されていたが、連邦軍のキャノン砲を装備したMSの登場により再検討され、対空防御から対MS戦における支援用に変更され開発が進められた。

MS-06JK
ザクハーフキャノン



SPEC
Height／17.6m
Weight　61.8t
Armament
180mmキャノン×1、120mmハルカン砲×1、2連装スモークディスチャージャー×1、3連ミサイルポッド×2、ビックガン×2、その他

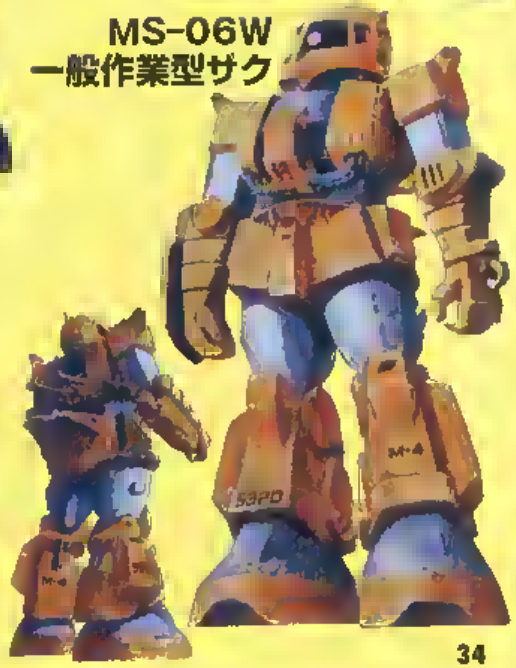


MS-06K開発コンセプトの一つに、180ミリキャノン砲を装備した大型ランドセルを独立した一ユニットとして、Jタイプのランドセルと換装可能とする事が決定されていた。これは前線での機体損耗に際しての応急措置として、パーツ換装による機種変更の必要を検討していたジオン軍上層部の発案によるものであった。

MS-06M
水中用ザク
(レッドドルフィン所属機)

MS-06M
水中用ザク

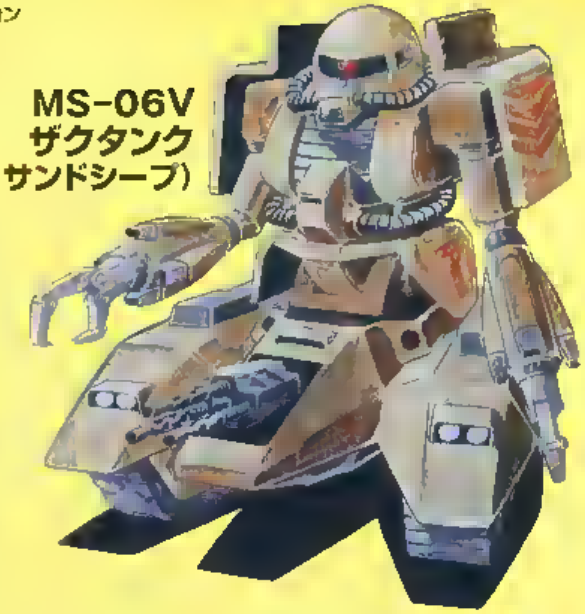
MS-06W
一般作業型ザク



早くから水中用モビルスーツの開発に着手していたジオン公国軍だが、MS-06Mの開発は難航し、中止されている。試作されたM型は水陸両用モビルスーツ開発の試験機として使用され、一部のM型は実戦参加が記録されている。

破壊されたザクの部品を流用して製作されたウォーカータイプには正式な型式ナンバーは与えられていないがWタイプと呼称され、主に一般作業に使用されていた。

MS-06V
ザクタンク
(サンドシープ)



最前線に投入されたモビルスーツは全て戦闘に振り分けられ、戦闘時間外の建設作業等にあたる事は事実上不可能だった。そこで戦闘能力を失ったザクとマゼラベースを組み上げ製造された大型車両がザクタンクである。アフリカ戦線の工作部隊により

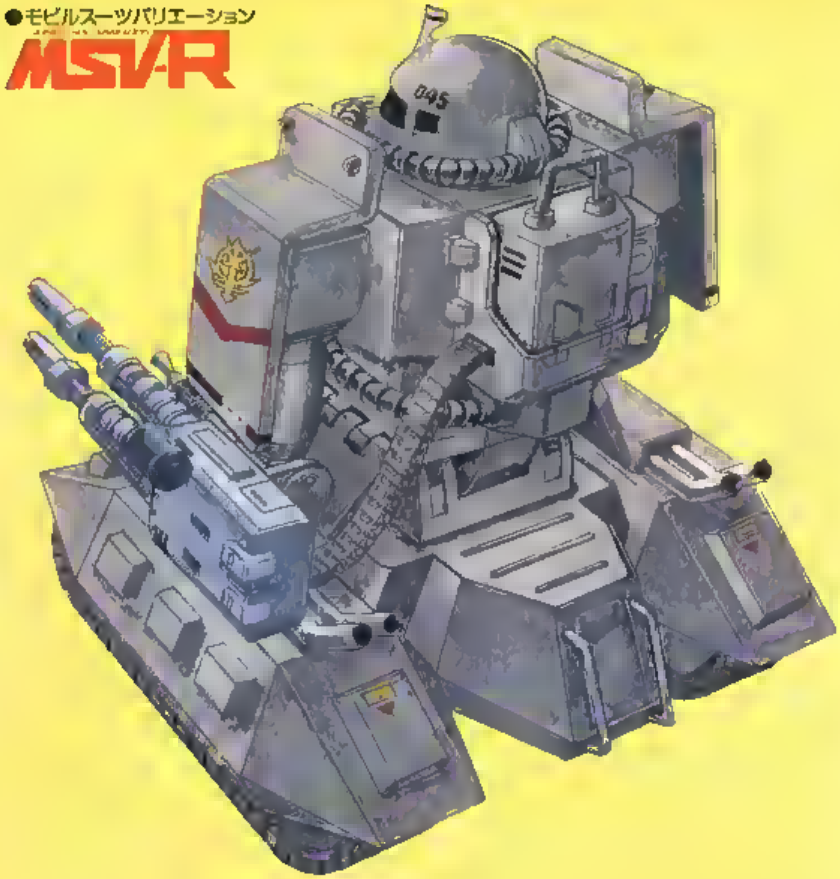
MS-06V-6
ザクタンク
(グリーンマカク)

廃物利用で製作された車両だが十分に実用に耐える物であり、後にMS-06Vとして承認されている。各戦線でVタイプは建造されており、更に再武装が施され補助兵器としての運用も行われていた。

MS-06V-8

ザクタンク
(ワイルドボア)

SPEED
Height 12.6m
Weight 70.4t
Armament
3連装33mm機関砲×1、105mm
マシンガン×2

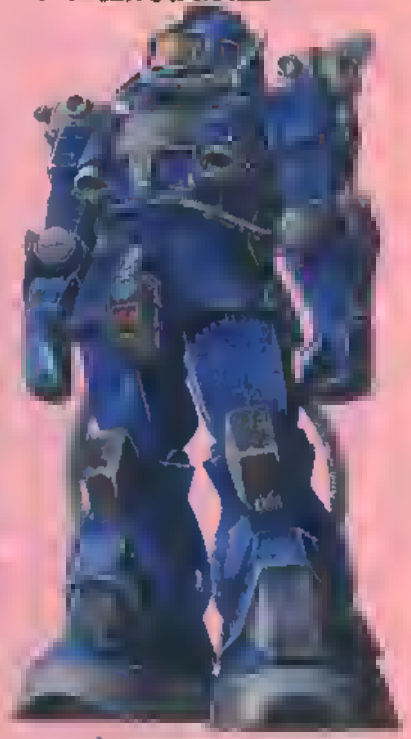


MS-06Vザクタンクは前線での建設作業などの運用を目的として、戦闘能力を失ったマゼラ・ベースとザクIIを組み合わせて現地製造された機体でアフリカ戦線の工作部隊により作られた。廃物利用で組まれた機体ながら十分に実用に耐えることから、アフリカ戦線をはじめ各戦線で組作され、様々なバリエーションが存在したと言われる。

MS-06V-8もその一つで、左腕部に二連装のザク・マシンガンを装備した武装タイプで、主に北ヨーロッパを中心に多く配備されている。

北ヨーロッパでは全身をオフホワイトで塗装した冬期迷彩の他、グリーンを基調とした森林迷彩なども確認されている。また、南米のジャングル地帯では三色迷彩のMS-06V-8が確認されている。

MS-06E
ザク強行偵察型



戦略偵察を目的とするMS-06Eは、CタイプやFタイプをベースに、高感度カメラや緊急脱出用ロケットが増設されている。生産数は100機程で、ソロモンやア・バオア・クーで改造作業が行われ、各艦隊に実戦配備されている。

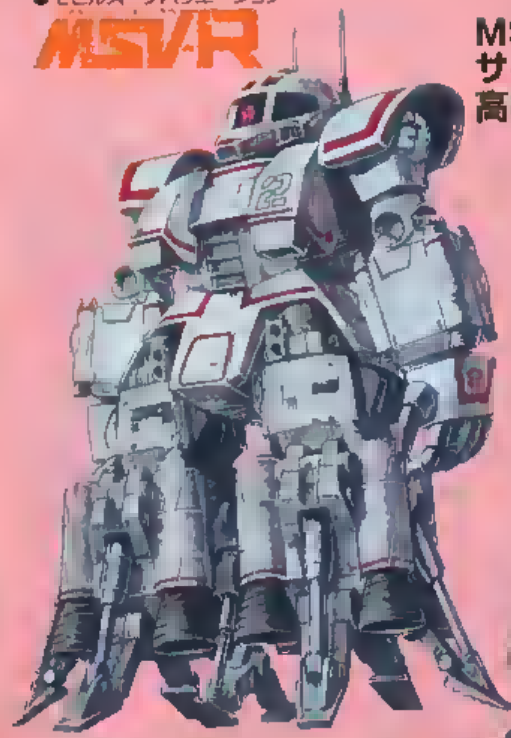
MS-06E-3はEタイプを更に改修した機体の総称である。頭部のメインカメラ複合型に改められ、背部には6枚のブレードアンテナをもつ複合探知システムが追加されている。

MS-06E-3
ザク
強行偵察型

●モビルスーツバリエーション

MSV-R

MSN-01
サイコミュ
高機動試験用ザク



MS-06Zの試作2号機の脚部を取り去り、大推力ロケットエンジンを腰部にマウントした高速オペレーション試験機である。燃料積載量の制限からMS-06Zでは不可能とされた、高機動レベル時のサイコミュシステム作動データ収集のために製造された。

しかし、MS-06ザクIIをベースとした為えの制約はまぬがれず、思うようなデータは得られなかった。

MS-06Z
サイコミュシステム
試験用ザク

ニュータイプパイロットの出現により、サイコミュシステムを搭載した新たな兵装の開発が要求されることとなり、MS-06ザクIIをベースに試験機MS-06Zが3機製造された。一足先に開発が始められたMAN-03ブラウ・ブロのデータが機体開発に活かされ、両腕には小型化された有線誘導ヒート砲が装備されている。機体はダークカラーで塗装され秘密裏にテストが行われた。

MS-06G
陸戦高機動型ザク

MS-06Jの性能向上型として開発された陸戦型ザクの最終モデル。開発時期がMS-07と重なった為、フォルム上の類似点も見られる。スラスターの追加などにより総合性能が向上しているが、開発が遅かった為にわずか58機で生産を終了している。

SPEC
Height 17.5m
Weight 58.1t
Armament
シールド(固定)、ザク・マシンガン、ザク・バズーカ、ジャイアント・バズ、ヒート・ホーク

MS-06G

陸戦高機動型ザク（ギュンター・バル中尉機）

頭部に隊長マークである飾りを付けたこの機体は、アフリカ戦線の連邦軍兵士達に「ホガールの鷹」の名で恐れられた、ギュンター・バル中尉の機体である。

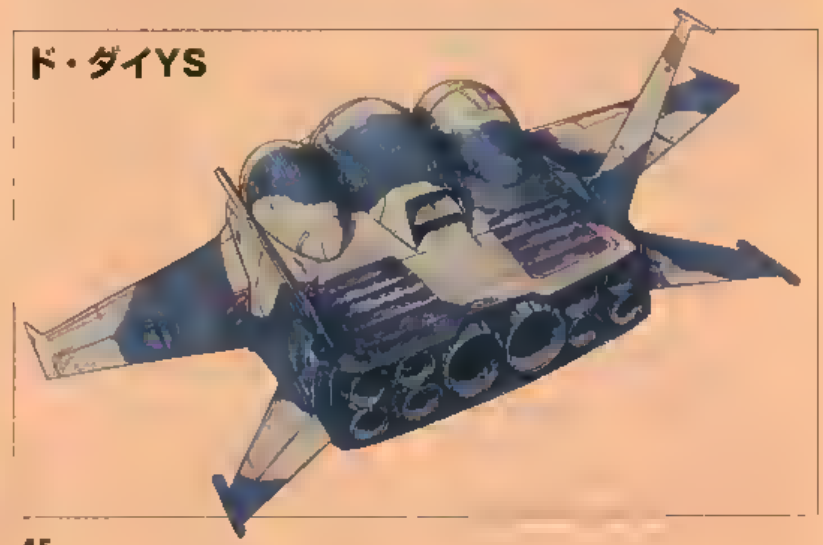
サハラ砂漠の高地ホガール山地で、ドダイに乗ったまま一度に9機の戦闘機を撃墜した事から「ホガールの鷹」の異名で呼ばれるようになったという。

●モビルスーツバリエーション

MSV-R

SPEC
Height：17.5m
Weight：58.1t
Armament：
シールド（腕固定）、ザク・マシンガン、ザク・バズーカ、ジャイアント・バズ、ヒート・ホーク

ド・ダイYS



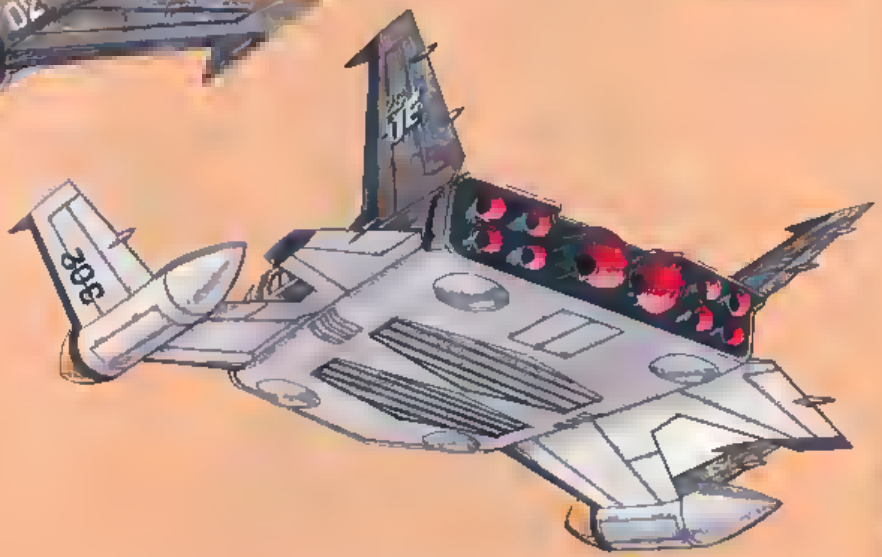
重爆撃機として開発されたド・ダイYSだが、有り余るペイロードから、機体後方を機送スペースとするフラノトペノド型輸送機としても重用され、各種モビルスーツの輸送なども行っていた。

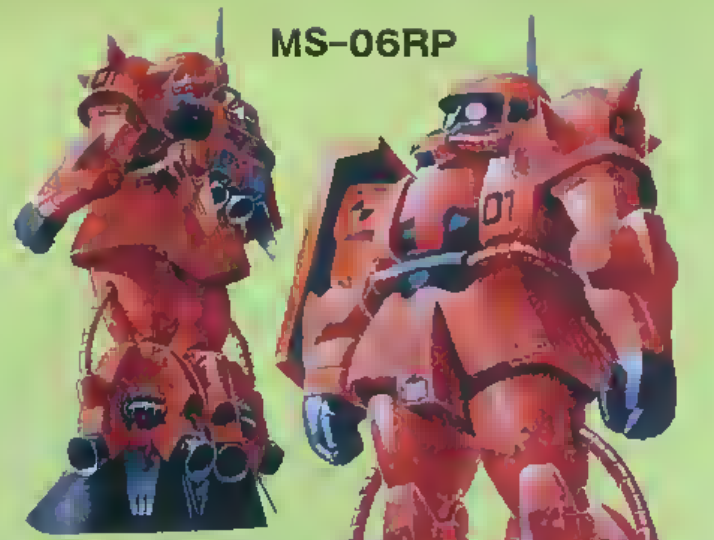
搭載するMSとの連携による新たな戦術は、機体配備から間もなく確立されたもので練度を要する戦術ではあったが、制空権確保に有用とジオン公国軍は考え、MSとド・ダイYSの併用を常とする混成部隊の編成を行っている。

混成部隊編成の一方、ド・ダイYSのペイロードをそのままに、MSとのコンビネーションが戦場で有効に発揮できる対地攻撃型の開発が進められ完成したのが重爆撃機ド・ダイGAである。

重爆撃機ド・ダイGA

SPEC
Height 23.0m
Weight 57.3t
Armament
大型ミサイル×4、対地ミサイル・ランチャー×2





MS-06RP

MS-06R-1

Fタイプ後期生産型を改修したRタイプザクの試作型はRPと呼ばれ、試作された2機は月面基地グラナダに運ばれて、各種テストが実施されている。高機動飛行テスト、機体保持テストはエリオット・レム少佐によって行われた。

MS-06R-1は最初の量産型Rタイプザクである。プロトタイプの状態から生産効率を上げるための整理が行われたが、複数のトラブルが重なり、生産は22機で終了している。

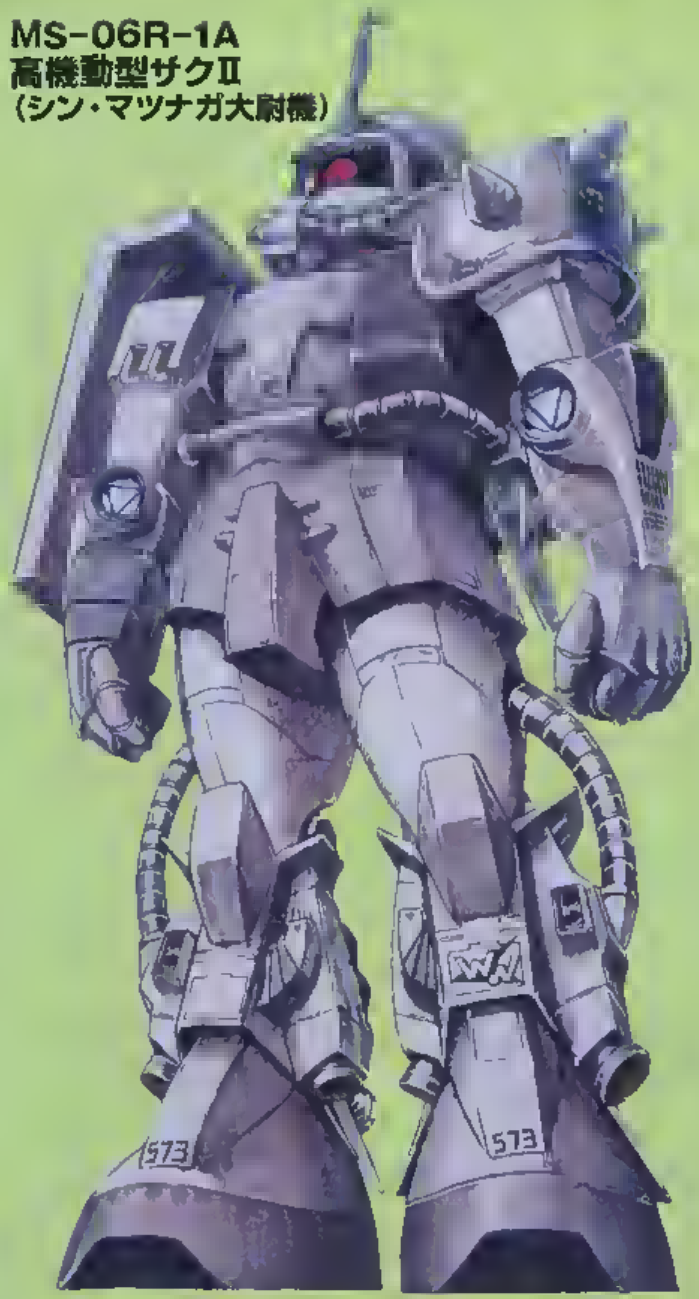
●モビルスーツバリエーション

MSV-R

MS-06R-1は実戦テストも兼ねて、本国防空本隊を含む、各要衝基地やパトロール艦隊に配備された。だが、燃料の使用配分に慣れないパイロットが続出した。この燃料配分問題解決のために製作された機体がMS-06R-1Aである。燃料タンクをカートリッジ化することで問題を解決。生産ラインよりのR-1も、途中から11機がR-1Aに仕様変更されている。Rタイプザクとして呼称される場合はこのR-1Aをさす事が多い。

MS-06R-1A
高機動型ザクII
(黒い三連星仕様)

MS-06R-1A
高機動型ザクII
(シン・マツナガ大尉機)



「ソロモンの白狼(ホワイトウルフ)」の異名で名を馳せたエースパイロット、シン・マツナガ大尉の機体。パーソナルカラーも白を基調とし、左指スパイクアーマーには狼が描かれている。

ドズル中将の戦場視察のおりには必ず、マツナガ大尉の白い06R-1Aが護衛を務めていた。

●モビルスーツバリエーション

MSV-R

ア・バオア・クーに駐屯したEフィールド防空大隊所属のマサヤ・ナカガワ中尉のMS-06R-1A。茶系を主体としたパーソナルカラーを使用している。

グレー系の低視度迷彩を施したMS-06R-1Aは、本国防空隊に所指したエリック・マンスフィールド中佐の乗指である。右肩に描かれたグリフォンは本国防空隊で用いられた。

MS-06R-1A
高機動型ザクII
(マサヤ・ナカガワ中尉機)

MS-06R-1A
高機動型ザクII
(エリック・マンスフィールド中佐機)

MS-06R-2
（ジョニー・ライデン少佐機）

わずか4機だけで生産を終了したMS-06R-2の機体性能は極めて高いものであった。この06R-2タイプを乗機とした幸運なパイロットの一人が「真紅の稲妻」の名で恐れられたジョニー・ライデン少佐である。

ゲリラ戦を得意としたライデン少佐はMS-14Bゲルググに機種転換、エース部隊として知られたキマイラ隊に参加している。

●モビルスーツバリエーション

MSV-R

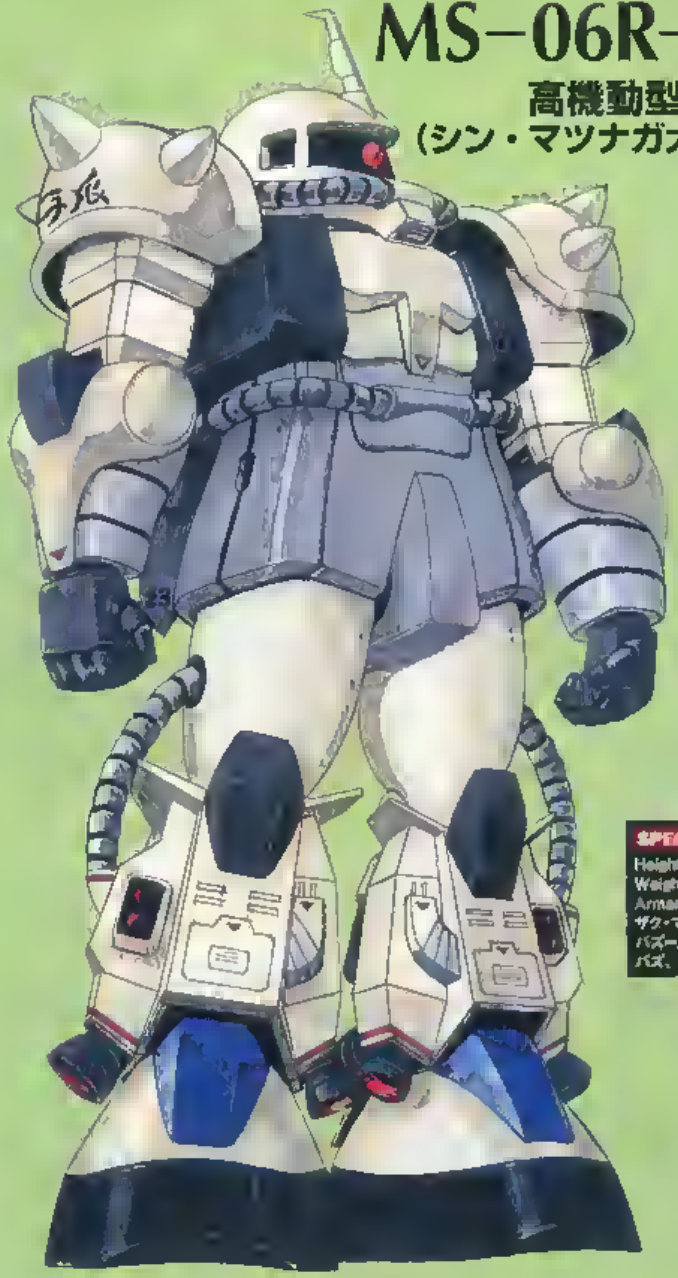
茶と黒のパーソナルカラーで塗り分けられたMS-06R-1Aはギャビー・ハザード中佐の機体。スカイブルーとクリーム色のパーソナルカラーを用いた機体はロバート・ギリアム大佐機である。いずれも大戦末期グラナダ周辺への戦力集結の際に確認されている事から、ア・バオア・クー攻防戦に参加したものと推察される。

MS-06R-2
（ギャビー・ハザード中佐機）

MS-06R-2
（ロバート・ギリアム大佐機）

MS-06R-1A

高機動型ザクII
（シン・マツナガ大尉機）



SPEC
Height／17.5m
Weight／58.3t
Armament
ザク・マシンガン、ザク・バズーカ、ジャイアント・バズ、ヒート・ホーク

●モビルスーツバリエーション

MSV-R

両肩にスパイクアーマーを装備したこのMS-06R-1Aは、シン・マツナガ大尉に用意された代替機である。詳細は不明だが、本来のマツナガ機の分解整備などによる稼働率の低下を危惧しての特別な措置と思われる。機体は固定のパイロットをもたない余剰機を使用した物で、パーソナルカラーのオフホワイトで塗装され、両スパイクアーマーには「白狼」の文字が記されている。

MS-06R-1A

高機動型ザクII
(アナベル・ガトー大尉機)

SPEC
Height/17.5m
Weight/58.4t
Armament
シールド(腰定)、ザク・マシンガン、ザク・バズーカ、ジャイアント・バズ、ヒート・ホーク

●モビルスーツバリエーション

MSV-R

機体をグリーン、ライトブルー、オフホワイトで塗装したこの06R-1Aは後に「ブロモンの悪夢」の異名で知られたアナベル・ガトー大尉(一年戦争時の階級)の乗機である。06R-1Aを乗機としたパイロット達同様、ガトー大尉の06R-1Aも機動性能を充分に発揮できるよう、きりぎりまでチューンされていた。06R-1Aパイロットの多くが好んでジャイアント・バズを使用したが、ガトー大尉はザク・マシンガンを使用する事が多かったと言われている。

MS-06R-1A

高機動型ザクII（ユーマ・ライトニング少尉機）

SPEC
Height 17.5m
Weight 56.9t
Armament
シールド（腕定）、ザク・マシンガン、ザク・バズーカ、ジャイアント・バズ、ヒート・ホーク

若きエース、ライトニング少尉の06Rはパーソナルカラーのブルー、ホワイト、グレーで塗装されていた。ロバート・ギリアム大佐のMS-06R-2とカラーリングが似ていた事から誤認される事も多かったと言われる。

パイロット達にRタイプを入手するのは戦艦を沈めるよりも難しいと言わしめたMS-06R-1Aだが、スコアーだけで認可されるものでは無く、将来が期待される若きパイロットにも門戸は開かれていたのである。

YMS-07B グフ

シオン公国軍は、地上戦用にMS-06Fを改修したJタイプを開発したが、同時に白兵戦を主目的としたモビルスーツとしてMS-07とMS-08を量産のかたちで開発していた。試作機YMS-07プロトタイプグフは、MS-06J以上にランエーターパワーの向上と軽量化が図られ、更に脚部には補助推進システムが装備された。

MS-07B グフ

YMS-07は軽量化されたとはいえ、装甲面でもMS-06Jを上回るものとなっている。YMS-07試作3号機からは、軽量化によって生まれた胴体内のスペースを活かして5連装75ミリマシンガンを内蔵し、右腕部には新装備としてヒートロッドと呼ばれる伸縮式の放熱ムチが内蔵された。

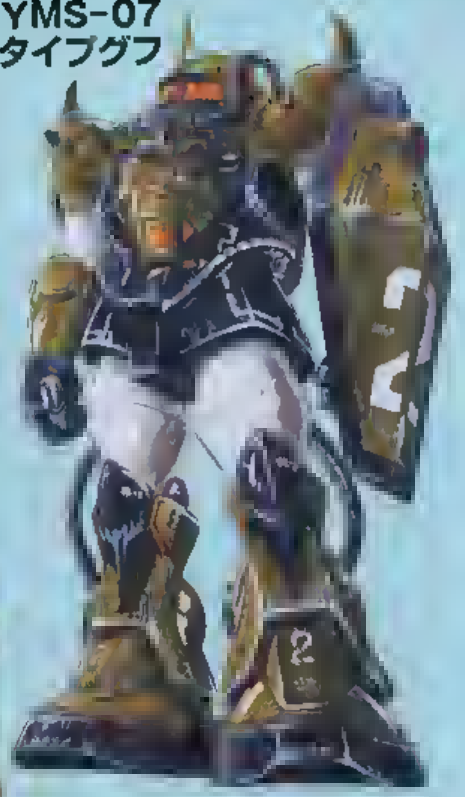
●モビルスーツバリエーション

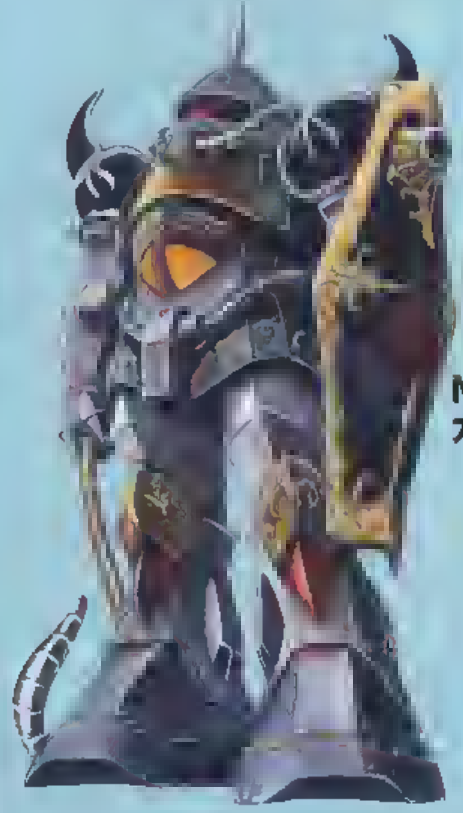
MSV-R

YMS-07 プロトタイプグフ

YMS-07試作機の外装の整理後、量産先行型YMS-07Bが製作された後、MS-07Bとして量産が開始された。

MS-07Bはグフシリーズ最初の量産型で、固定武装を備えた事で戦闘力は大幅に向上し、局地戦においてその戦闘力をいかんなく発揮した。だが、武装を固定とした事で汎用性を失うという欠点も指摘されていた。

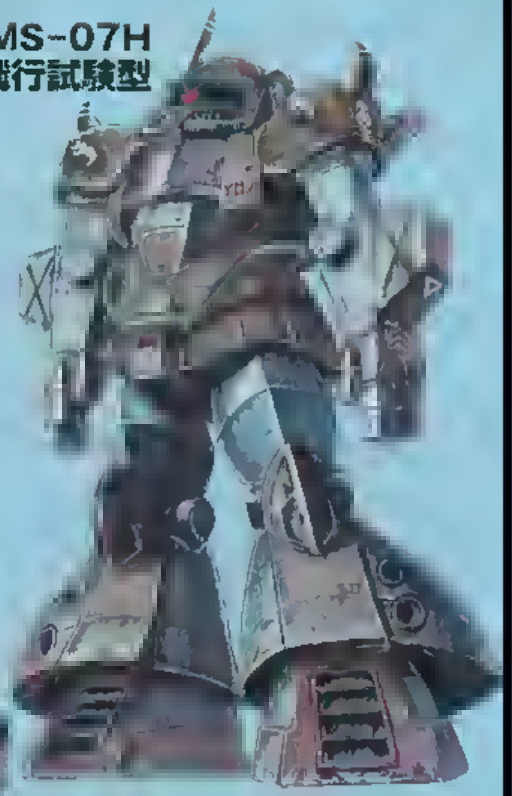




MS-07B カスタムタイプ

MS-07Bを使用したカスタムタイプモビルスーツは幾つか確認されているが、量も有名なのがマ・クベ大佐の乗機であろう。Bタイプをベースにしたもので、頭頂部にスピアヘッド状の装飾をもち、機体各所にエングレーブが施されていた。派手な外観から、一種のステータスシンボルとしてカスタム化された機体と言われている。

MS-07H
グフ飛行試験型



地球侵攻作戦により　地球上でのモビルスーツ移動力の低さが露呈。ジオン公国軍は対策の一つとして飛行能力を有するMS-07の派生プランが立てられた。

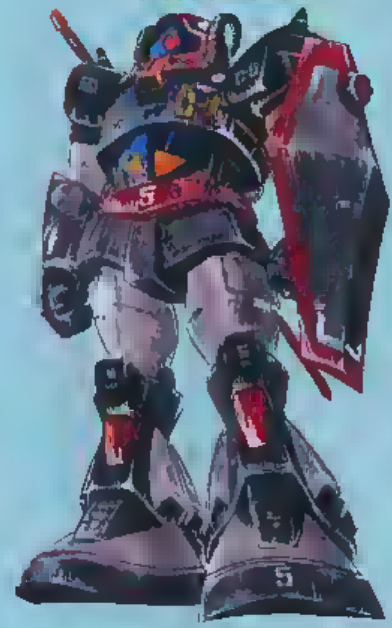
サイド3で脚部とランドセルを中心に改修された試作機4機が製作された。MS-07Hのナンバーが与えられ、キャリフォルニアベースで飛行試験が行われた。

MS-07H-4
グフ飛行試験型

MS-07Hの脚部エンジンを推力をアップした新型エンジンに換装し、腰部に補助ロケットを追加。更に装甲を整形して飛助翼を追加したMS-07H-4が製作された。しかし、完成したH-4はフランク・ベルナール少尉によるテスト飛行中に空中爆発を起こし失われている。新型エンジンの不調が原因と言われている。

MS-07C-3
グフ重装型

MS-07C-5
グフ試作実験機



YMS-08A
高機動試作機

MS-07C-3は、固定武装の火器を重点的に強化したタイプで、ヒート・ロッドを廃止、両肩に5連装85ミリマシンガンが装備された。

次期主力モビルスーツ開発のテストベッドとして製作されたのがMS-07C-5である。試験により収集されたデータはMS-09開発に活かされた。

YMS-07と競作されたのがYMS-08Aである。内容的にはMS-06Jのリファイン版にすぎず、試作5機で生産を終了している。

MS-07G-1
グフ・ヴィジャンタ

リムーバル・
メイス

MS-07グフのもつ特性を残しつつ、更に機動性能の向上が図られた機体がMS-07G-1グフ・ヴィジャンタである。機動性能を活かす特殊装備、グラップルワイヤー射出器とリムーバル・メイスと呼ばれる特殊格闘棒が通常装備されている。どちらも対MS戦において武器としての使用も可能であるが、特殊任務用の装備に位置づけられる。

SPEC
Height 18.9m
Weight 81.4t
Armament
ザク・マシンガン、シザー・ワイヤー×1、ヴィンズ・ロット×1、リムーヴァル・メイス×1

MS-07G-2

グフ戦術強攻型

SPEC
Height 18.8m
Weight 84.8t
Armament
4連装ガンパック×1、120mmガトリング砲×1、ヒート・ロッド×1

MS-07の特性をそのままに、火力のアップを図った機体で、MS-07G-1と同時に開発された。ランドセルの側面に120ミリマシンガン6本を束ねた長銃身のガトリング砲を装備、左腕部には複数の火器を収めた大型のガンパックを装備している。MS-07G-1と混成部隊を編成して強攻偵察部隊などを中心に運用されていた。

MS-07W グフ 複合試験型

SPEC
Height/18.5m
Weight/67.4t
Armament
シールド×2(標準)
5連装フィンガー・バルカン砲×2、ヒート剣×2、ジャイアントバズ×2
(※リトル・ドップ搭載：30mm機関砲塔載剣×2、対空ミサイル×2)

●モビルスーツバリエーション

MSV-R

一年戦争後期、キャリフォルニア・ベースで発見されたMS-07Wは、ジオン公国軍の中でも、新機軸の下に開発された特筆すべきMSと言える。ジオンの主力戦闘機ドップに似た戦闘機が変形し、07Wの胸部に収納されてMSのコクピットになるというもので、その構想は連邦軍のRXノリーズのコア・ブロック・システムを彷彿させる。発見時の状態から、地球上の全領域MS開発の為の試験機だったと推測されている。

MS-07W専用ドップ (リトル・ドップ)

Federation Survey Service

Action Graphic

大戦前期に発表された、この写真に写っているのは、機動機動軍第七師団第一モビルスーツ大隊司令部付き特務小隊、通称「黒い三連星」のMS-06Sである。

写真は「黒い三連星」が地球連邦軍のサラミス級巡洋艦を拿捕した戦闘終了時を捉えたもののようだ。サラミス側面の砲門が破壊されている事などの状況から、航行不能状態になっているものと思われる。

機体に大きなダメージを与える●なく、宇宙艦艇を拿捕する。「黒い三連星」のもつ戦闘技術の高さをうかがい知る事が出来る貴重な一枚である。

イラスト　津房光

一年戦争中にも数多くのジョニー・ライデン少佐機の映像が公開されているが、ここに掲載した映像は戦後に発見された一枚である。ジョニー・ライデン少佐といえば用も知られるのがMS-06R-2であるが、これは、彼がR-2タイプの前に使用していたMS-06Sの映像である。パーソナルカラーの赤で塗装され、左肩にはモデックス「402」が記入されている。

0079年の4月頃、パトロール任務のサラミス級宇宙巡洋艦をライデン大尉（当時）が所属するMS小隊の2機のMS-06Fと共に護衛、見事に奪還した際のもので、ゲリラ戦を得意としたライデン大尉ならではの戦果と言える。

イラスト　寒鳥光

Federation Survey Service

Action Graphic

画像は大戦末期の北アメリカ方面の中規模ジオン航空部隊で撮影された一枚である。地球連邦軍の戦闘機撃墜フライ・マンタの空爆攻撃に対して、迎撃にあたるMS-06Kザクキャノンが捉えられている。撮影したのはジオンの士官で、最後押収された資料から発見されたものである。この日の空爆にはフライ・マンタの他に大型軍事輸送機デブ・ロック12機も参加、高高度爆撃を敢行している。1時間ほどの空爆作戦によりジオン軍はこの航空部隊の70パーセントを損失、滑走路は使用不能となり、ジオン軍はこの基地を放棄した。この基地に駐留していたMS-06Kを含む6MS中隊も別の基地へと移動している事が後に確認されている。

イラスト／皇亀光

ムサイ艦軽巡洋艦のブリッジから撮影されたこの風景は一年戦争の激戦を伝える補記資料で、連邦軍の放ったミサイルをマシンガンで破壊する白いザクIIが捉えられている。左肩のアーマーには狼の文字が描かれており、「ランバ・ラルの白狼」の異名で知られたシン・マツナガ中尉(当時)のMS-06FSである。左下に見えるMS-06はマツナガ小隊所属のW02号機がW03号機と思われる。

高度で迫るミサイルの前面に回り込みザク・マシンガンで撃ち落とす、エースとして異名を馳せたシン・マツナガ大尉ならではの離れ技である。撮影地は不明だが、この日マツナガ隊は、連邦軍のサラミス級2隻を航行不能にした事が記録されている。

Federation Survey Service

Action Graphic

イラスト 兼用光

これは北ヨーロッパ山岳地帯で、MS-06Jと共に応戦中のMS-06V-8ザクタンクの想像である。主に建設作業を任務とし、て現場投入されたMS-06Vシリーズであるが、一年戦争末期ジオン公国軍は建設するMSを選ばせておく余裕はなかったようだ。

戦後、型式ナンバーMS-06V-8を与えられたこの試験型ザクタンクは、左腕にザウ・マシンガンを装着、背部に大型のマガジンラックを備えるという機体改修機で、補給のままならない山岳地帯の駐立部隊などで多く見られた機種である。気になる性能だが、ザウ・マシンガンを2門束ねる形で装備された二連装マシンガンの射撃性能は想定よりも良好だったと言われている。

イラスト　兼岡光

Action Graphic

一年戦争の後期、キャリフォルニア・ベースの工場で確認されたMS-07W（複合試験型）はジオン公国軍が開発したMSの中でも特異な機体の一つである。

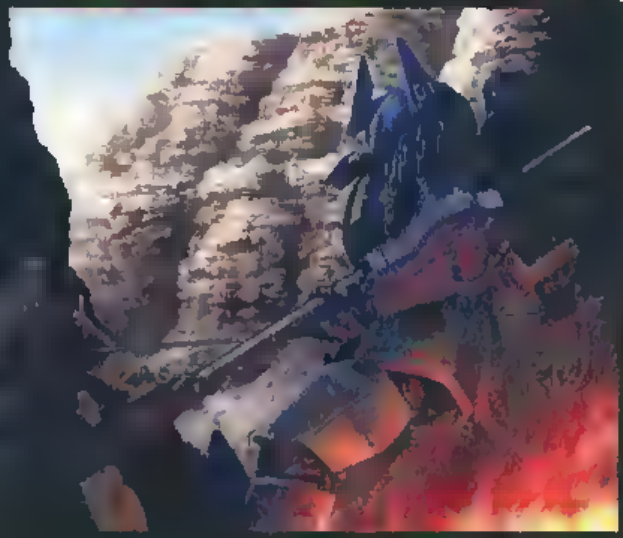
写真は発見時に撮影されたものだが、一機に公開されたのは終戦後の事である。写真にはドップのような戦闘機と頭部コクピット部分が大きく開口されたグフが写されている。この2つがMS-07Wである。

戦後、ジオン公国軍技術本部でMS-07W（複合試験機）の発注書が発見されている。性能項目のトップには、パイロットの機出機体を有する機体と書かれていた。

イラスト／菅原光

Federation Survey Service

Action Graphic



戦闘中のMS-07G-1グフ・ヴィジャンタとMS-07G-2グフ

戦術強攻型を揃えたこの画像2点は、0079年10月、北米で連邦軍の高高度偵察機からの報告を受けて迎撃にあたったジム小隊のパイロットが撮影したもので、パイロットは戦闘開始から間もなく機体に致命的な攻撃を受けて脱出、岩陰からカメラでこの戦

イラスト／兼原光

闘を記録していた。

この報告の記録ではジム6機が全滅、うち一機はほぼ全壊状態だったと記されている。この交戦後、連邦軍は小隊を見失い、三日後にはこの渓谷から180キロ離れた補給基地が、小隊と思われる小隊の襲撃を受けて機能の40パーセントを消失している。

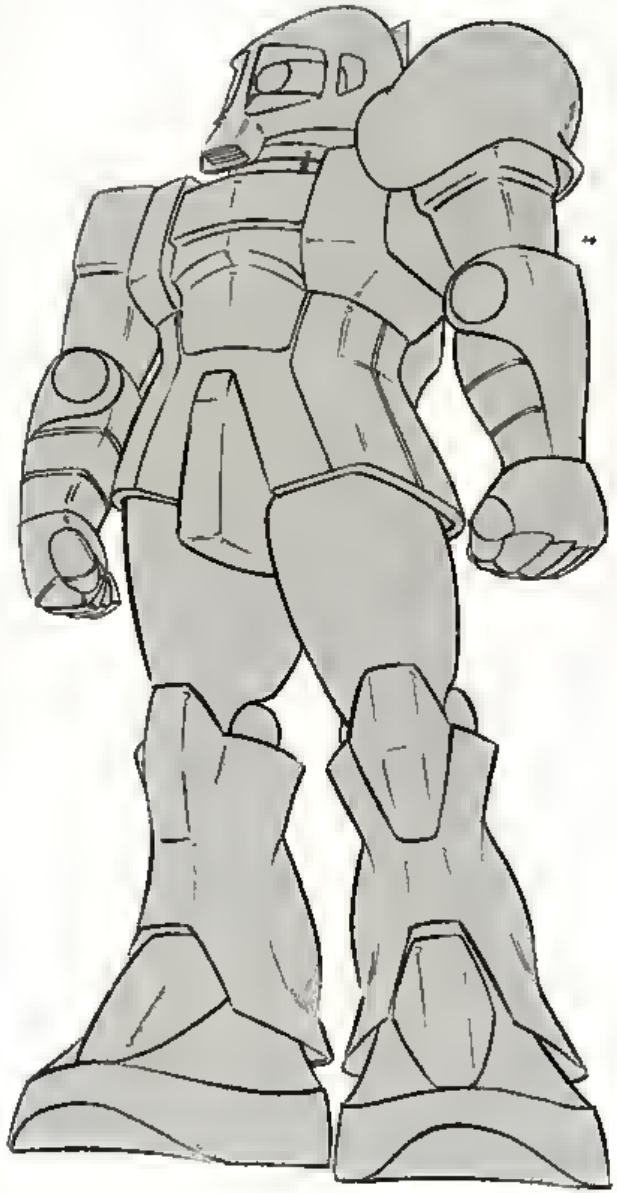
MSV-R

MOBILE SUIT VARIATION-R

もくじ

MS-05B ・・・

MS-05B
ザクI



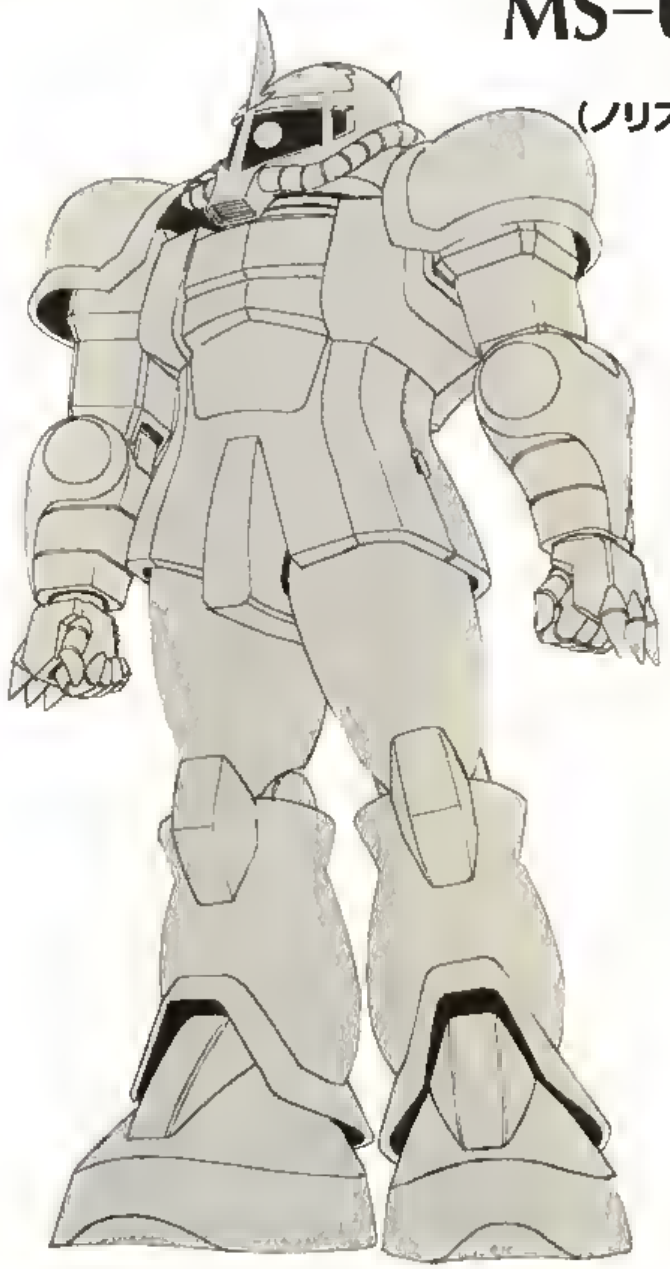
ジオン公国軍が開発した初の実戦用モビルスーツMS-05ザクだが、初期生産機27機によって、0076年5月に教導大隊が編成され、モビルスーツパイロットの養成が行われた。

この教導大隊で使用されたのはMS-05Aだったが、多少の改良を必要とするものの、十分に実戦に耐えうる完成度に達していた。MS-05の生産ラインはBタイプに移行、大量生産され0077年までには全ての部隊編成を完了している。

MS-05の後継機としてMS-06ザクIIが開発され配備が進められた0079年頃には、輸送・工作部隊での運用が主となり、主力モビルスーツの座をMS-05ザクIIに明け渡すかたちとなった。

MS-05Q

ザクI
(ノリス少佐機)

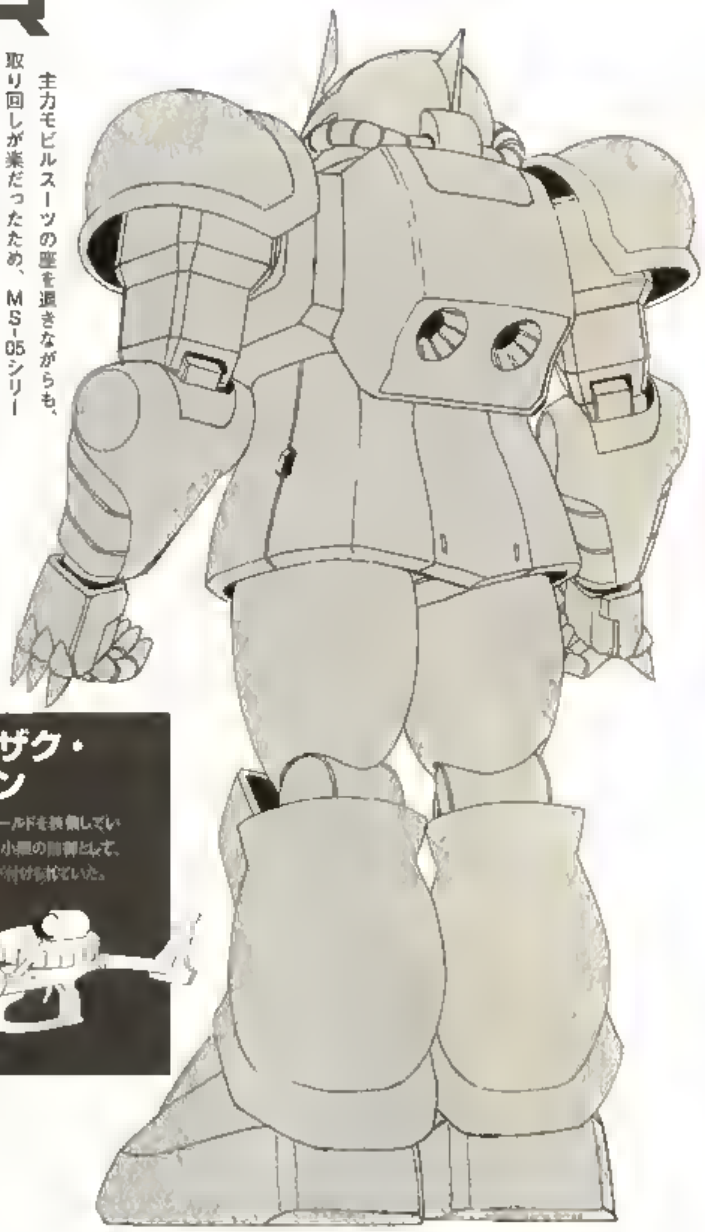


●モビルスーツバリエーション

MSV-R

主力モビルスーツの座を退きながらも、取り回しが楽だったため、MS-05シリーズは一年戦争末期まで各戦線で愛用され続けていた。

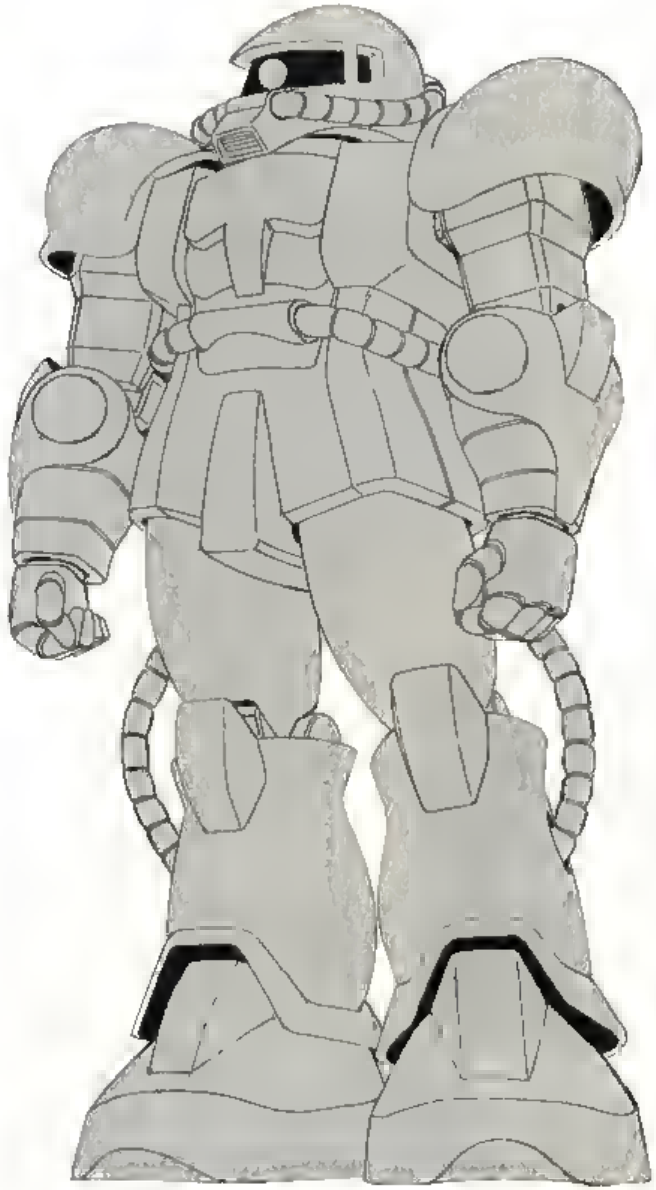
機動性能の勝るMS-06との混成編成が組まれなかった事もあり、ルウム戦役以降、目立った活躍はなかった。

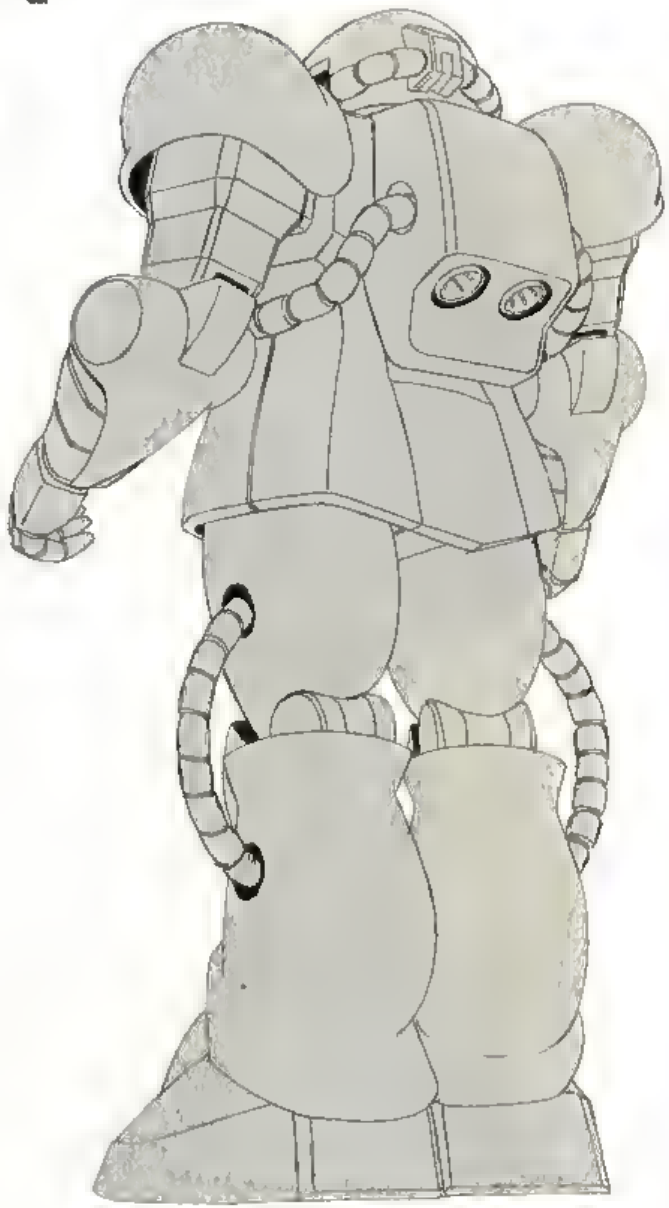


防盾付きザク・マシンガン

機体に対ショルダーシールドを装備していないが、前方からの最小限の防御として、ザク・マシンガンに盾が付けられていた。

MS-06A
ザクII



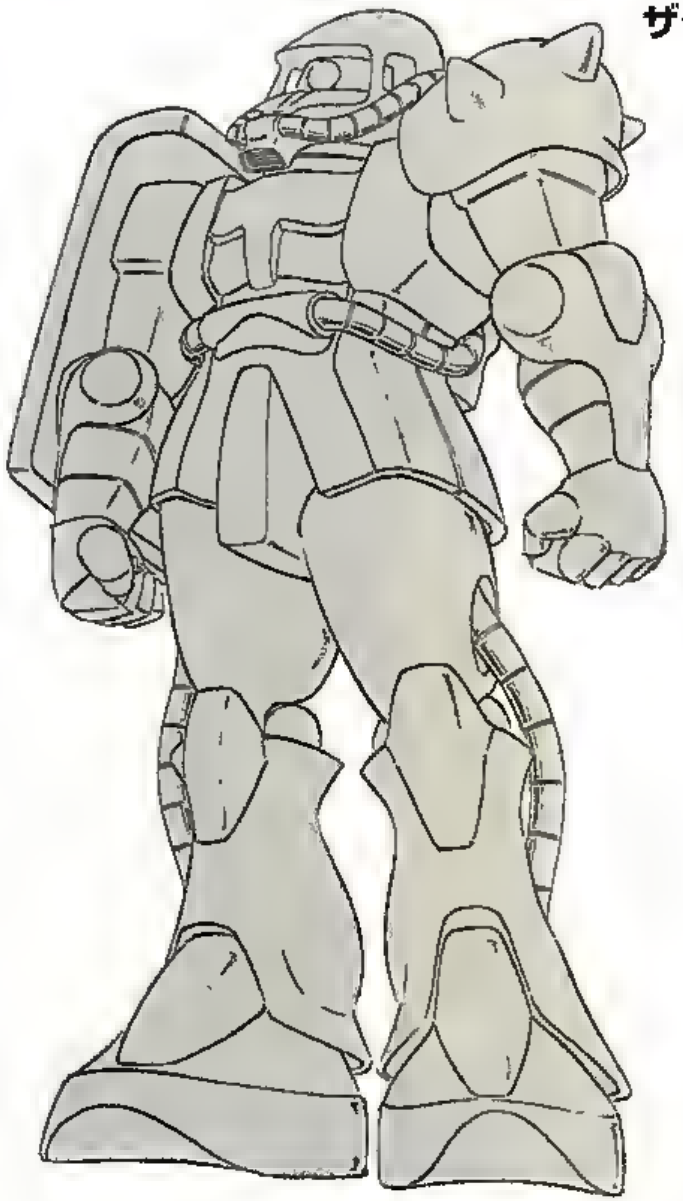


完成と同時に実戦配備された72機のMS-06Aは、●次MS-06C同様に右肩にシールド、左肩にスパイクアーマーを換装する作業が進められ、緩戦前には全機のレトロフィットを完了している。このため外観のみでA型を識別する事はできなかった。

試験運用時に見られたグリーンとブルーの塗装パターンはデモンストレーション用で、実戦配備されたMS-06Aは C、Fと同じグリーン系2色の迷彩カラーが施されていた。

MS-06Aのコクピットのレイアウトや操縦はMS-05と大幅な変更点はなく、機種転換はスムーズに行われている。

MS-06J
ザクII



ジオン公国軍の地球侵攻にしたがって登場したのが、陸戦用モビルスーツMS-06Jザクiiである。J型をベースに改造された機種で、宇宙空間戦の各種装置を取り除き軽量化する事で、重力下のパワーロスを解消している。

J型の生産は主にグラナダとキャリフォルニアベースで行われている。グラナダで生産されたJ型は第二次降下部隊から配備され、第四次降下作戦時には地球侵攻部隊の主力モビルスーツとなっていた。だが、F型に比べJ型の生産数は少なく、ほとんどが単独か、少数編成での運用しかできなかったのである。

MS-06S

ザクⅡ（黒い三連星・ガイア中尉機）

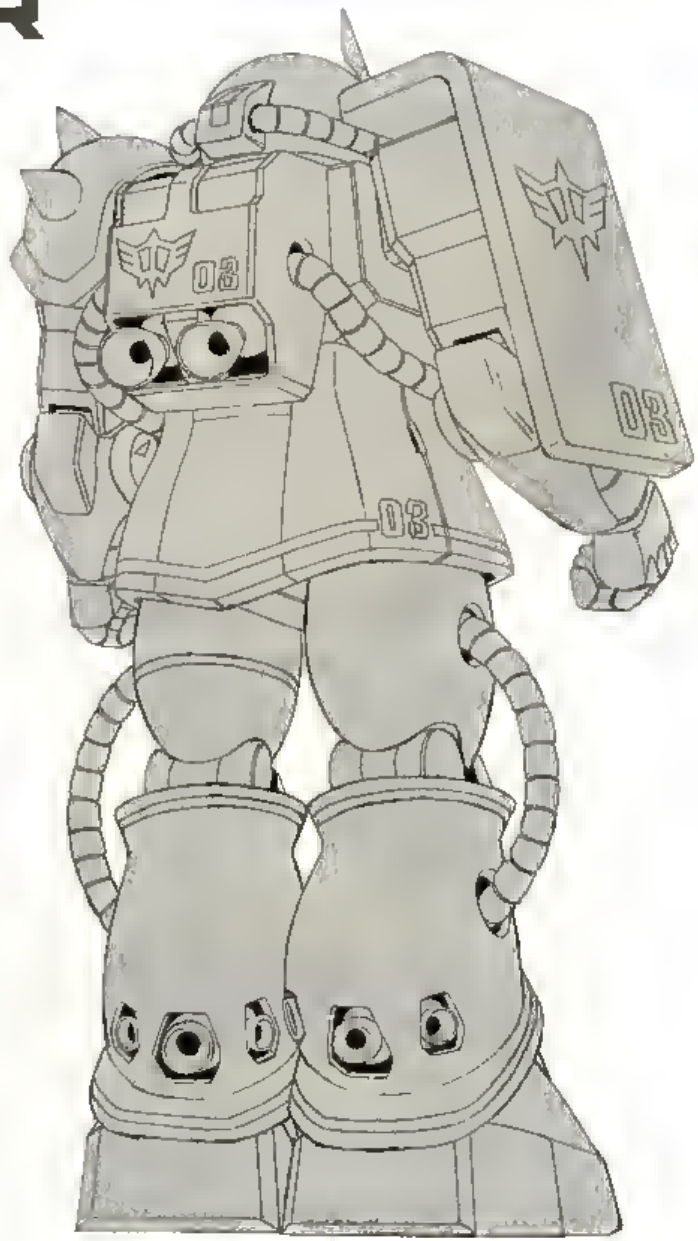
●モビルスーツバリエーション

MSV-R

練度の高いパイロットの要望に応じたかたちで機動性能を向上したS型が開発されている。F型から発展した上級モデルで、推進エンジン出力を30%アップした、130トンクラスを2基装備している。

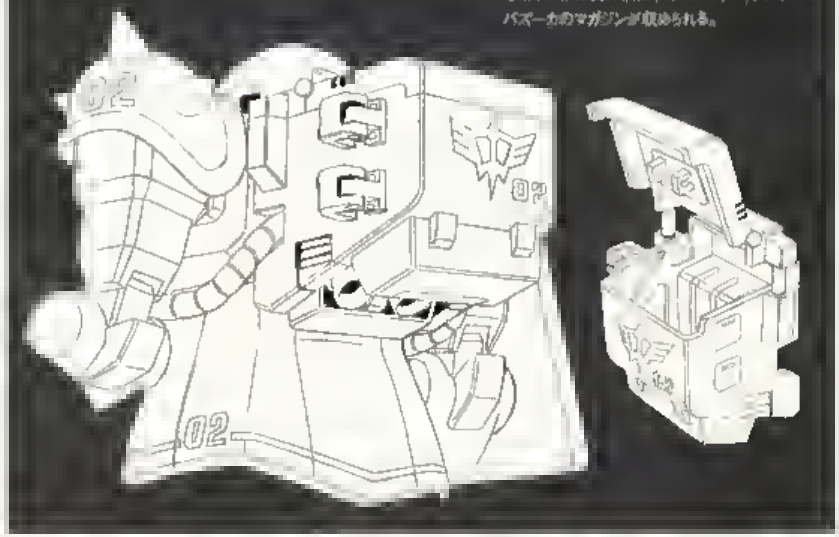
エンジンの高出力化にともない、燃料積載量の増加も図られたが、基本的に少ない燃料積載量は、後々まで本機の問題点とされた。

生産機数は約100機で、指揮官クラスや、勇名を馳せたエースパイロットの乗機として運用されていた。

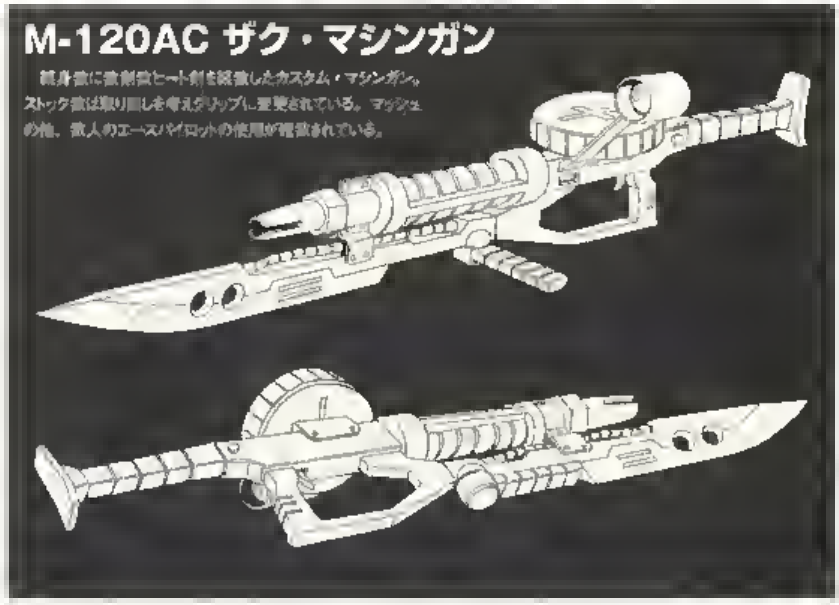


MS-06S用ランドセル

コンテナ状の専用ランドセル。「黒い三連星」ではオルテガ機に装着されている。マシンガンやバズーカのマガジンが収められる。

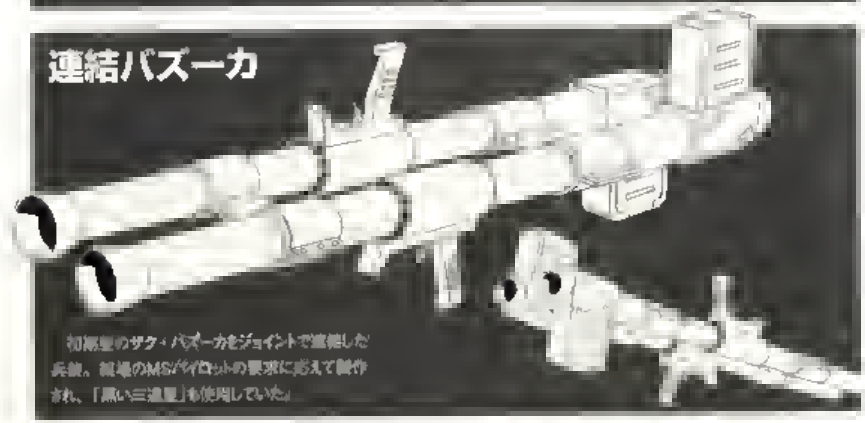


M-120AC ザク・マシンガン

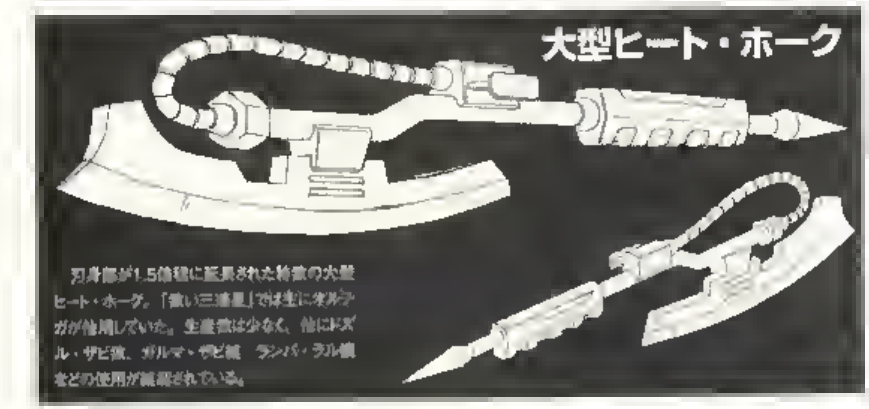


2連バズーカ

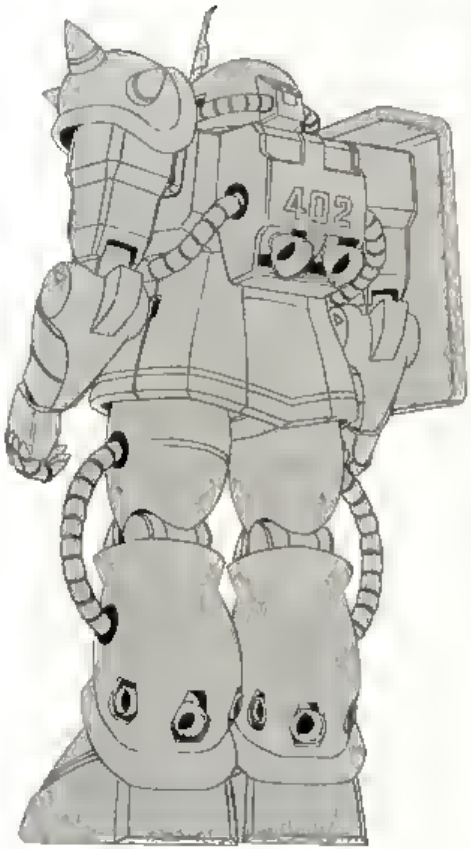
連結バズーカ

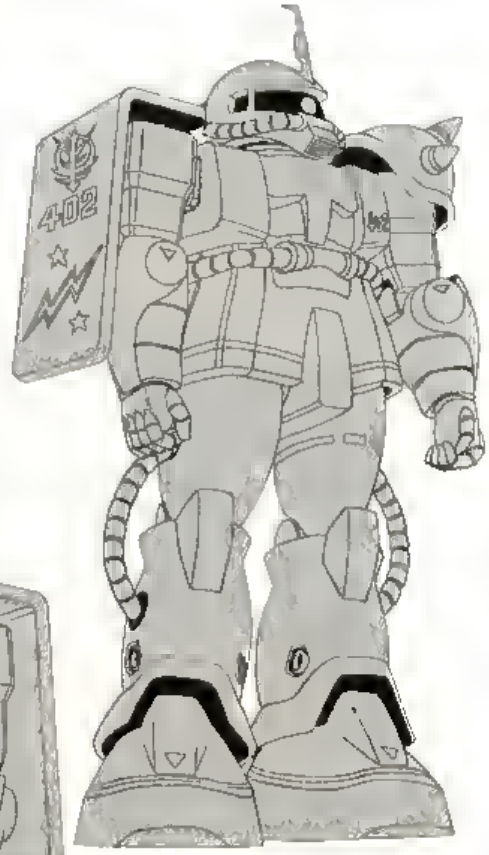


大型ヒート・ホーク



MS-06S
ザクII（ジョニー・ライデン大尉機）





ジョニー・ライデン少佐の使用したMS-06Sは、パーソナルカラーの赤で塗装された、ひときわ鮮やかな機体であった。シールドにはニックネームの「真紅の稲妻」にちなんだブルーの稲妻が描かれ、フチには白があしらわれていた。MS-06R-2への機機転機前には、シールドにジオン校章が描かれていた事が確認されている。これはリペイントで生じた違いで、機体のマーキングがいかに流動的なものであるかが判る事象の一つである。

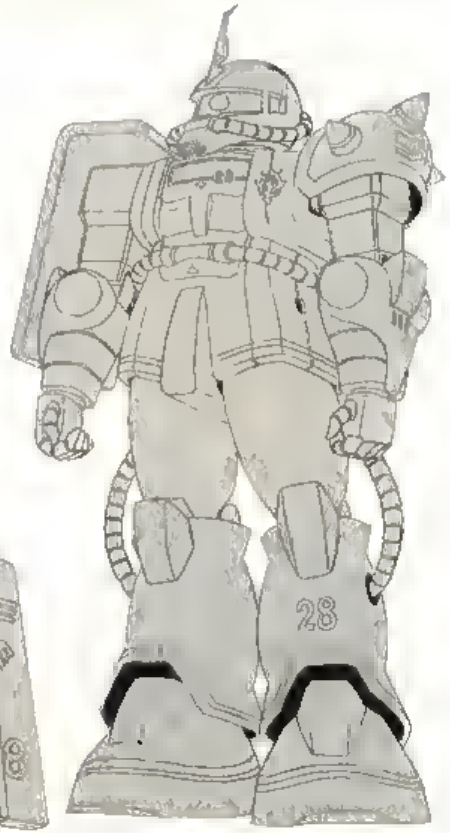
MS-06S
ザクII（エリック・マンスフィールド少佐機）

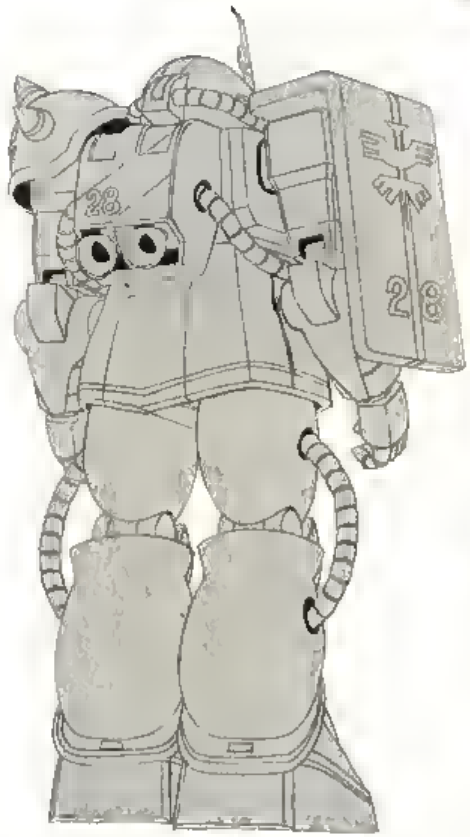
エリック・マンスフィールドの受領したMS-06FSは、FS型の初期生産型という事もあり、エンジントラブルをたびたび起こし、代替機のMS-06Fでの出撃が多く記録されている。比較的に早い時期にMS-06R-1Aに機機転換が行われたのは、この度重なる機体トラブルが起因したためとも言われている。

大戦後期に護衛任務で地球への降下が記録されているが、この時に使用したのは本機ではなく、用意された別のMS-06Sを使用していた。

MS-06S

ザクⅡ（ロバート・ギリアム中佐機）





ロバート・ギリアムは、MS-06S使用時期に、戦闘中に敵の攻撃でシールドごと右腕を破壊されるという大きな損傷を受けたことがある。戦闘は本国に向かう補給艦隊護衛任務で、艦艇の盾となっての応戦中の被弾だった。右腕を失いながらも左腕でマシンガンを撃ち戦闘を続行、補給艦隊をほぼ無傷のまま本国へ送り届けた。

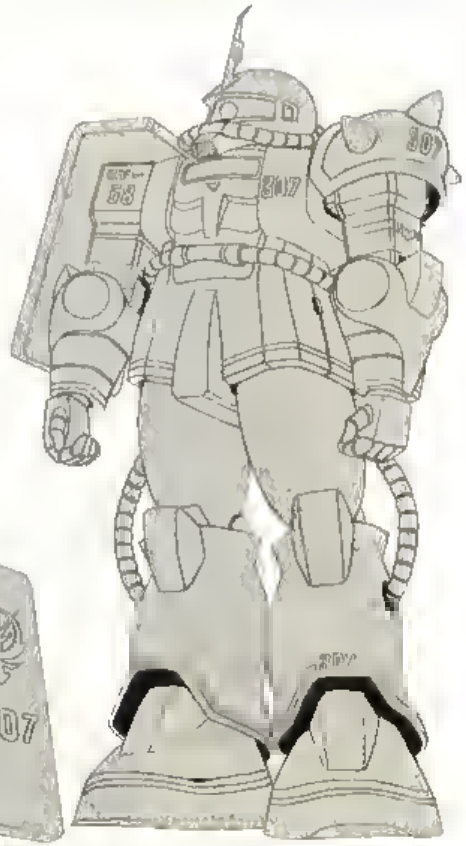
後日、この補給艦隊と共に異動してきた整備部隊によって、ギリアム大佐のMS-06Sの右腕の修復作業が行われた。

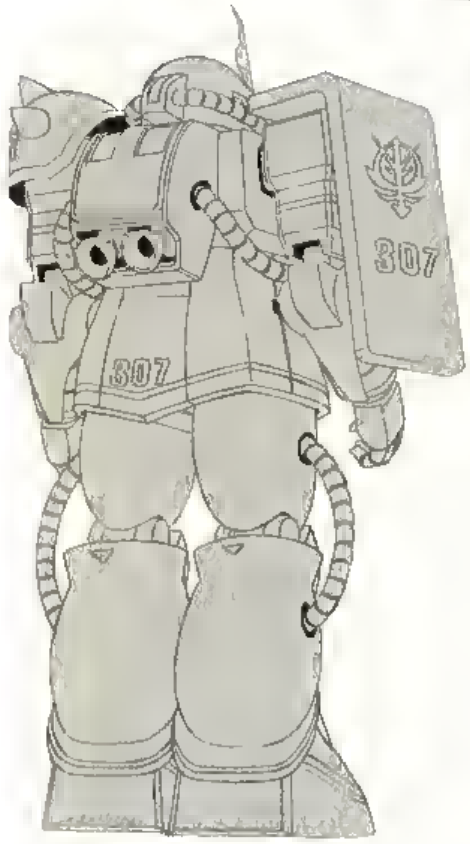
●モビルスーツバリエーション

MSV-R

MS-06S

ザクⅡ（ギャビー・ハザード少佐機）

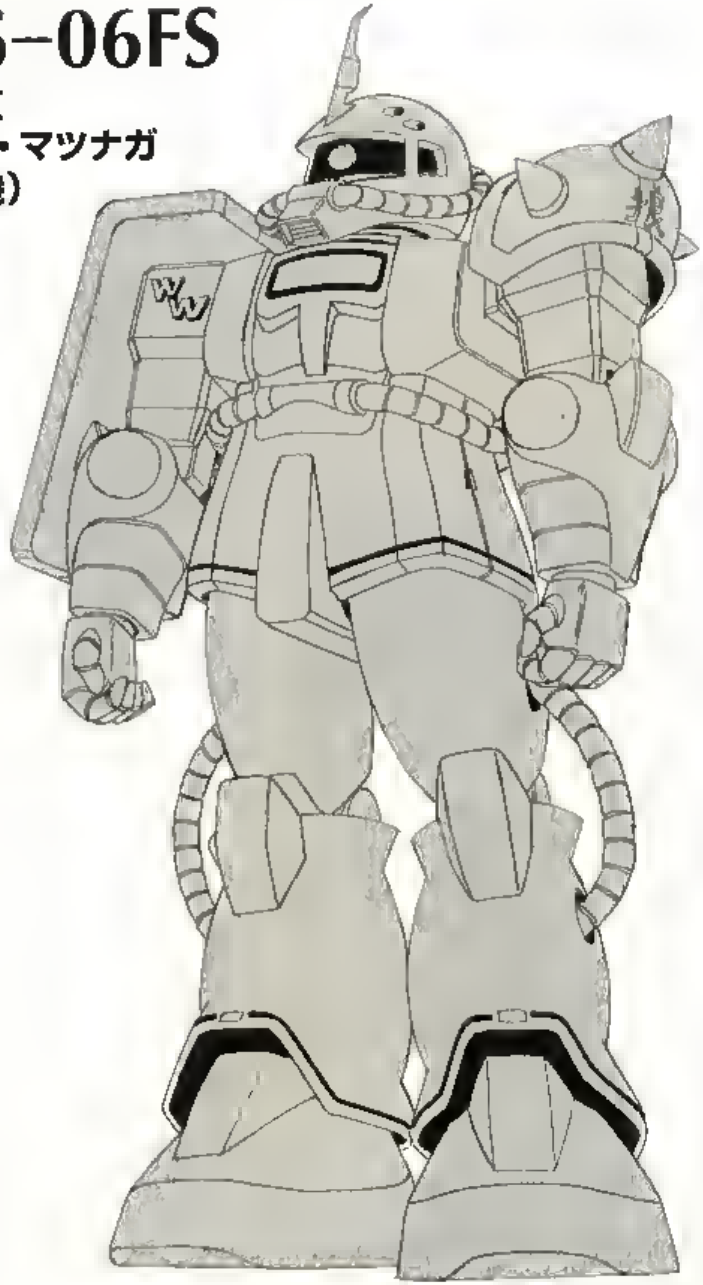




ギャビー・ハザードはMS-06Sに機種転換から間もなく参加した作戦で、積載燃料を使い切って慣性航行するだけの操縦不能に陥り、数時間ではあるが、M.I.A.（ミッション・イン・アウト）となっている。

推進力の向上したMS-06SやMS-06Rタイプでは空間戦闘中に最も起こりやすいトラブルの一つで、上位機種を扱うパイロットに対し常に注意がされていた。機動力の高い機体は危険と背中合わせだったのである。

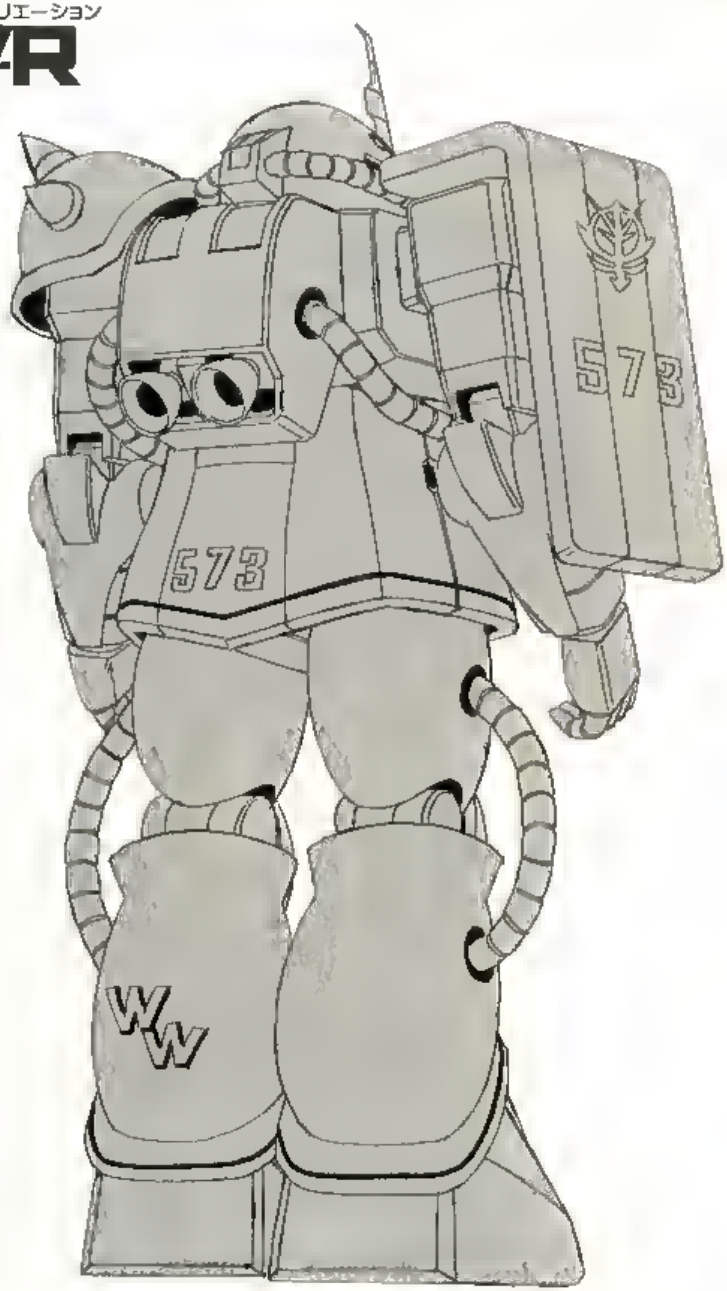
MS-06FS
ザクII（シン・マッナガ中尉機）



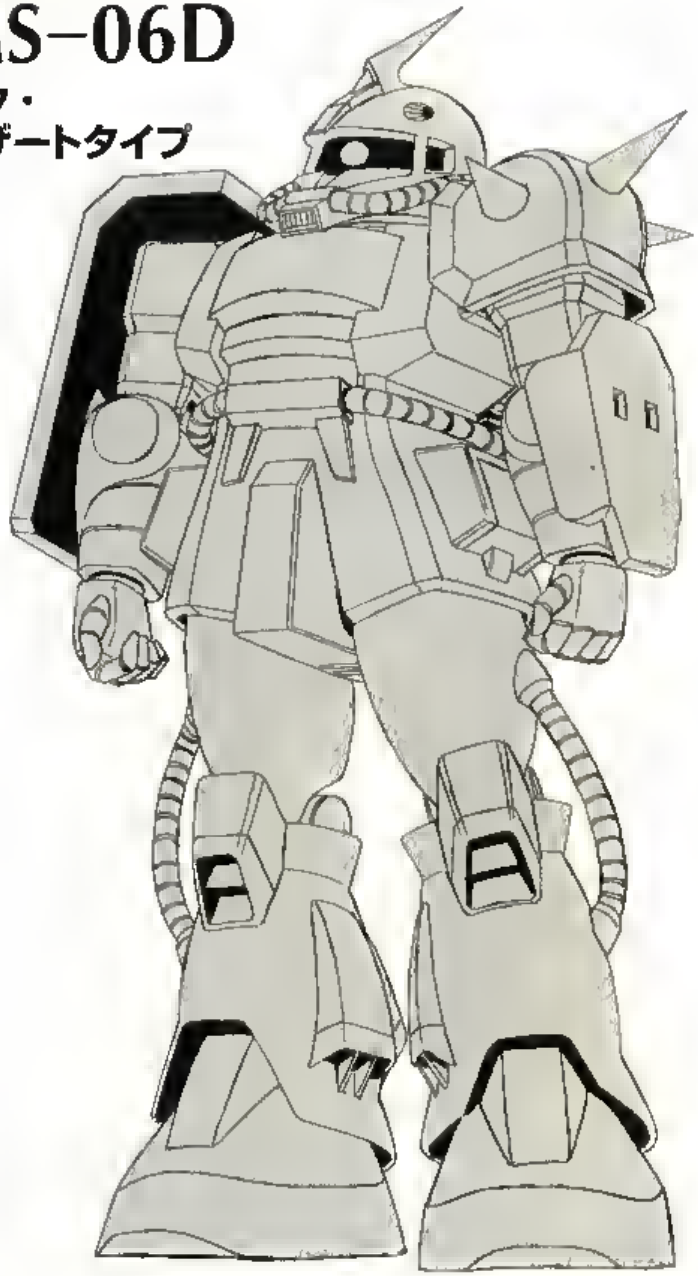
●モビルスーツバリエーション
MSV-R

本土の防空任務に活躍したシン・マッナガ中尉（当時）の使用したMS-06FSは機体をオフホワイトで塗装、右肩と左側後方にはホワイトウルフの頭文字「WW」が描かれ、シールドとスパイクアーマーにはブルーのラインが描かれていた。

マッナガ大尉がMS-06R-1Aの受領後、本機はグラナダ基地守備隊への配備が決定していたが、ジオニック社からの依頼を受け、研究機体として再整備せず現状のままでジオニック社に送られている。

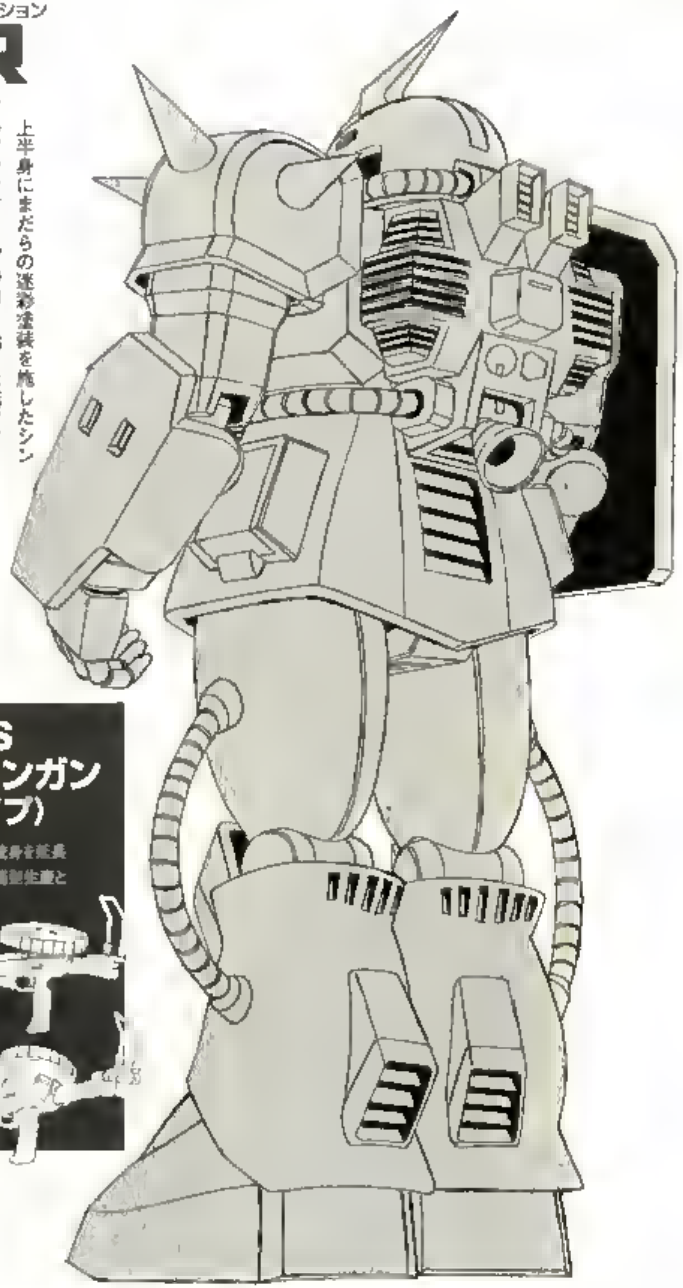


MS-06D
ザク・デザートタイプ



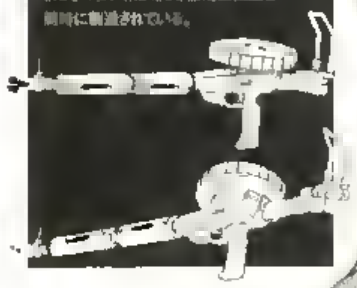
●モビルスーツバリエーション
MSV-R

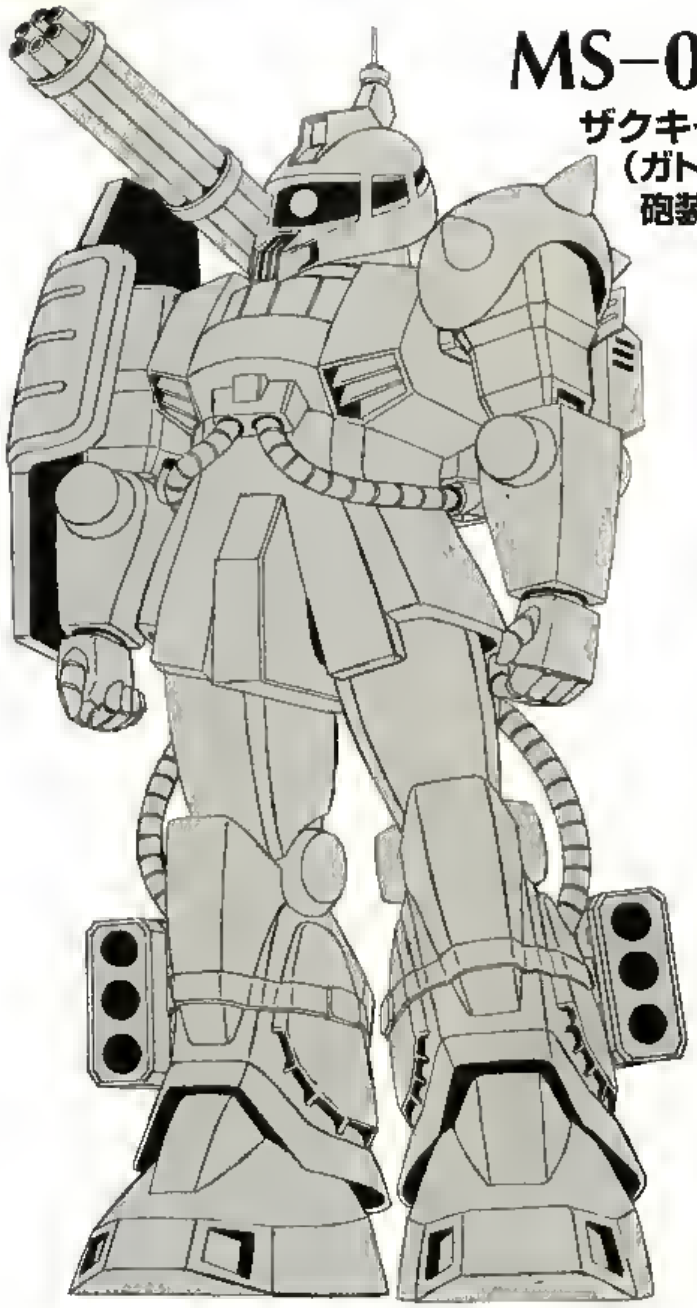
上半身にまだらの迷彩塗装を施したシングルアンテナタイプのMS-06Dは西アフリカ戦線で活躍したガリボルディ部隊の所属機である。このMS-06D後期型に施された特徴的な迷彩塗装はサバンナ地帯用として用いられた実験パターンの一つで、同隊のMS-06Dには別パターンが施されていた。



M-120AS
ザク・マシンガン（長銃身タイプ）

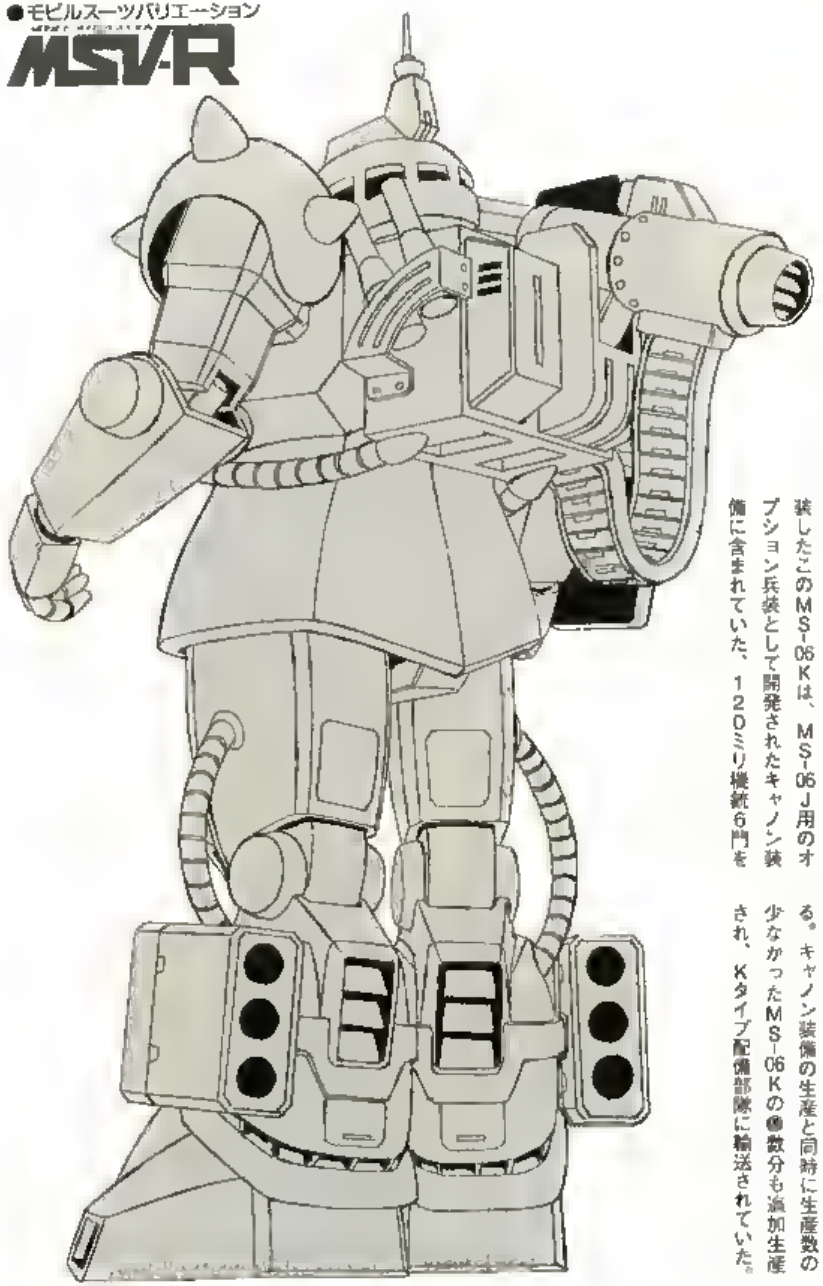
MS-06D用マシンガンの銃身を延長したもので、MS-06D後期型生産と同時に製造されている。





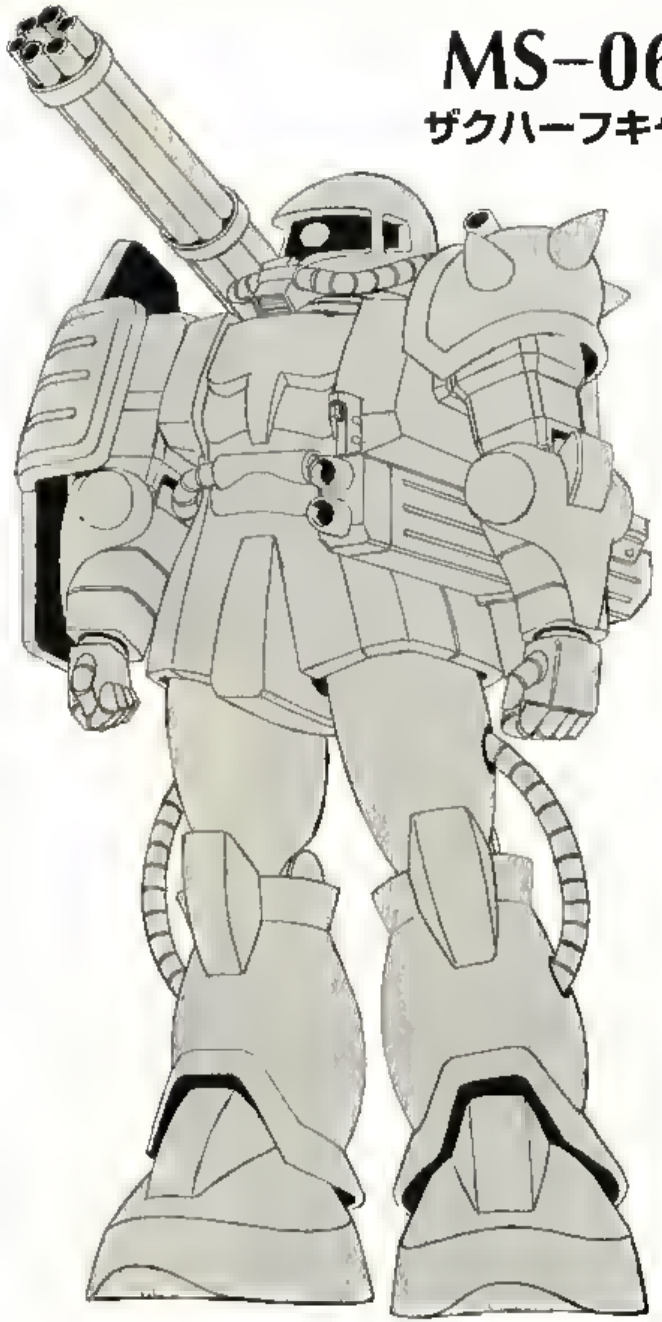
MS-06K

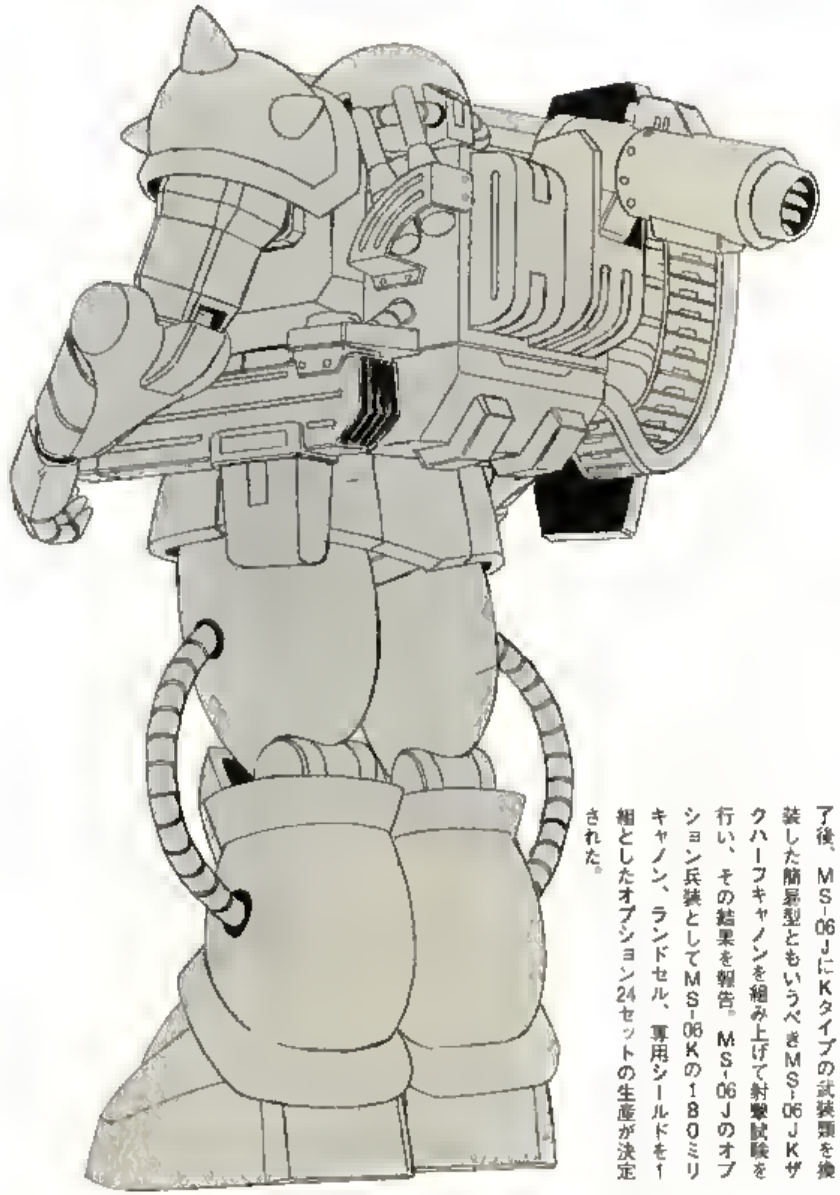
ザクキャノン（ガトリング砲装備型）



180ミリキャノンをガトリング砲に換装したこのMS-06Kは、MS-06J用のオプション兵装として開発されたキャノン装備に含まれていた、120ミリ機銃6門を束ねたガトリング砲を装備したものである。キャノン装備の生産と同時に生産数の少なかったMS-06Kの●数分も追加生産され、Kタイプ配備部隊に輸送されていた。

MS-06JK
ザクハーフキャノン

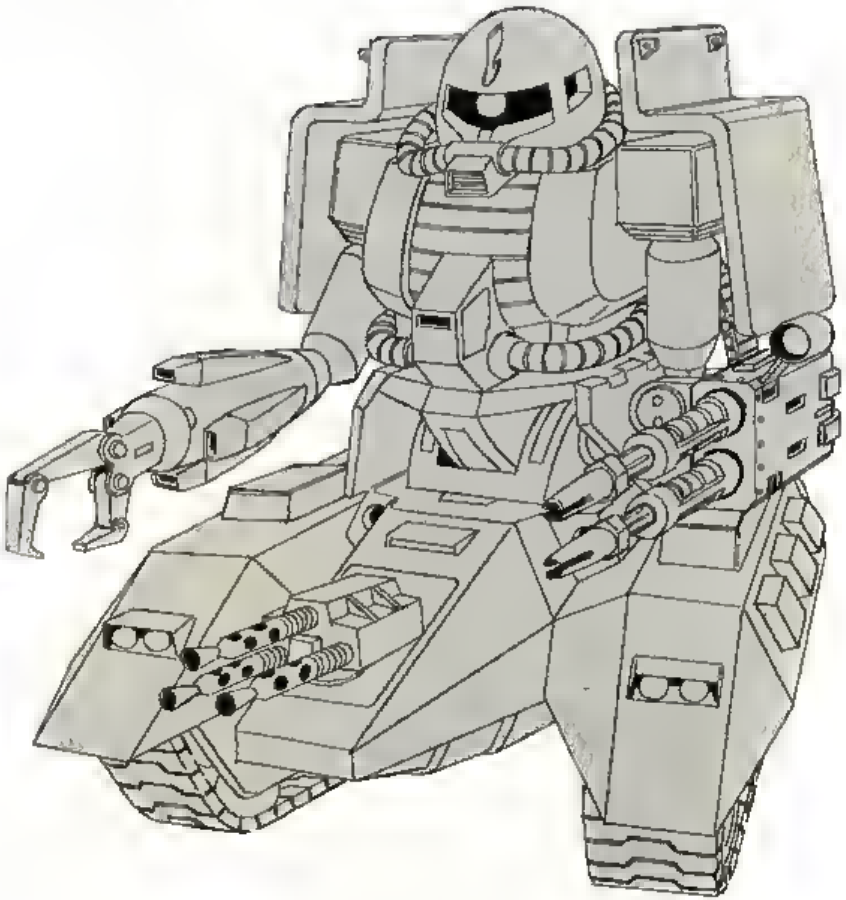


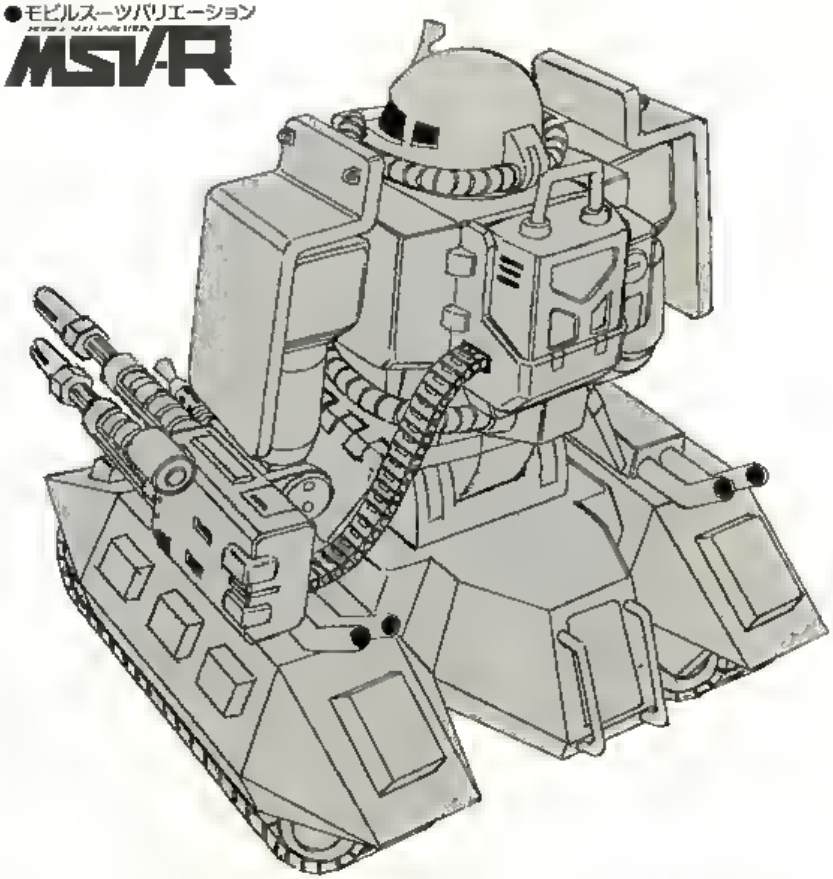


ジオニック社の開発陣は、K型の試作終了後、MS-06JにKタイプの試装類を換装した簡易型ともいうべきMS-06JKザクハーフキャノンを組み上げて射撃試験を行い、その結果を報告。MS-06Jのオプション兵装としてMS-06Kの180ミリキャノン、ランドセル、専用シールドを1組としたオプション24セットの生産が決定された。

MS-06V-8

ザクタンク
(ワイルドボア)



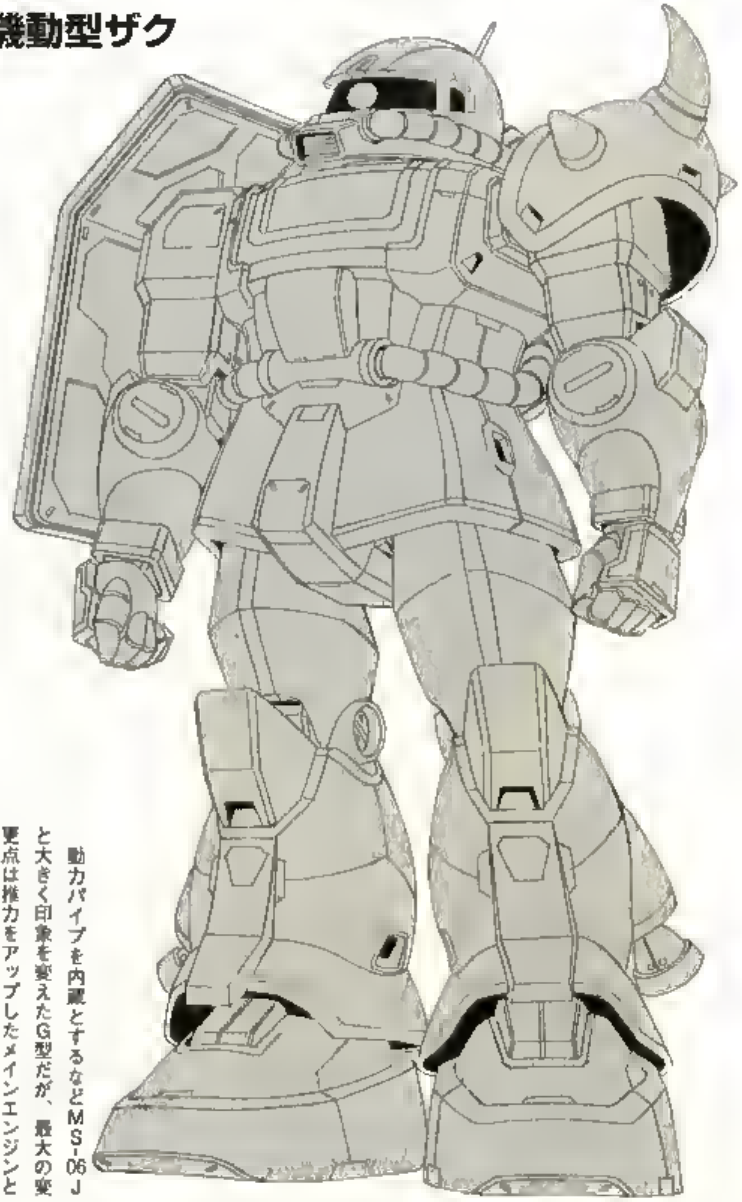


MS-06V-8は戦況の悪化により戦力不足に陥った前線部隊が苦肉の策として現地改修した機体で、主力機であるMS-06の損失により余剰となったザク・マシンガンを流用。固定武器として装備したもので、背部には大型のマガジンラックが取り付けられた。このラックにはザク・マシンガンのマガジンの約3.5倍の装弾が可能であった。

MS-06J、MS-06V-8、どちらにも搭乗経験のあるパイロットによると、射撃性能においては優れていたと証言する者が多くいた。機因としては装弾数が増加しているため、連射しながらの弾道修正するゆとりがあった事などが挙げられている。

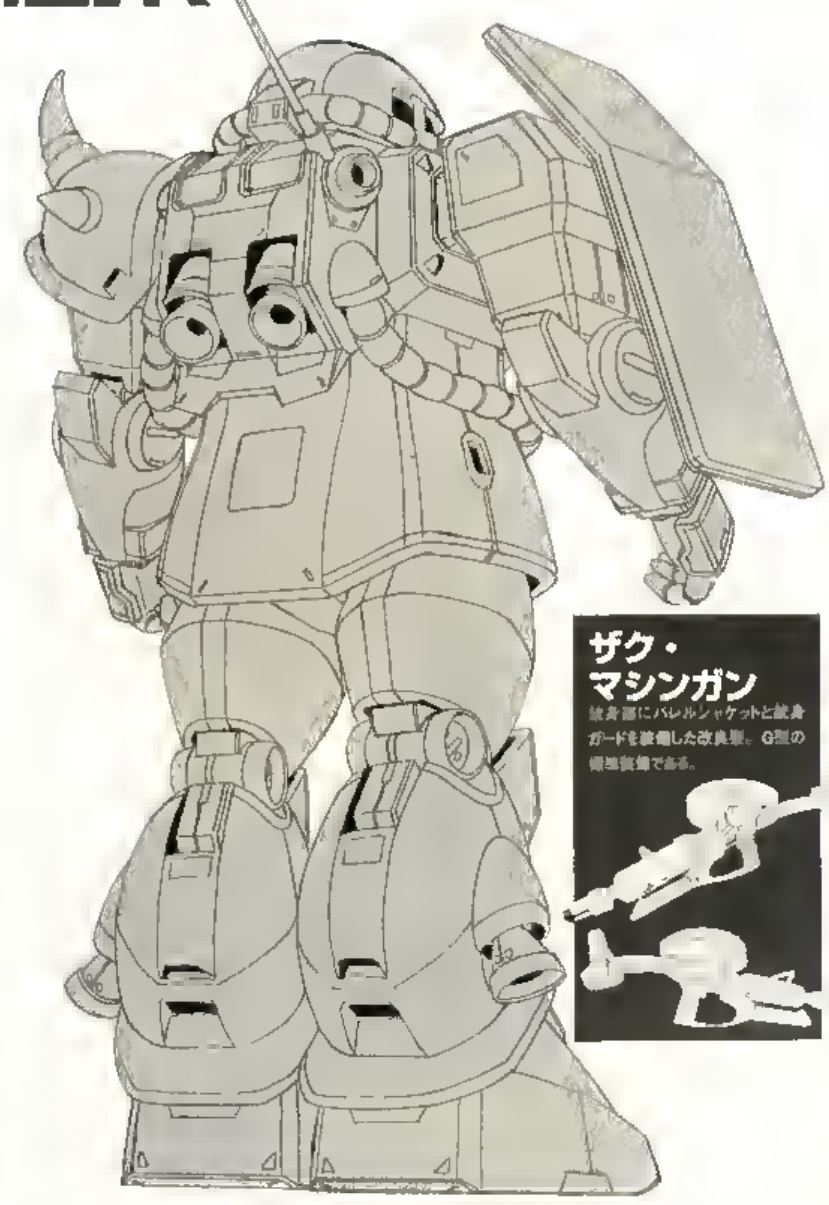
火力ではブラス機関の多いMS-06V-8だが、やはり欠点もあった。もともと建設作業などを主任務として建造されたため、機動性能は低く、装甲スピードはベースとなったマゼラ・アタックの約70%ほどであった。また機機の増加により機帯の切断が増加してしまい、戦闘中は履帯に負荷のかかる機信地旋回が禁止されていたようだ。

MS-06G
陸戦高機動型ザク



動力パイプを内蔵とするなどMS-06Jと大きく印象を変えたG型だが、最大の変更点は推力をアップしたメインエンジンと脚部に設けられたスラスターにより得られた高い機動性能であった。

生産されたMS-06Gは、主にヨーロッパ戦線とアフリカ戦線に配備されていた。



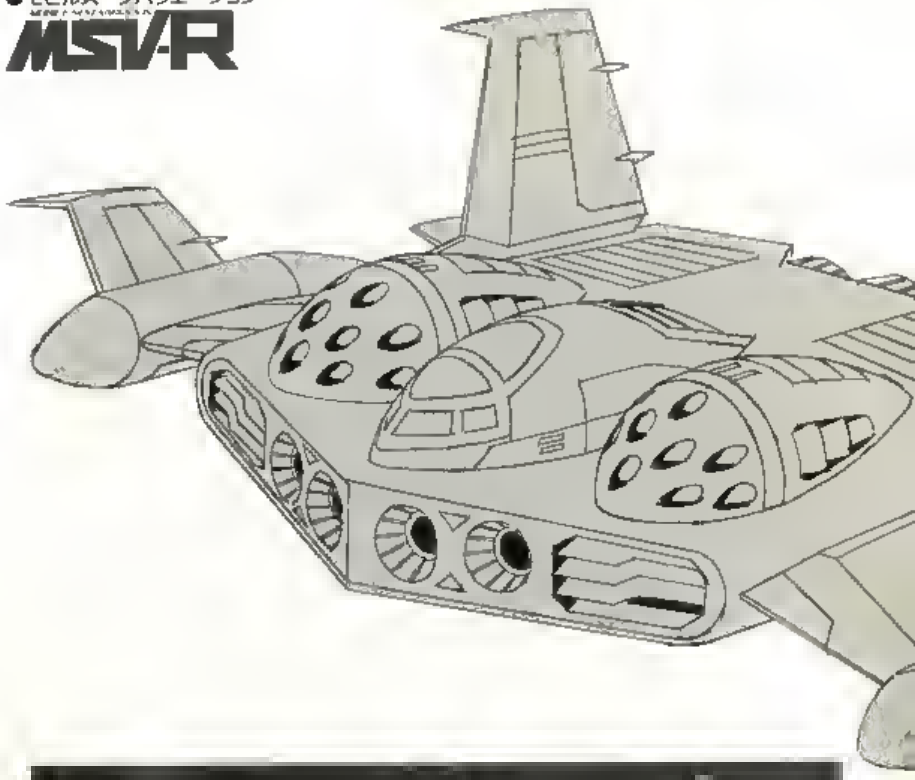
ザク・マシンガン

統合整備計画により、ザクIIF型の余剰パーツを流用して生産された簡易量産型。

重爆撃機ド・ダイGA

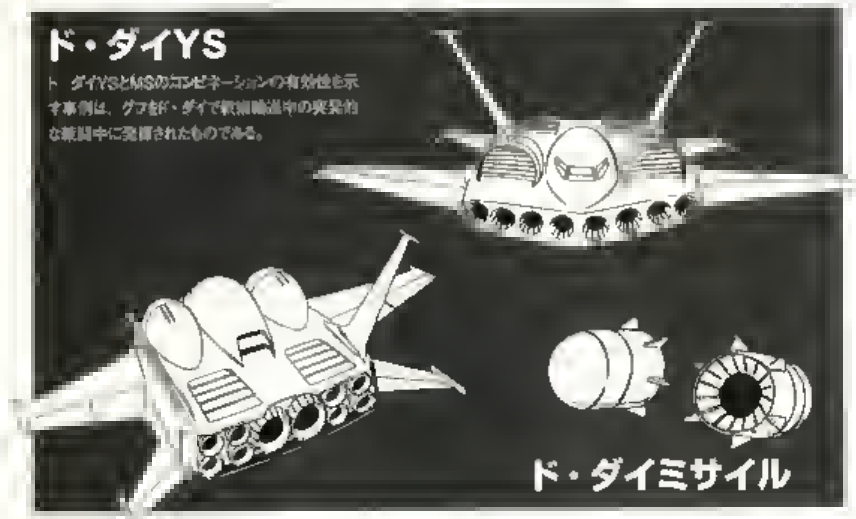
新型ド・ダイは、ド・ダイYSの機首部面に装備された8連装ミサイルランチャーを4連装として、空いたスペースにエアインテークを配置。機体上面のエアインテークスペースには、新たに対地ミサイルを装備している。更に滑走離着陸の流砂防止のために、主翼をガルウイングに変更、その中央にメイン・ランディングギアを配置。

この変更によりランディングギアの全長を短くする事が可能となり、外観からはボリュームアップしたような印象を受けるが、機体重量は逆に約3パーセント軽量化している。ランディングギアの重量は、通常の戦闘機の機体重量の約5パーセントから10パーセントを占めるもので、サイズの小型化は軽量化に直結する事になった。

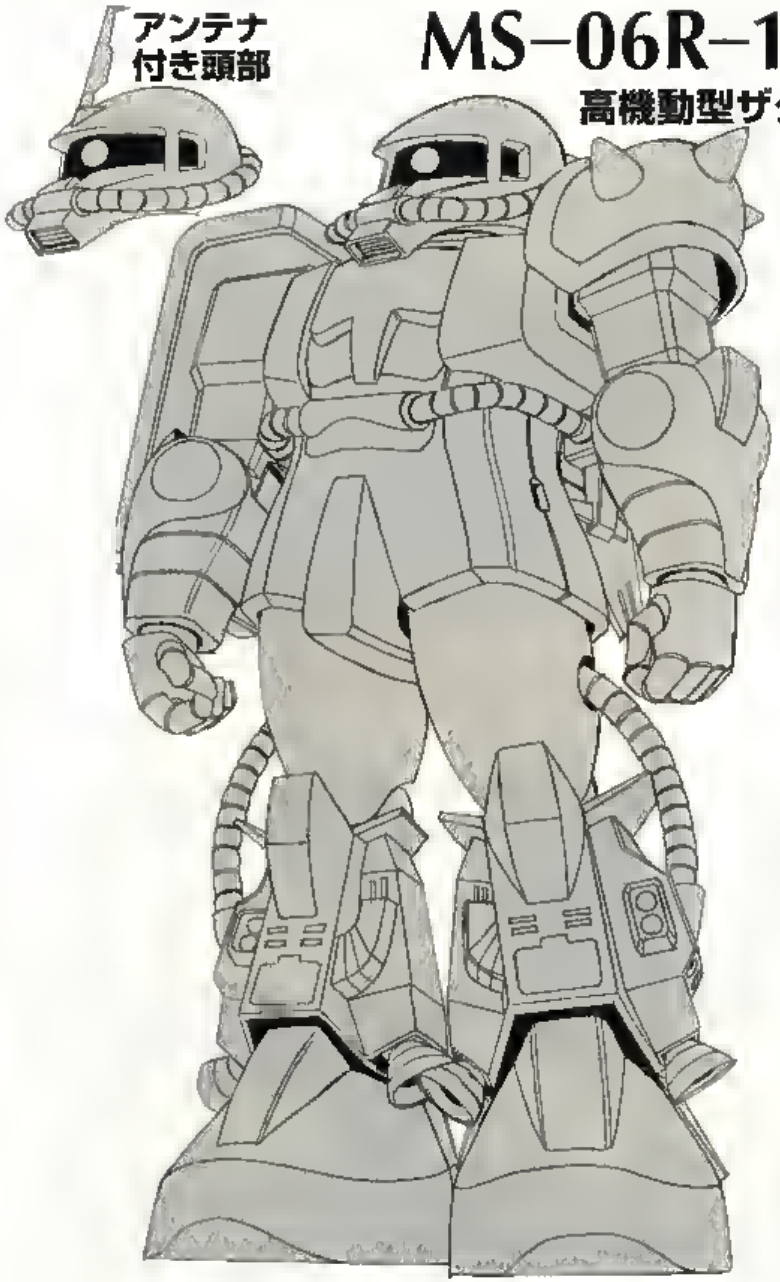


ド・ダイYS

ド・ダイYSとMSのコンビネーションの有効性を示す事例は、グフをド・ダイで戦域輸送中の突発的な戦闘中に発揮されたものである。



ド・ダイミサイル



MS-06R-1A

高機動型ザクII

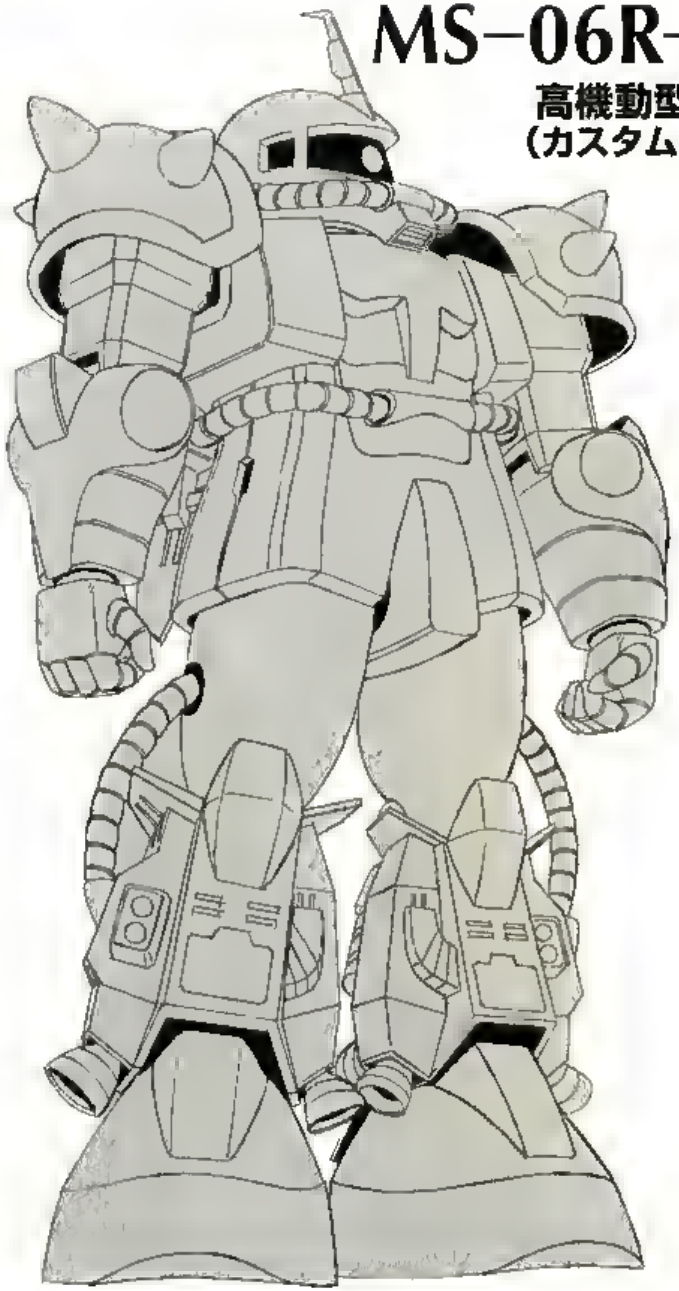
●モビルスーツバリエーション

MSV-R

ジオン軍の誇るモビルスーツMS-06Fをベースに開発されたMS-06RPは高性能を示し、間もなく量産化が決定。グラナダ工廠とジオン本国のジオニック社の工場で、初期生産型MS-06R-1が22機製造された。エースと言われる無線パイロットを中心に実戦配備されたMS-06R-1の評判は概ね上々だったが、推進エンジンの不良と積載燃料の少なさが指摘された。エンジンを換装して、脚部補助燃料タンクをカートリッジ式に設計変更したMS-06R-1Aが開発され、初期生産型のうち10機がR-1Aに改修され、後期生産型についても全てR-1Aに変更されている。欠点を克服したR-1Aの評価は高く、最前線での戦果も目覚ましいものであった。

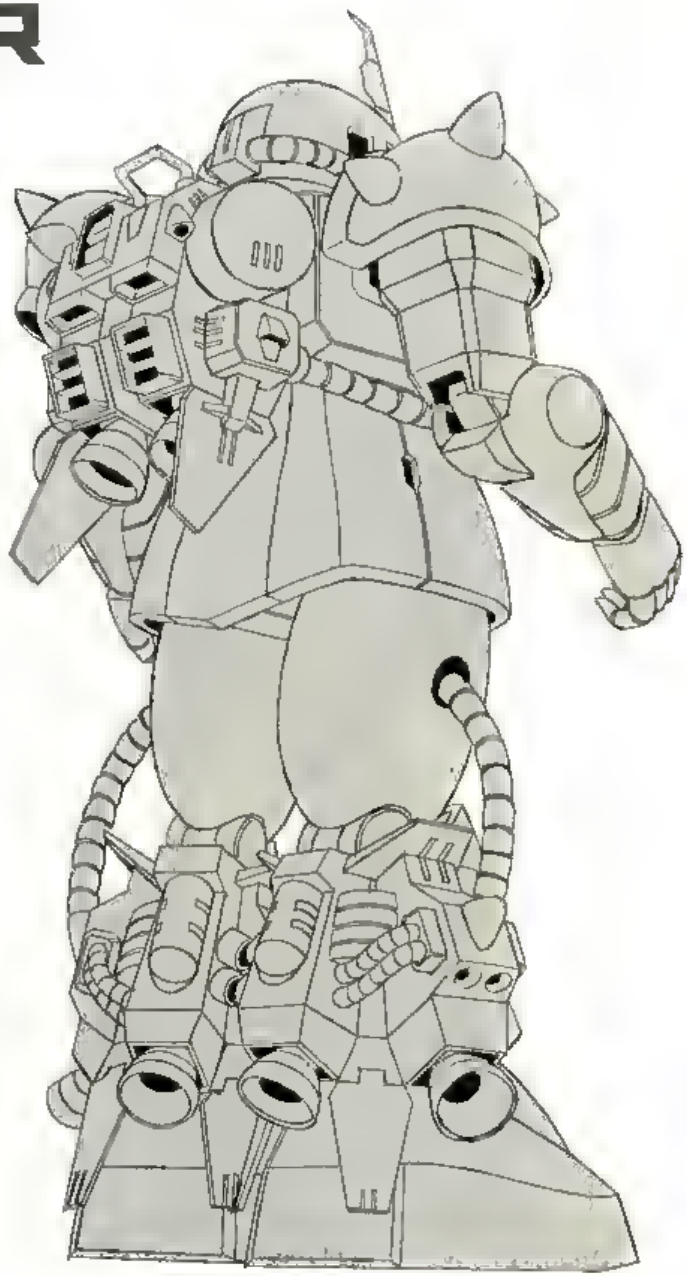
MS-06R-1A

高機動型ザクII
(カスタムタイプ)



●モビルスーツバリエーション

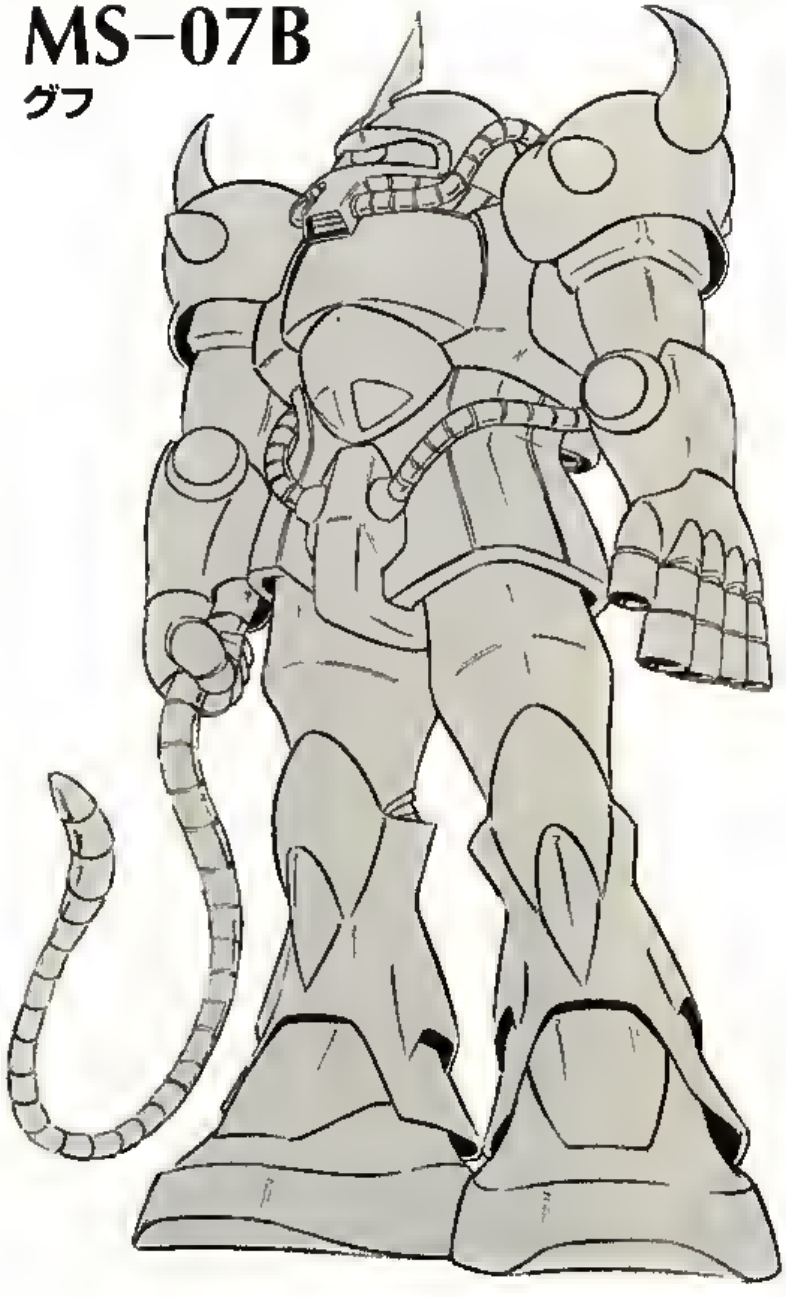
MSV-R



余剰機を流用して用意されたマツナガ大尉用の代替機である本機だが、適正なパイロットが見当たらなかった為に部隊配備されなかった機体であり、余剰機という表記は的確ではないと言える。最上位機種だけに容易に入手できる機体ではないという証でもある。

使用された機体は、Rタイプの初期生産型MS-06R-1で、燃料タンクをカートリッジ式に改修したMS-06R-1Aである。両肩に装備されたスパイクアーマーの詳細は不明だが、ドズル・ザビ中将の腹心といわれたマツナガ大尉の乗機であり、上司であるドズル中将のカスタム機同様に、シンホリックな意味合いからの変更かもしれない。

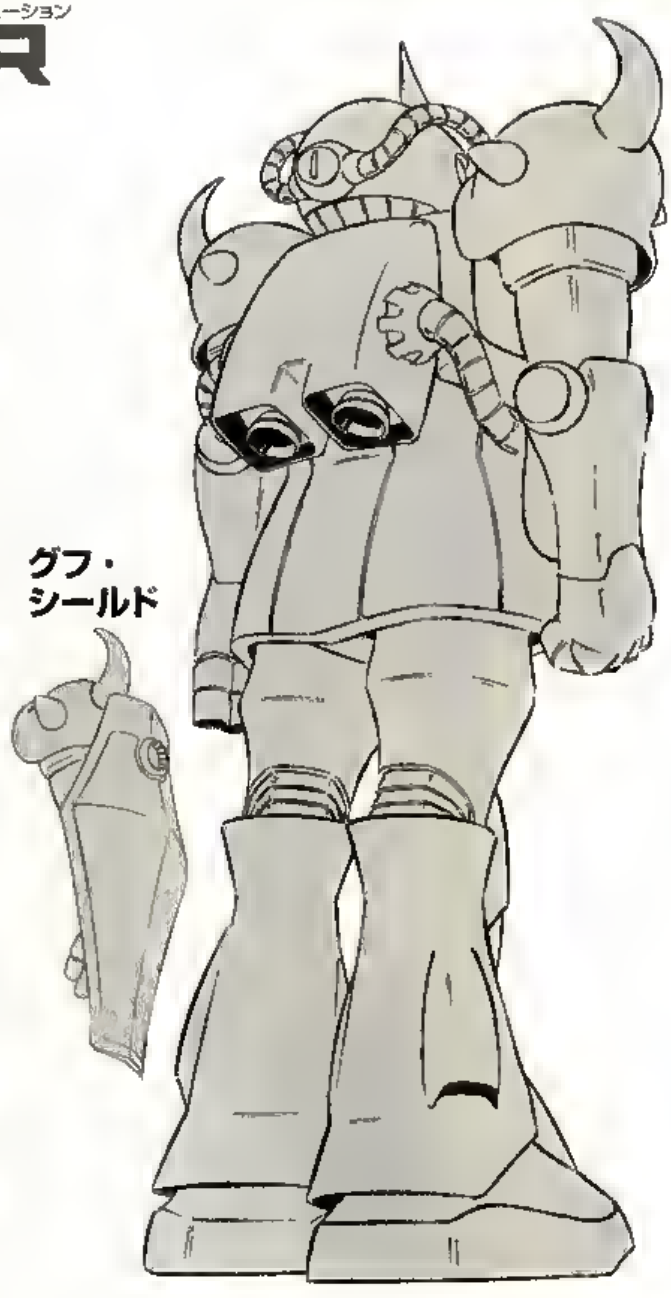
MS-07B
グフ



YMS-07の試作3号機を原型として量産化されたMS-07Bは、モビルスーツとして初めて固定武装を搭載した機種である。プロトタイプ開発段階で軽量化と高性能化を両立し、固定武装化が可能になったのである。計画変更にともなう各所の改修作業は順調に進み、MS-07Bの型式ナンバーが与えられた。

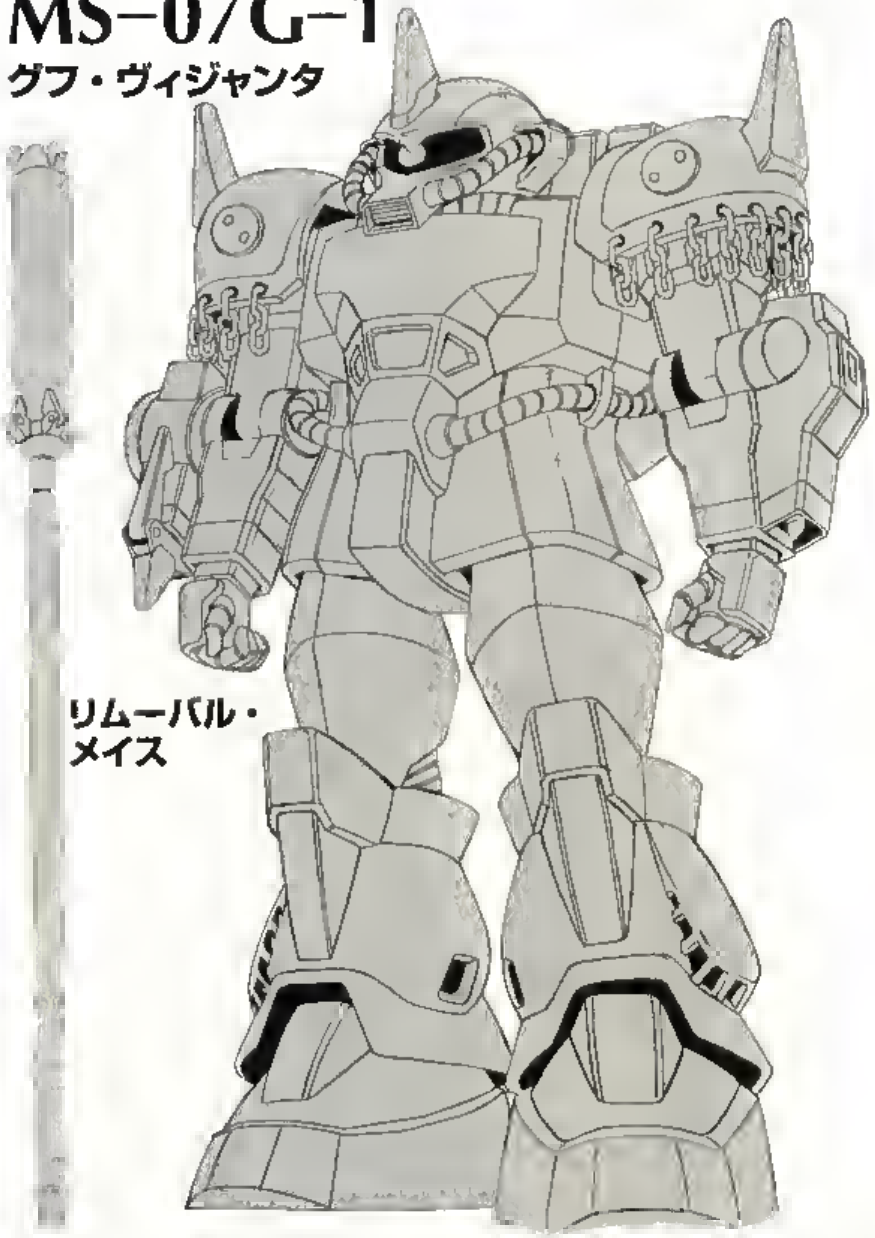
背部の大型ランドセルは、競作されたYMS-08開発計画が、YMS-07計画に導入された物で、短距離ジャンプ飛行が可能となった。

MS-07Bは、グラナダとキャリフォルニア・ベースのMS-06Jの生産ラインを転用して生産が行われている。



グフ・
シールド

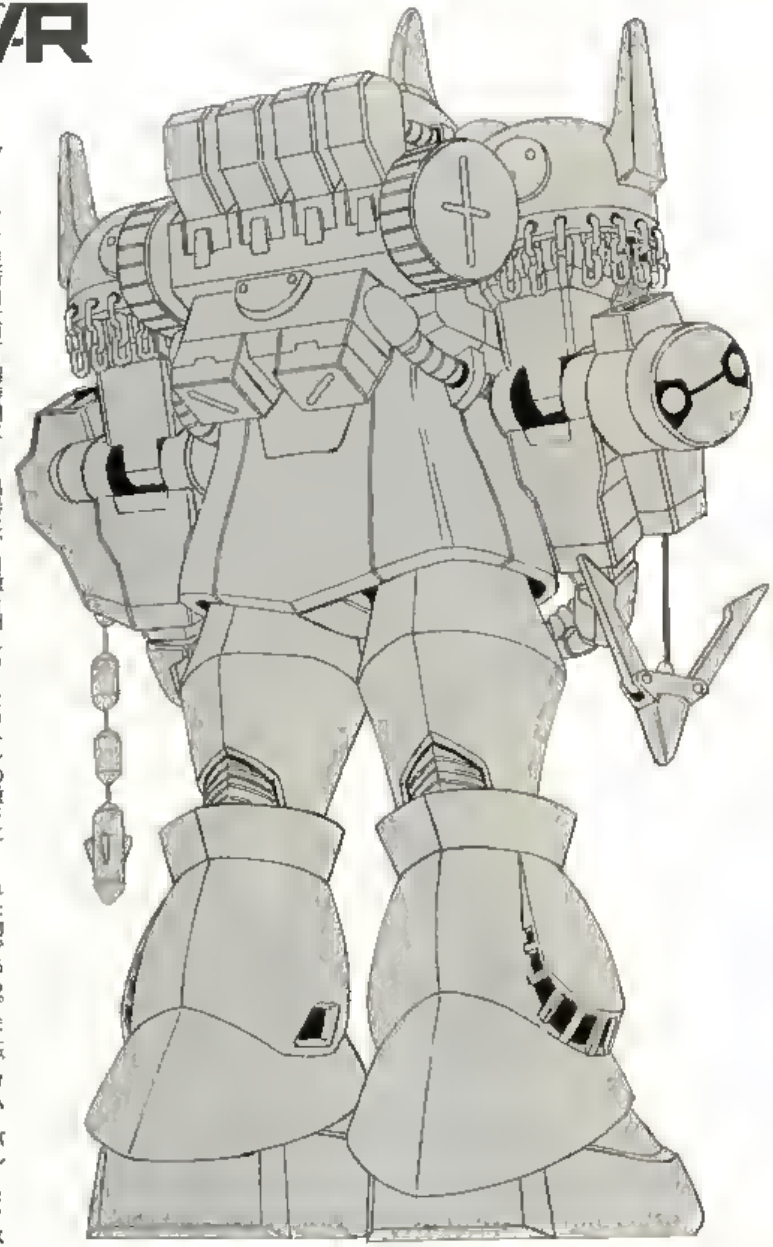
MS-07G-1
グフ・ヴィジャンタ



リムーバル・メイス

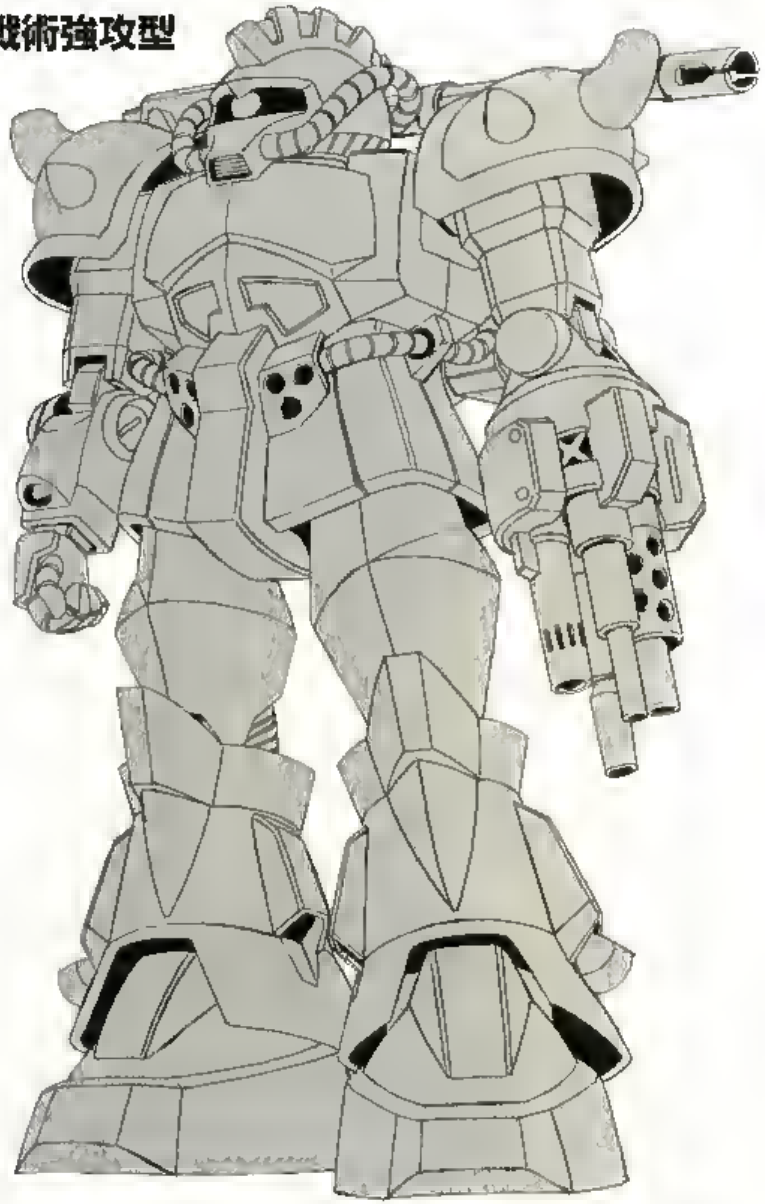
MS-07G-2グフ戦術強攻型と同時期に開発が進められたのがMS-07G-1グフ・ヴィジャンタである。

右重に装重されたグラップルワイヤー射出器は、自重を超える120トンの重さに耐える特殊ワイヤー85メートルが収められ、先端部には展開式のフックが配置されている。高い崖の登坂などを目的に開発された物である。また、リムーバル・メイスと呼ばれる特殊機構は先端部に爆薬をセットして使用する物で、障害物破壊を目的として開発された。



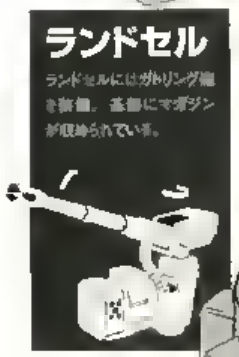
MS-07G-2

グフ戦術強攻型



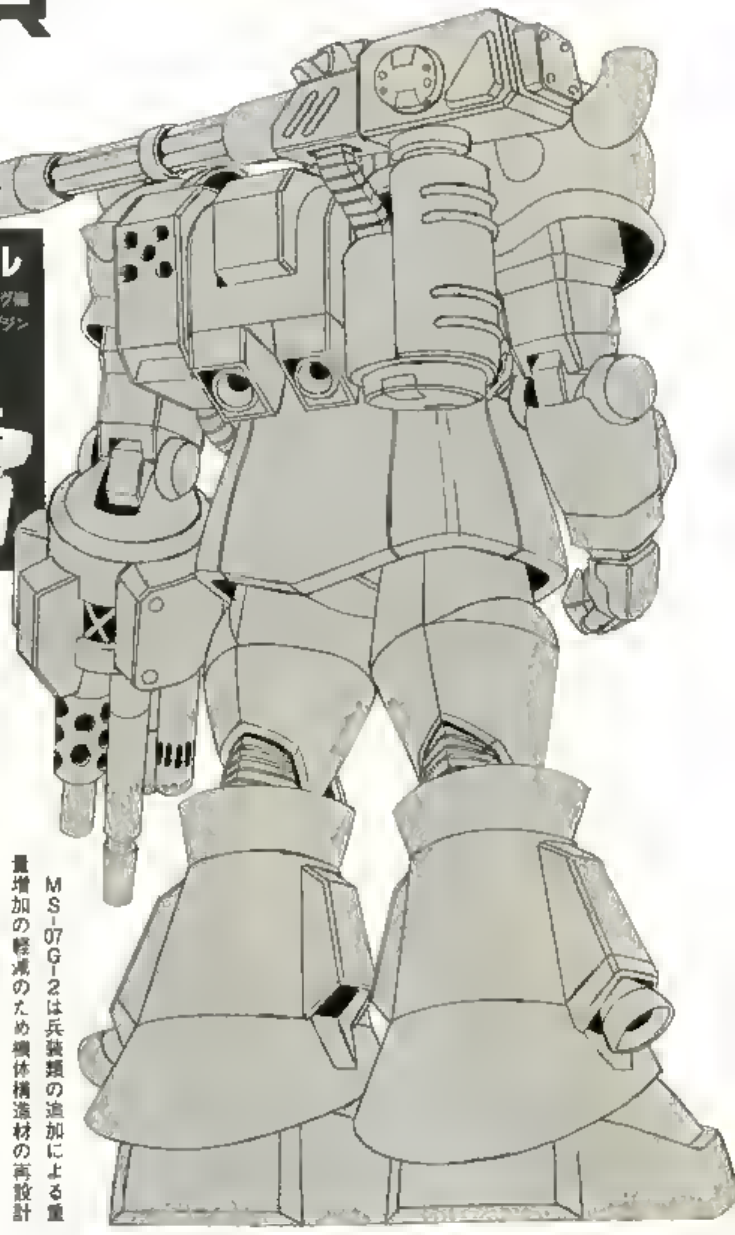
●モビルスーツバリエーション

MSV-R



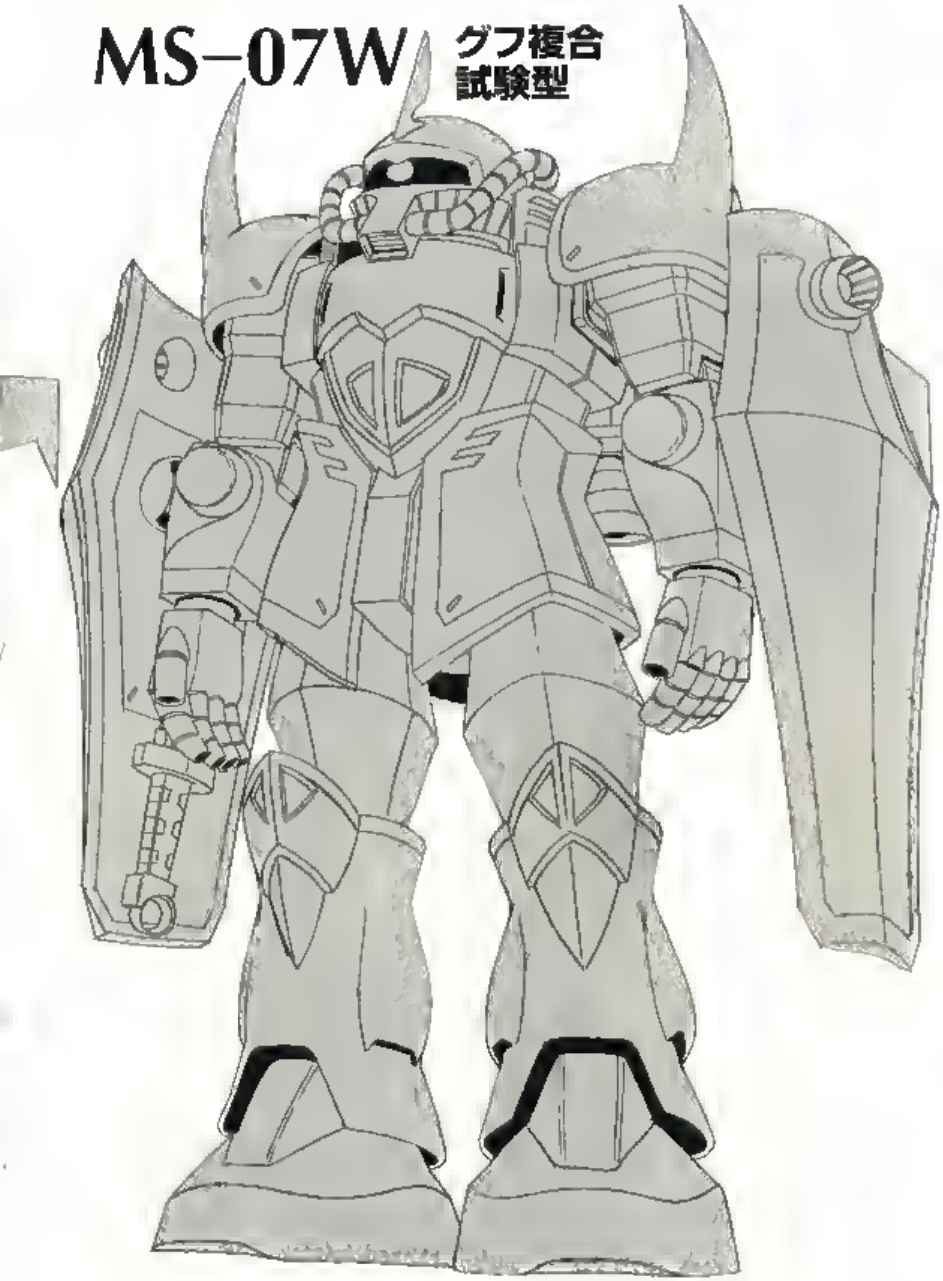
ランドセル

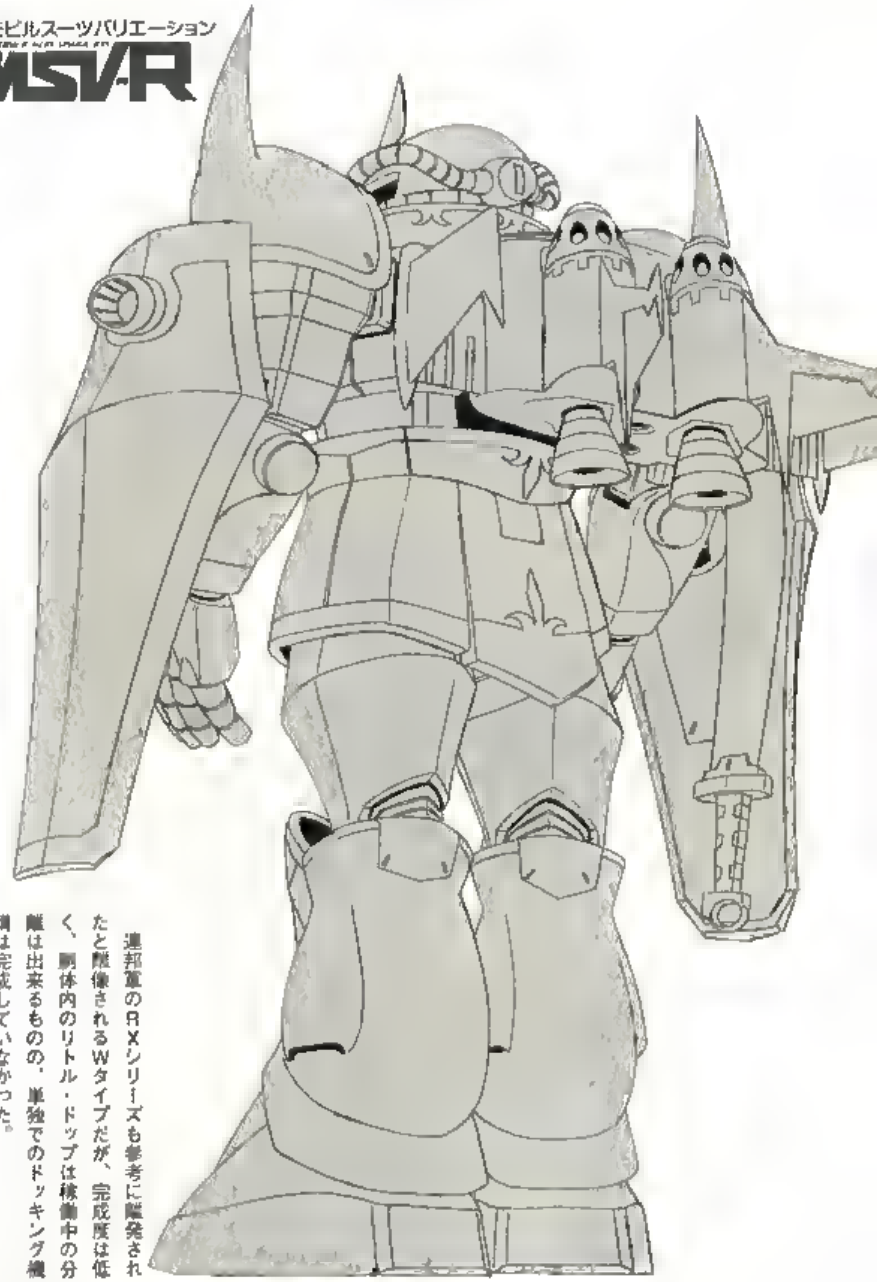
ランドセルにはガトリング砲を装備。基部にマガジンが収められている。



MS-07G-2は兵装類の追加による重量増加の軽減のため機体構造材の再設計も行われ、脚部にスラスターを追加装備。MS-07B同様の機動性能の維持に成功している。機体構造の再設計に手間取ったこともあり、生産数は36機で終了しているが全機が実戦配備されている。

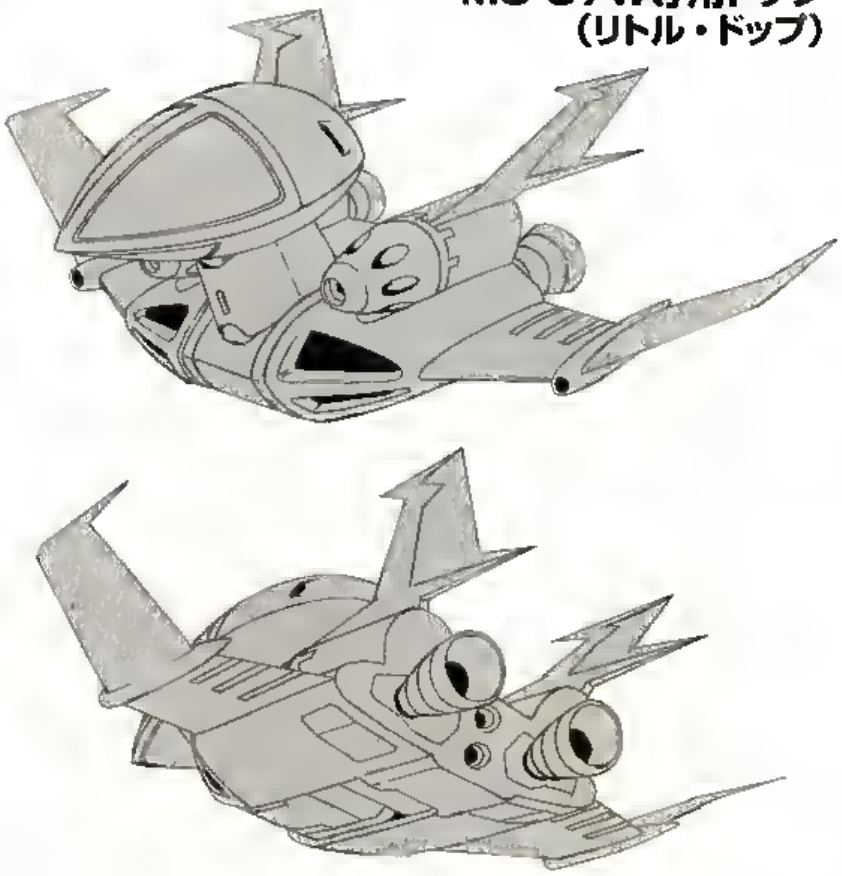
MS-07W グフ複合試験型





連邦軍のRXシリーズも参考に開発されたと推像されるWタイプだが、完成度は低く、胴体内のリトル・ドップは稼働中の分離は出来るものの、単独でのドッキング機構は完成していなかった。

MS-07W専用ドップ（リトル・ドップ）



MS-07W複合試験型グフのコクピットの機能を併せもつ戦闘機、通称リトル・ドップは、ドップに酷似したフォルムをもつ機体だが、07Wのコクピット兼脱出機として再設計された機体である。サイズは一回り小型化され、機能面も一変している。エンジン出力はアップされ、機動性能と航続距離も、ドップ戦闘機よりも向上されている事が、連邦軍の調査で確認されている。

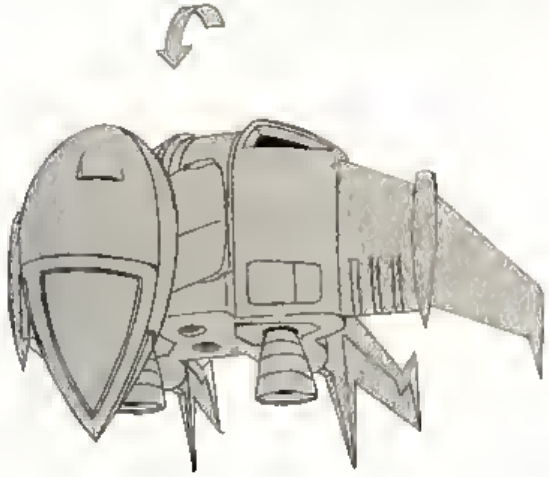
合体時はモビルスーツのランドセルとして機能する胴体部には、軽合金の複合素材を使用、軽量かつ強固な装甲を実現している。

MS-07W発見時に、リトル・ドップの他に、もう一機、コクピット機能を有する製作途中のシーランスに似た小型潜水艦が発見されている。

これらの機体分析を担当した連邦軍技術士官の見解は、MS-07Wはコクピットを換装する事で水陸両用モビルスーツとして開発された機体であると結論づけている。

ドッキング・ベイ

背面の開口部が、MS-07Wグフ専用ドップのドッキング・ベイ。専用トップの換用コクピット部が胴体内に収納される。



リトル・ドップのドッキング姿勢。機首コクピットが180度回転する。胴体部は合体後ランドセルとして機能する。

MS-07G-1／G-2機体解説

MS-07G-1
グフ・ヴィジャンタ

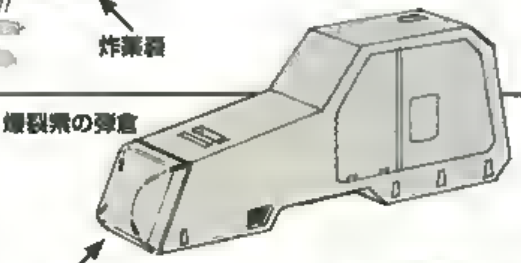
大戦末期、奇襲作戦で数々の戦果を挙げた、戦闘工兵と呼ばれたグフが存在した。

圧倒的な兵力をもって地球侵攻を図る連邦軍に、ジオン公国軍は現状を打開する新たなモビルスーツの開発プランを提案していた。連邦軍との戦闘により日々弱体化する兵力、生産力を活用して最も効果的な戦術を可能とするモビルスーツを必要としていたのである。

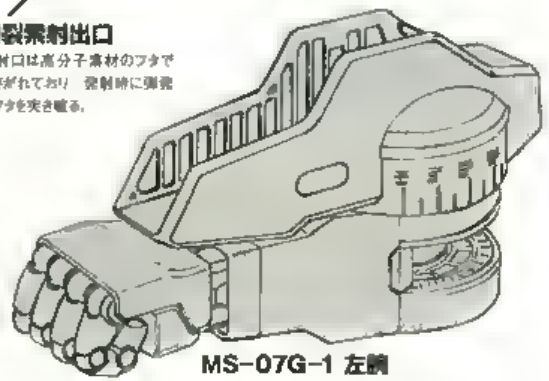
開発陣は要求に応えるべく複数のプランを提示。慎重に検討された末、開発が承認されたのがMS-07Bをベースとしたプランである。機動性能と火力のアップ。単独行でMS-06Jの3倍から4倍の移動能力をもつ機体というプランの概要である。後にこのプランを推した上層部の一人は単独行での移動能力の拡張が選択の決め手になったと証言している。戦況は予断が許されないまでに切迫していたのである。

開発陣は実戦配備が始まったばかりのMS-07Bをベースとした新型モビルスーツの設計に着手するが、設計は難航、開発は大幅に遅れてしまい、プランは再考される事になる。

爆裂索

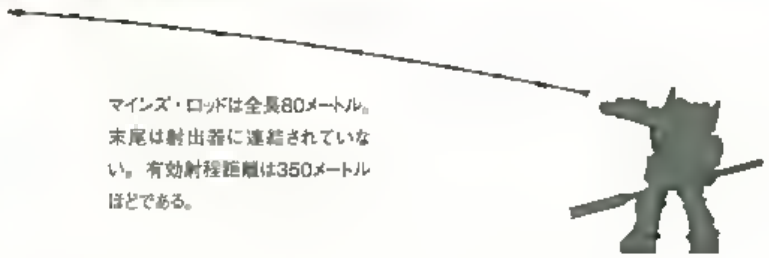


マインズ・ロッドの射出器は独立して旋回可能。コクピットから直接旋回角度を確認できるように射出器側面に目盛りが刻まれている。マインズ・ロッドの弾倉には爆裂索1本が収められている。発射後弾倉の交換が必要となる。

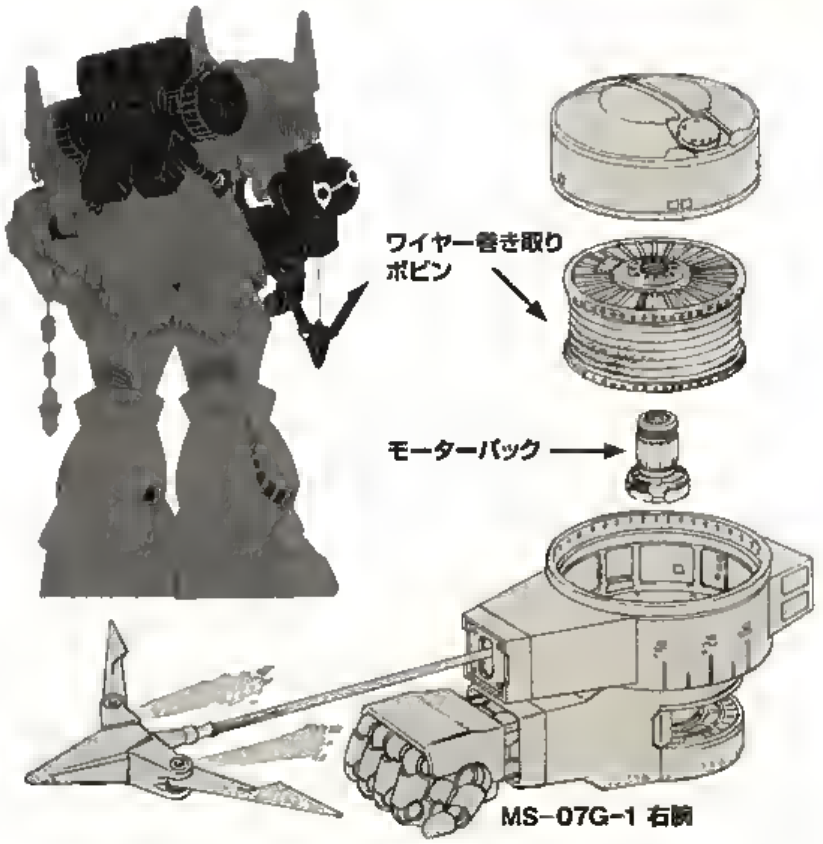


MS-07G-1 左腕

爆裂索の射出図



マインズ・ロッドは全長80メートル。末尾は射出器に連結されていない。有効射程距離は350メートルほどである。



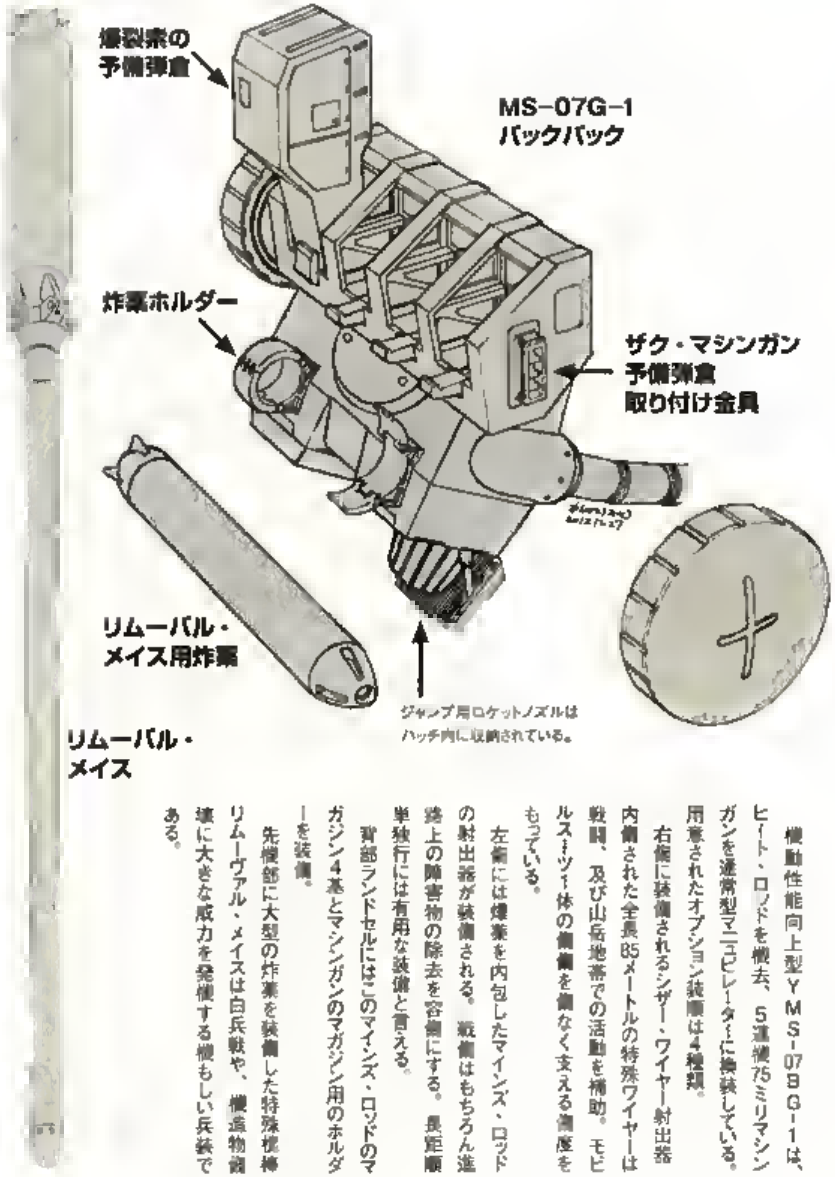
開発陣が設計段階でつまずいたのは、機動性能と火力の向上という、まるで二兎を追うような基本プランが合い成り立たないものであった事が原因であった。

プランは基本から見直された結果、機動性能を向上した機体と火力を向上した機体、2種類の機体を個発して2機セットで運用するというかたちに落ち着いた。

能力を二分したことで開発は順調に進み2機の設計プランがまとめられ、MS-07Bをベースにした改良試作機がそれぞれ製作される事になった。開発陣は製作と並行してオプション装備の開発にも着手していた。悪化する戦況への対応、そして、予想される配備地で性能を十分に発揮するための装備品である。

完成した試作機は、戦ね良好な仕上がりを見せたが、どちらも予定された機動性能には達していなかった。エンジン周りの見直し、更に機体の軽量化が図られる事になった。

この頃に、試作機には開発ナンバーが与えられている。機動性能の向上型にはYMS-07BG-1、火力向上型にはYMS-07BG-2である。



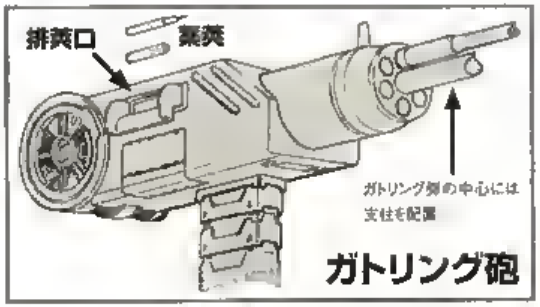
機動性能向上型YMS-07BG-1は、ヒート・ロッドを機去、5連機75ミリマシンガンを通常型マニピレーターに換装している。用意されたオプション装備は4種類。

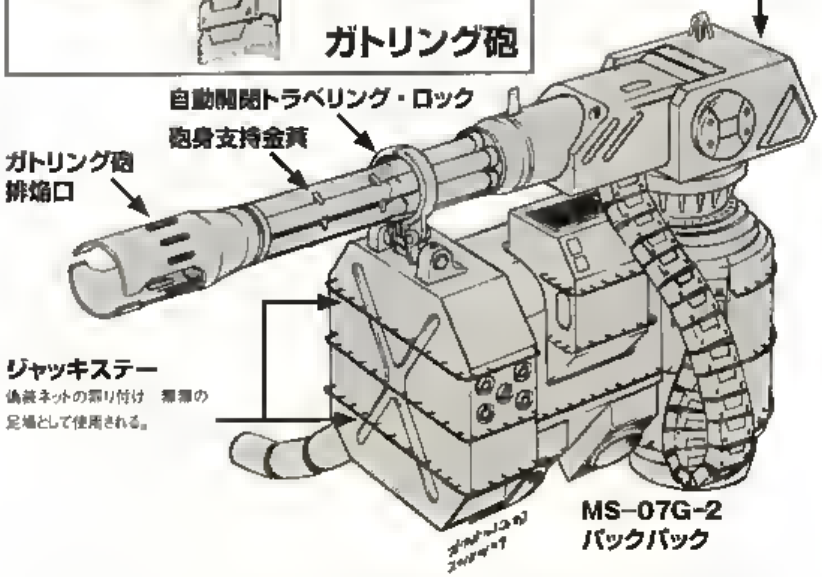
右腕に装備されるシザー・ワイヤー射出器内蔵された全長85メートルの特殊ワイヤーは戦闘、及び山岳地帯での活動を補助。モビルスーツ本体の機動を損なく支える強度をもっている。

左腕には爆薬を内包したマインズ・ロッドの射出器が装備される。戦闘はもちろん進路上の障害物の除去を容易にする。長距離単独行には有用な装備と言える。

背部ランドセルにはこのマインズ・ロッドのマガジン4基とマシンガンのマガジン用のホルダーを装備。

先機部に大型の炸薬を装備した特殊棍棒リムーヴァル・メイスは白兵戦や、機造物破壊に大きな威力を発揮する機もしい兵装である。





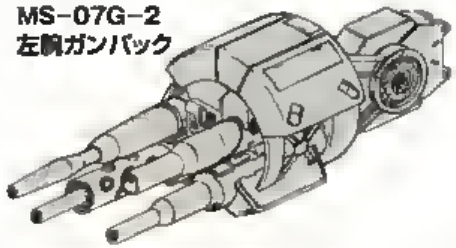
火力向上型YMS-07BG-2は、左腕の5連装マシンガンを4種の火器を装備した大型ガンバックに換装。背部ランドセルには、120ミリマシンガン6基からなるカトリング砲が固定装備された。完成した機体は今次大戦におけるモビルスーツ中、最も強力な火力を有する事になった。

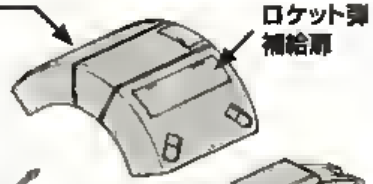
武装増設による加重解消のために徹底した機体の軽量化が図られ、ボリュームアップしながらもベース機のアバーセントアップにとどめられた。

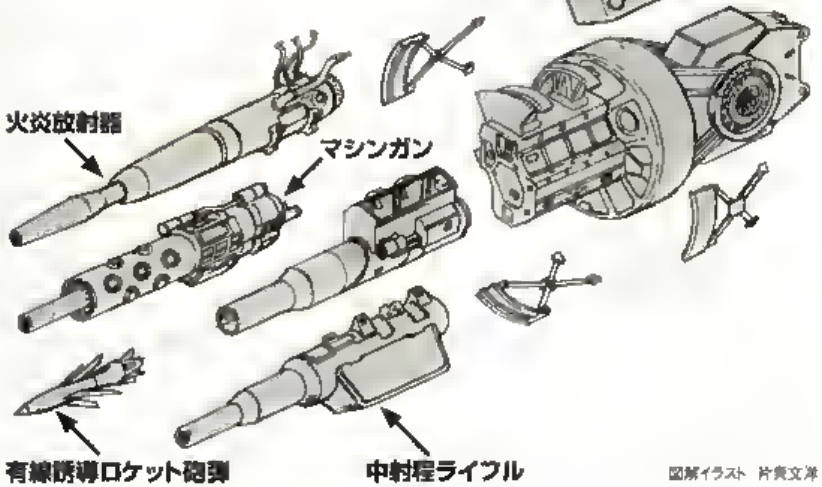
試作1号機に続き製作された試作2号機は各種テスト後、機部の修正を経て完成に至ったが、開発初期のトラブルの影響で当初の予定より2か月遅れであった。

完成した2機を元に北米キャリフォルニア・ベースで量産機が生産され、生産機全てが実戦部隊、主に特務部隊に配備され、夜機などゲリラ戦に参加し、多大な戦果を挙げた事が記録されている。

生産と同時に、それぞれに型式ナンバーMS-07G-1、MS-07G-2が与えられたが、開発陣の付けたニックネーム、戦闘工兵（Combat Engineer）が前線でも定着していたようだ。







図解イラスト　片貴文洋

ザク&グフ開発史

MS-05
ザク

MS-06A
ザクII

一年戦争において国力が連邦軍の三十分の一にも満たないジオン公国軍が、独立戦争を仕掛けるまでに踏み切る事が出来たのは、モビルスーツの完成があればこそであった。ミノフスキー粒子の登場に着目したジオン公国軍は、有視界戦闘における有効な兵器の開発に着手した。構想から12年、MS-05ザクIが完成、初のモビルスーツ部隊、教導隊が編成された。

部隊編成は着々と進められ、MS-05の発展型MS-06ザクIIが完成。完全な戦闘兵器となったモビルスーツを手にしたジオン公国軍は、連邦軍に宣戦布告した。開戦初期ザクIIを主力とする機動部隊はジオン公国軍に一方的勝利をもたらした。

MS-06FザクIIを起点とするモビルスーツ開発の流れは空間戦闘用と陸戦用に分かれていく。

MS-06F
ザクII

MS-06S
ザクII

MS-06J
ザクII

まずMS-06Fをベースにして機動性能を向上した上位機種、MS-06Sを製造。指揮官クラスのパイロットやエースパイロットの機体として使用された。

地球侵攻用としては、陸戦型のMS-06JザクIIを開発。グラナダ基地で生産され、地球侵攻作戦の主力モビルスーツとして活躍している。

開戦初期の侵攻作戦でジオン公国軍は北米のキャリフォルニア・ベースを奪取、地球上での製造拠点とした。ここでMS-06Jの派生型の開発、生産が一年戦争後期まで行われていた。

キャリフォルニア・ベースというのは、二つの基地の名称ではない。海軍軍港、空軍基地、宇宙ポート、各種兵器開発研究所など、合計20にも及ぶ軍事施設の総称である。

このキャリフォルニア・ベースで開発された代表的モビルスーツがMS-06D、MS-06Kである。

MS-06E-3
ザク
強行偵察型

MS-06E
ザク
強行偵察型

MS-06K
ザクキャノン

MS-06D
ザク
デザート
タイプ

MS-06D、MS-06Kの両機はどちらも基本的にはMS-06Jを改良したバリエーションである。

MS-06Dは熱帯・砂漠戦仕様として脚部に関節カバーを追加、ランドセルには大容量の冷却装置が追加されている。生産機のほとんどがアフリカ戦線に送られている。

MS-06Kザクキャノンは、対モビルスーツ戦の支援用に開発されたバリエーションで、モニターアイを全周式に改め、右肩には実弾を使用する180ミリキャノンが装備された。大量生産はされず試作9機の生産で終了している。

MS-06M水中用ザクは、ジオン公国軍の初の水中活動が可能なモビルスーツとして開発されたが、水中での運動性が極めて悪かったために開発は中止されている。

MS-06VとMS-06W、この2つは正式な手順のもとに開発された機体ではない。MS-06Vはアフリカ戦線の工作部隊の手で、使用不能となったザクとマゼラ・ベースを

MS-06R-2
高機動型
ザクII

MS-06R-1A
高機動型
ザクII

MS-06V
ザクタンク

MS-06M
水中型ザクII

流用して現地改修された機体である。MS-06Wはアジア西部で、使用不能となったモビルスーツの物品で現地生産されたバリエーションで、他にグフのパーツを使ったタイプも確認されている。

MS-06Gもキャリフォルニア・ベースで開発された機体で、脚部には同時期に生産されたMS-07Bの技術が活用されていた。MS-06Jの最後の派生型であるが、初期派生型のD型、K型と比べると内容は大きく異なっていた。

大戦初期のジオン公国軍に勝利をもたらした要因の一つに、MS-06E強行偵察型ザクの存在が挙げられる。ランドセルの推進ロケットは大推力のSタイプと同じ物が装備されていた。

大戦中期に開発されたのがMS-06Eの後継機、MS-06E-3高性能強行偵察型である。増速用ブースターと予備タンクを装備 母機から発進して高速での強行偵察を行った。

MSN-01
サイコミュ
高機動
試験用ザク

MS-06Z
サイコミュ
システム
試験用ザク

MS-06G
陸戦高機動型
ザクII

MS-06W

MS-06R-1A高機動型ザクは、MS-06Fの性能向上型として計画された派生型である。開発にはMS-06F後期生産型2機が使用された。改造は、ランドセル、腰スカート、脚部の3点に絞られたが、最終的には全面再設計となった。

初期生産型のMS-06R-1は推進エンジンと、燃料積載機の少なさが指摘されていた。

欠点を克服するためエンジンが換装され、補助燃料タンクはカートリッジ式に変更された。

大戦末期にはMS-06R-1Aの発展型、MS-06R-2が開発された。MS-06R-1Aとの相違点は、装甲材質の変更、脚部装甲の強化、燃料積載機の増加、搭乗方法の変更などである。

MS-06R-2は、MS-06Fの後継機選定でMS-09Rと争ったが、一部性能では劣りながらも総合性能ではMS-09Rに及ばず、4機が完成した時点で生産中止となって

機モビルスーツバリエーション
MSV-R

MS-07B
グフ

MSN-02
ジオング

YMS-07
プロトタイプ
グフ

いる。

ザクシリーズの最後の派生型はサイコミュシステムのテスト機としてMS-06Fを改良して製作されたMS-06Zである。MS-16(仮称)に搭載される有線ビーム銃を小型化した物を装備して各機のデータ収集を行った。更に、MS-06Z2号機を改造して製作されたMSN-01は高機動レベルでのサイコミュシステム作動データ収集に使用された。

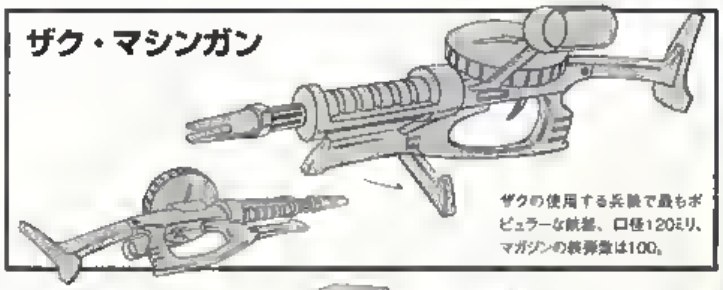
収集された2機のテストデータは結集され、MS-16改め、MSN-02ジオング開発に貢献するかたちとなった。

MS-06Jに限界を見い出したジオン公国軍は白兵戦用に機動性能を向上したモビルスーツの開発を進め、YMS-07を経て、固定武装を装備したMS-07グフを完成させる。MS-06Jの直系ではないが、ザクの汎用性を短所として勘発された経緯は、影響されている事の証でもある。

MS-06シリーズ・兵装類一覧

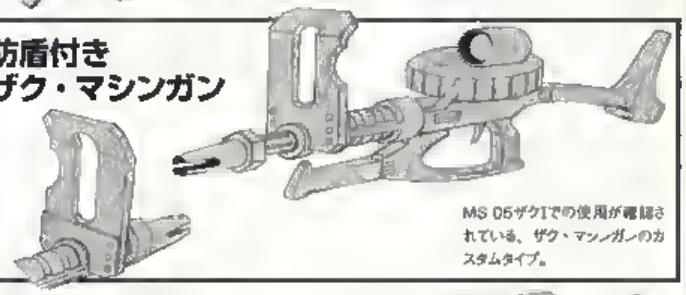
マシンガン

ザク・マシンガン



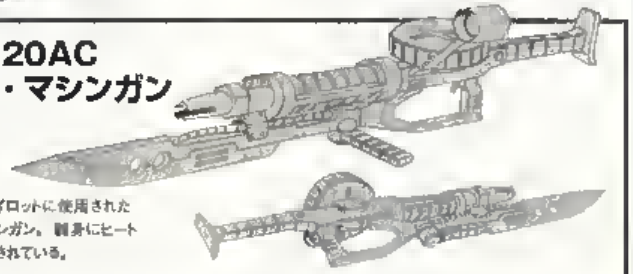
ザクの使用する兵装で最もポピュラーな銃器。口径120ミリ、マガジンの装弾数は100。

防盾付き ザク・マシンガン



MS-05ザクIでの使用が確認されている、ザク・マシンガンのカスタムタイプ。

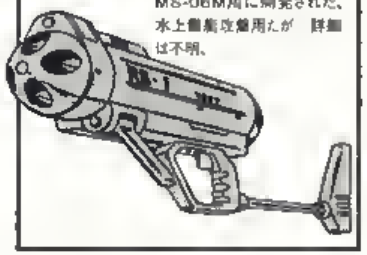
M-120AC ザク・マシンガン



エースパイロットに使用された試作マシンガン。銃身にヒート剣が装備されている。

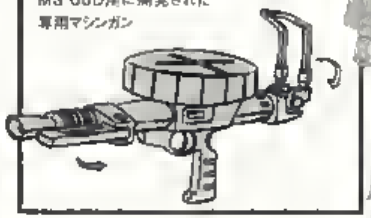
サブロックガン

MS-06M用に開発された、水上戦闘改修用だが　詳細は不明。



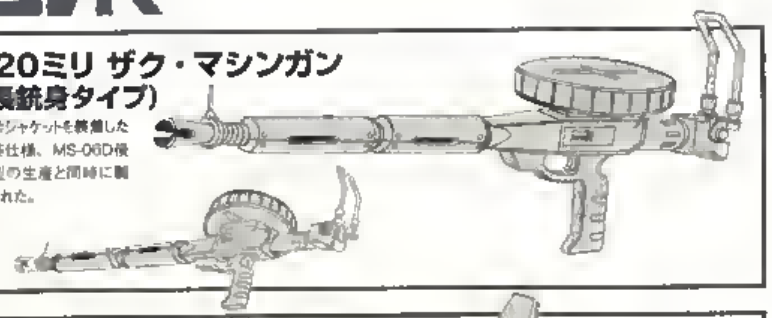
M-120AS ザク・マシンガン

MS-06D用に開発された専用マシンガン



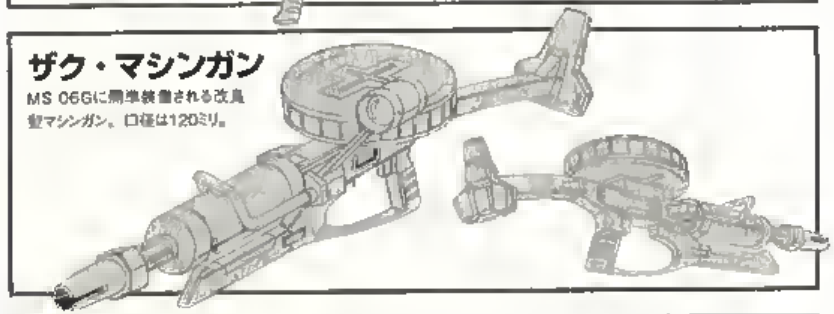
120ミリ ザク・マシンガン（長銃身タイプ）

空冷ジャケットを装備した熱帯仕様、MS-06D後期型の生産と同時に製造された。



ザク・マシンガン

MS-06Cに標準装備される改良型マシンガン。口径は120ミリ。

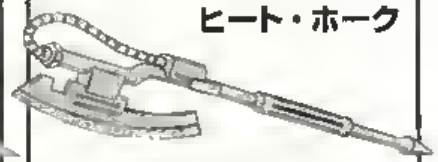


ヒート・ホーク

大型ヒート・ホーク

刀身を大型化したカスタムタイプ。S型ザクで使用されることが多い。

ヒート・ホーク



刀身を高熱化し敵の装甲を焼き切る、ザクの標準的な格闘用兵器。

モビルスーツの有用性を決定づけた要因の一つとして、兵装類の拡張が挙げられる。

マニピレーターで操作できる兵装類を用意する事で、モビルスーツの攻撃力を容易に変更する事が可能だった。整備、稼働率の面でもメリットは多く、ジオン公国軍は、主力モビルスーツ、ザクシリーズ用に様々なオプション兵装を開発している。

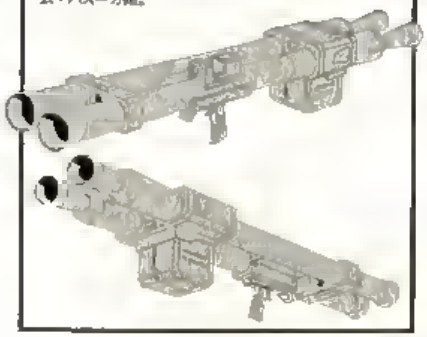
標準兵装として最も使用頻度が高いのがザク・マシンガンである。120ミリ弾を使用する大型機関砲である。装弾数が多く、持ち回りのよさも好まれる要因となっている。

カスタムタイプも含め数種類のバリエーションがあるが、ヒート剣を装備した特殊なタイプを除き、機種を選ばず使用する事が可能である。

白兵戦用として開発されたヒート・ホークもザクの兵装としては標準的なものの一つである。

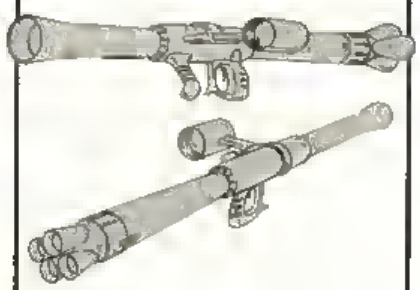
2連バズーカ

エースパイロットに使用されたカスタム・バズーカ砲。



ザク・バズーカ

口径240ミリのバズーカ砲。ザクの標準的装備の一つ。

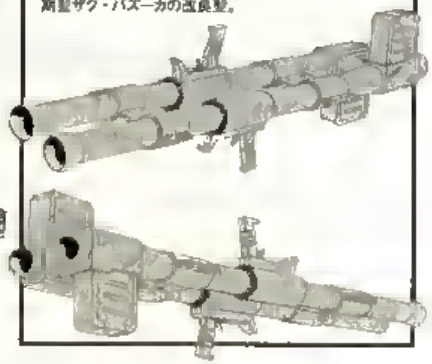


バズーカ

MS-05用に開発された旧式バズーカ砲。

連結バズーカ

パイロットの要望で製作された。初期型ザク・バズーカの改良型。



マゼラ・トップ主砲

マゼラ・トップの車体を流用した、カスタムキャノン。

ヒート・ホークは刀身の摩熱で装甲を溶かし、溶断するオノ状の武器である。カスタムタイプとしては、「黒い三連星」のMS-06Sが使用した大型ヒート・ホークがあるが、S型以上の機体での使用が可能とされている。

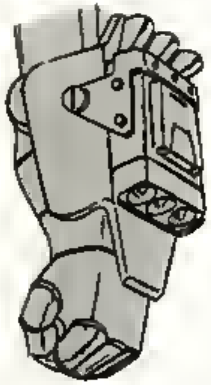
空間戦闘でよく使用されるのがバズーカ砲。口径240ミリのザク・バズーカが最もポピュラーなタイプと言えるだろう。弾は通常火薬の弾頭と核弾頭の2種類があり、主に対艦攻撃に使用される。

強度の高いパイロット向けに製造されたカスタムタイプが数機生産されているが、どれも発射時の反作用で機体姿勢が乱れるため、強い強靱テクニックが必要と言われていた。

この他には、弾前倒などで使いやすいように砲身を切り詰めた、手軽なカスタマイズも行われていたらしい。

ラッツリバー 3連装ミサイルポッド

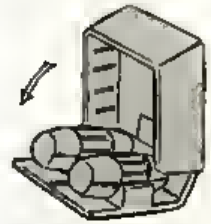
MS-06D開発時に生産された小型ミサイルポッド。Dタイプ以外のザクでも使用可能である。



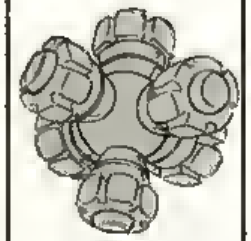
脚部ロケット弾ポッド

陸戦型ザク用に開発されたオプション兵装。MS-06J以外でも使用が可能である。

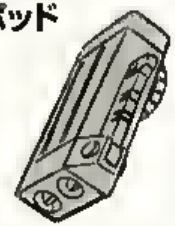
SA-712 クラッカーポッド



クラッカー



ラッツリバーP-3 連装ミサイルポッド



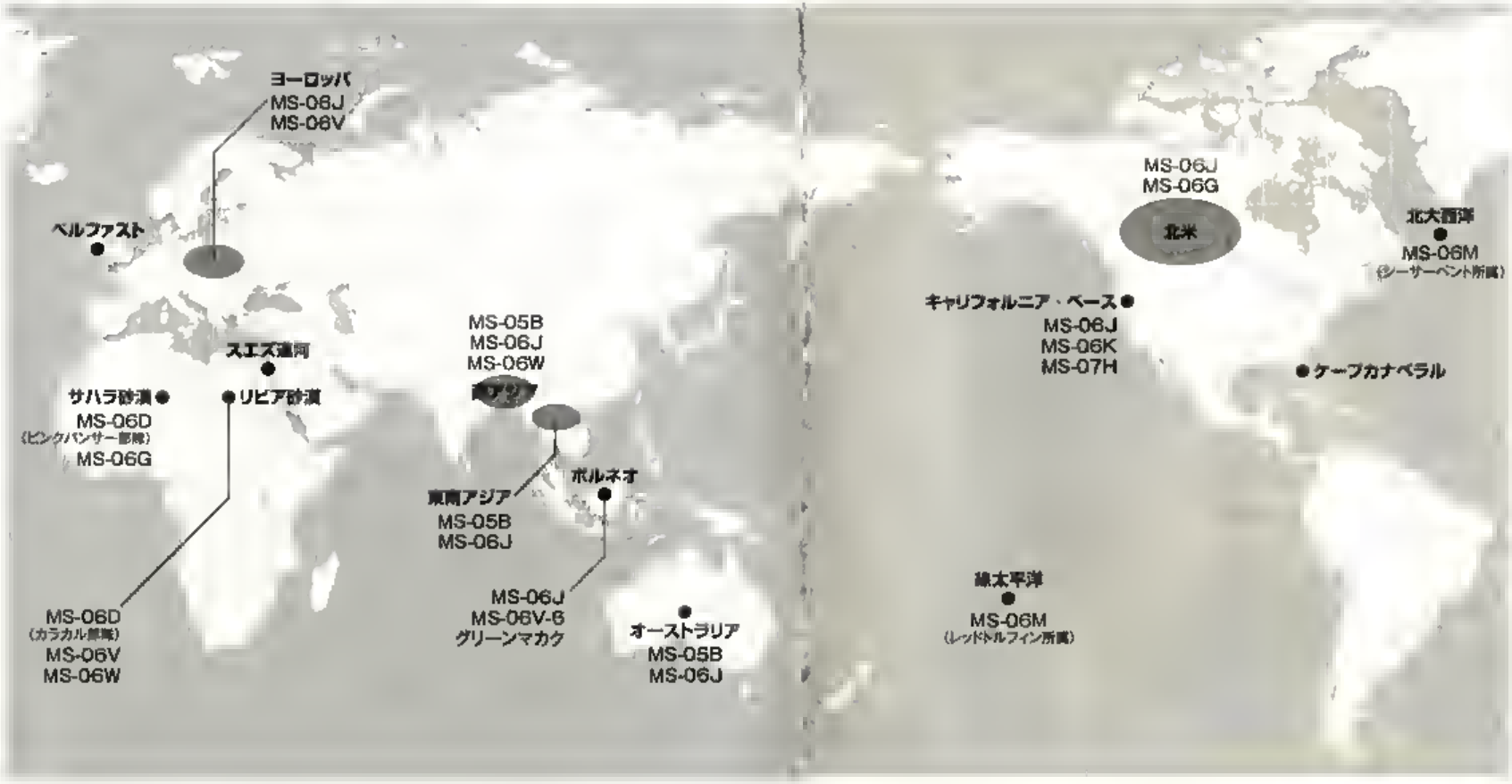
バズーカ砲ではないが、変わり種のカスタム兵装として、マゼラ・トップの砲身を流用して作られたハンドキャノンの使用例が確認されている。

地球に降下したMS-06J用に脚部に装着して使用する、ロケット弾ポッドが開発された。空間戦闘では発射時の反作用の問題から実現されなかった兵装だが、地上では有効な兵装としてMS-06Jをはじめ、Dタイプや、Kタイプでも使用されていた。

熱帯・砂漠戦用に開発されたMS-06Dにも2種類の専用ミサイルポッドが同時に開発され弾薬装備されているが、他のザクとの互換性は不明である。

モビルスーツ用の投擲兵器として開発されたクラッカーは、敵に投げて、手榴弾として使用する。爆風の6つの突起が爆発と同時に飛散する。直撃でもない限りモビルスーツに効果はないが、ザクの標準装備の一つである。

地球侵攻軍・ザク&グフ配置図



開戦から3か月目の0079年3月、ジオン公国軍はモビルスーツを含む大規模な降下作戦を3回実施している。

特に第2次降下作戦は、降下作戦はとしては最大のもので、第2、第3地上降下軍団、航空部隊と海洋部隊の一部、ならびに地球攻撃軍司令部が降下している。

降下ポイントは北アメリカの東西両沿岸部で、作戦目標は軍事及び工業施設の占拠であった。とくに軍事施設では、無傷に近いかたちで制圧できたキャリフォルニア・ベースが、後の地球侵攻に重要な地位を占める。

3回の降下作戦で、北アフリカからアジア西部、東南アジア、北アメリカを地球侵攻軍が制圧している。

地球に降下したモビルスーツの主力は、第1次がMS-06F(後期型)、第2次、第3次がMS-06Jであった。

制圧した工業施設は制圧時の損傷を2週間ほどで復旧。生産ラインを稼理すると、MS-06Jを大量に生産。世界各地の制圧地に展開する侵攻部隊に送り出している。

MS-06Jに続き、降下作戦時から、局地戦としてもっとも要望の強かった無着、砂漠戦用MS-06Dの生産を開始、完成機全てが激戦区アフリカ戦線に空輸されている。

生産ラインでは引き続きMS-06K、MS-06G、MS-07Bなどが順次生産され、前線部隊へ潤沢な補給が行われていた。

だが、地球侵攻軍の拠点として機能したキャリフォルニア・ベースも制圧から約6か月、ついに連邦軍が奪還。最大の補給路を絶たれた世界各地に展開する侵攻軍は次第に衰退していったのである。

機動戦士ガンダム
MSV-R

黒い三連星機から、ジオン公国軍の陸戦モビルスーツ〝グフ〟G2まで！
一年戦争を戦い抜いた名機〝ザク〟と派生型（バリエーション）をここに！

© 創通・サンライズ

カバーイラスト：兼房光
カバーデザイン：小林博明（Kプラスアートワークス）

Kadokawa Comics A

機動戦士ガンダム

MSV-R

モビルスーツバリエーション

ザク編

メカニックデザイン:
大河原邦男
編:草刈健一

テクニカル&ヒストリー

KADOKAWA

Kadokawa Comics A

ZAKU

モビルスーツバリエーション

ザク編

メカニックデザイン：大河原邦男
編・構成：草刈健一

KCA378-2
角川書店

機動戦士ガンダム

MSV-R

モビルスーツバリエーション

ザク編

メカニックデザイン:
大河原邦男
編:草刈健一

テクニカル&ヒストリー

Kadokawa Comics A

9784041205921

ISBN978-4-04-120592-1
C0979 ¥800E

定価:本体800円(税別)

発行:株式会社KADOKAWA

KADOKAWA

1920979008007

Kadokawa Comics A

機動戦士ガンダム

モビルスーツバリエーション

ザク編

大河原邦男
編・草刈健一

KCA378-1
角川書店